

兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書 I

平成22(2010)年3月

兵庫県教育委員会

例　言

- 1 本書は、兵庫県立考古博物館の調査テーマの1つである「兵庫県内における古代官道に関する調査」にかかる重要遺跡についての、所在・範囲・内容確認調査の報告書で、文化庁より補助金の交付を得ている。
- 2 調査は、平成19年度に空中写真測量と分布調査、平成20年度に空中写真測量と分布調査、遺跡探査、発掘調査、平成21年度に分布調査と遺跡探査、発掘調査を実施した。
- 3 調査の進行にあたっては、古代官道調査委員会を組織し、調査の各段階で委員会における検討を加えた。委員会の委員は、山中敏史（奈良文化財研究所）、馬場 基（前同）、木本雅康（長崎外国语大学）の3氏に委嘱した。
- 4 遺跡探査に関しては、日本文化財探査学会（平成20年度会長 亀井宏行東京工業大学教授、平成21年度会長 和田晴吾立命館大学教授、現地調査 工藤博司）の指導・協力を得た。
- 5 空中写真撮影および図化は、株式会社ジオテクノ関西と委託契約を交わして行った。
- 6 本書の第1図は、兵庫県教育委員会発行の「歴史の道調査報告書」第2～4・6集をもとに作成した。第2図は、国土地理院発行の1/50,000「高砂」（平成10年11月1日発行）、第3図は明石市発行の1/10,000「明石市地形図（西部）」（平成17年11月印刷）、第5図は加古川市発行の1/10,000「加古川市域図3～6」（平成20年3月作成）、第25図は国土地理院発行の1/25,000「加古川」（平成21年1月1日発行）、「三木」（平成21年1月1日発行）、「高砂」（平成17年9月1日発行）「東二見」（平成17年10月1日発行）を用いた。
- 7 本書の図版に示す方位は平面直角座標系第V系に則っており、座標値は世界測地系である。水準高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした海拔高度である。
- 8 本文については山下史朗・中川渉・中村弘が分担執筆した。文責については目次に表記している。また第3章第1節では、青木哲哉（立命館大学）から玉稿をいただいた。自然科学分析では、白土・鉄浜の成分分析をパリノサーベイ株式会社に、炭化物のAMS測定をパレオラボ東海に委託し、その報告を掲載している。編集は、折井千枝子・下菱多佳子・三澤朋未・森本貴子の補助を得て、中川が担当した。
- 9 本書にかかるる遺物・写真・図面は、兵庫県立考古博物館が管理・保管している。
- 10 調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。

池田裕英、井澤弘昌、石野博、石松崇、稻原昭嘉、乾新治、乾泰朗、今里幾次、浦上雅史、大谷輝彦、大谷公春、大谷佳一、大西隆、岡本一士、小川秀樹、小川政雄、加賀見省一、岸本道昭、小玉敏也、坂口弘貢、定松佳重、潮崎誠、島田拓、田井恭一、田中一秀、田中弘樹、谷本進、玉城一枝、寺沢知子、徳原多喜雄、永井修身、中島雄二、成田雅俊、西川英樹、西村和彰、橋本誠二、長谷川太郎、原田憲二郎、藤木透、藤戸翼、宮本佳典、向井一雄、森岡秀人

明石市教育委員会、明石市立文化博物館、朝来市教育委員会、芦屋市教育委員会、稲美町教育委員会、オークラ輸送機㈱、加古川市教育委員会、上郡町教育委員会、香美町教育委員会、神戸女子大学、篠山市教育委員会、佐用町教育委員会、新温泉町教育委員会、洲本市教育委員会、たつの市教育委員会、丹波市教育委員会、豊岡市教育委員会、播磨町、播磨町教育委員会、播磨町郷土資料館、姫路市教育委員会、兵庫県淡河川山田川土地改良区、南あわじ市教育委員会、養父市教育委員会（敬称略、五十音順）

目 次

例 言

第1章 調査の経過（中川）

第1節 調査の趣旨	1
第2節 平成19年度の調査	1
第3節 平成20年度の調査	1
第4節 平成21年度の調査	2

第2章 調査の成果

第1節 分布調査（中川）	3
第2節 地中レーダー探査（中川）	9
第3節 加古川市古大内遺跡の発掘調査（中村）	17

第3章 分析・鑑定

第1節 邑美駅家～賀古駅家における古代山陽道と地形環境（青木）	46
第2節 古大内遺跡出土白土・鉄滓の成分分析（パリノサーヴェイ株式会社）	53
第3節 古大内遺跡出土炭化物のAMS測定（パレオラボ東海）	63

第4章 まとめ

第1節 古代官道研究の現状と課題（山下）	66
第2節 賀古駅家について（中村）	72
第3節 邑美駅家について（中川）	81

付 章

賀古駅家、邑美駅家に関する史料（抄）	87
--------------------	----

表 目 次

表1-1 兵庫県下の古代官道関連遺跡の現況調査(1)	5
表1-2 兵庫県下の古代官道関連遺跡の現況調査(2)	6
表1-3 兵庫県下の古代官道関連遺跡の現況調査(3)	7
表2 長坂寺遺跡・古大内遺跡調査一覧表	9
表3 土器・金属器一覧表	44
表4 瓦一覧表	45
表5 試料表	55
表6 化学組成	57
表7 出土鉄滓の調査結果	57
表8 千種川上・中流域における検出鉄滓分析結果について	59
表9 兵庫県下佐用郡内砂鉄と鉄滓の化学組成	60
表10 測定試料及び処理	63
表11 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	64
表12 文献に残る播磨国の駅家	67
表13 駅館院の構成要素比較	70

挿 図 目 次

第1図 兵庫県下の古代官道と駅家	4
第2図 古代山陽道と関連遺跡・寺院	8
第3図 長坂寺遺跡の位置	10
第4図 長坂寺遺跡の調査区	11

第5図 古大内遺跡の位置	14	第25図 古代山陽道、駅家および地形分類図の位置	47
第6図 古大内遺跡の調査区	15	第26図 A～C地点間の地形分類図	49
第7図 方形地割と調査区	18	第27図 C～E地点間の地形分類図	50
第8図 トレンチ配置図	19	第28図 E～G地点間の地形分類図	51
第9図 1～3トレンチ平面図	20	第29図 出土壁材のX線回折図	54
第10図 1～3トレンチ土層断面図	21	第30図 白土試料写真と灰像写真	61
第11図 SB01	22	第31図 鉄滓の顯微鏡組織	62
第12図 4～6トレンチ平面図	24	第32図 暦年較正結果	65
第13図 4～6トレンチ土層断面図	26	第33図 小丸遺跡と落地遺跡の駅館院配置図	
第14図 SB02	27	69
第15図 遺構断面図（1）	30	第34図 字限図	72
第16図 遺構断面図（2）	31	第35図 地籍図	73
第17図 7トレンチ平面図	32	第36図 同系の鬼瓦	75
第18図 出土遺物（土器・鉄製品）	34	第37図 遺構想定図（奈良時代）	77
第19図 出土遺物（瓦1）	36	第38図 山陽道と賀古駅家（想定図）	78
第20図 出土遺物（瓦2）	37	第39図 遺構想定図（平安時代終わり～鎌倉時代）	
第21図 出土遺物（瓦3）	38	79
第22図 出土遺物（瓦4）	39	第40図 長坂寺遺跡の旧状重ね図	84
第23図 出土遺物（瓦5）	40		
第24図 石製唐居敷・礎石	43		

挿入写真目次

写真1 古大内遺跡現地説明会	2	写真8 地中レーダー探査（A～2区）	12
写真2 古代官道調査委員会視察状況	2	写真9 野井戸の断面観察	13
写真3 姫路市北宿遺跡踏査状況	3	写真10 地中レーダー探査（A区）	13
写真4 上郡町高田宿遺跡踏査状況	3	写真11 地中レーダー探査（B～1区）	13
写真5 朝来市柴遺跡踏査状況	3	写真12 丸瓦側端面の棒状圧痕	35
写真6 洲本市下内膳の駅路標柱とみられる立石	3	写真13 砧水記念碑	83
.....	3	写真14 岩岡支線溢池水路実測平面図 其九（部分）	
写真7 測定ラインの設定（C区）	12	83

図版目次

図版1 長坂寺遺跡の探査結果	図版3 古大内遺跡の探査結果
図版2 長坂寺遺跡の探査全体図	図版4 古大内遺跡の探査全体図

写真図版目次

カラー図版1 長坂寺遺跡航空写真	写真図版1 古大内遺跡 1～3トレンチ
カラー図版2 古大内遺跡航空写真	写真図版2 古大内遺跡 4～5トレンチ

- | | | | |
|--------|------------------|--------|----------|
| 写真図版3 | 古大内遺跡 5 トレンチ | 写真図版11 | 出土遺物 (1) |
| 写真図版4 | 古大内遺跡 6 トレンチ (1) | 写真図版12 | 出土遺物 (2) |
| 写真図版5 | 古大内遺跡 6 トレンチ (2) | 写真図版13 | 出土遺物 (3) |
| 写真図版6 | 古大内遺跡 6 トレンチ (3) | 写真図版14 | 出土遺物 (4) |
| 写真図版7 | 古大内遺跡 6 トレンチ (4) | 写真図版15 | 出土遺物 (5) |
| 写真図版8 | 古大内遺跡 7 トレンチ | 写真図版16 | 出土遺物 (6) |
| 写真図版9 | 大歳神社 唐居敷 (1) | | |
| 写真図版10 | 大歳神社 唐居敷 (2) | | |

第1章 調査の経過

第1節 調査の趣旨

平成19年10月に開館した兵庫県立考古博物館では、その事業計画の1つの柱として、調査研究を通じて「地域文化の成り立ちを解明し、新たな地域像を創りだすため、総合的・学際的な体制による調査研究を推進し、その成果を発信・活用する」ことを掲げている。そうした目標に沿った調査研究事業の個別研究分野を設定するにあたり、兵庫県全域をエリアとし、県下市町との連携を図りながら進められる課題として「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」をテーマの1つに選定した。

山陽道・美作道・山陰道・南海道という4本の主要な古代官道が県内を通るという兵庫県にとって、「交通・交流」は地域文化を解くキーワードであり、最もふさわしいテーマと考えられた。特に山陽道は兵庫県内において、広い範囲で明瞭に痕跡を残しており、たつの市小丸遺跡（布勢駅家）・上郡町落地遺跡（野原駅家）の発掘調査によって、駅家研究においても全国をリードしている分野である。また文献資料の上でも『播磨國風土記』の存在が大きい。

こうした好条件に恵まれる一方、山陽道の上記以外の駅家については実態が明らかでなく、山陰道・南海道にいたっては、断片的に関連資料が知られているにすぎない。逆に言えば、これまでの成果の蓄積を活かせば、未解明の部分にメスを入れる機運となる可能性がある。

以上のような見通しのもと、兵庫県内の古代官道に関わる重要遺跡の所在・範囲・内容を探る調査を進め、将来的には県内における古代官道の正確なルート、駅家の位置と性格と、それに関連する官衙の所在地などを突き止めることを長期的な目標とする。また短期的には、考古博物館直近の駅家推定地である明石市長坂寺遺跡（仮称：邑美駅家）・加古川市古大内遺跡（賀古駅家）を対象に調査を進め、その成果・手法を評価することで、次回の調査にフィード・バックさせることを狙いとする。

第2節 平成19年度の調査

県内に所在する古代官道および駅家推定地の現状を把握するため、関連遺跡を踏査するとともに、当該市町教育委員会の担当者に取材して、これまでの調査成果や文献資料などについて調査した。調査は県立考古博物館の職員が分担して行い、その内容については、別掲一覧表（表1-1～3）にまとめた。

また山陽道の古大内遺跡・長坂寺遺跡の調査を手がける基礎資料として、両遺跡を結ぶ区間の古代山陽道に沿った空中写真撮影と、両遺跡周辺の現況地形測量図を作成した。

第3節 平成20年度の調査

古代官道に関する調査を本格的に着手するにあたり、兵庫県内の古代官道の調査と保護活用の方法の検討を目的とした「古代官道調査委員会」を組織し、委員を下記の3名の学識経験者に委嘱した。

会長 山中敏史（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）：考古学、官衙遺跡

委員 馬場 基（同上）：文献史学、古代交通史

委員 木本雅康（長崎外国語大学）：歴史地理学、古代交通路

第1回の古代官道調査委員会は12月12日に開催し、平成20年度の調査方針について審議した。その結果、長坂寺遺跡・古大内遺跡の両遺跡を対象として、これまでの調査研究成果や地図・字限図などの資料収集、遺跡探査による予備調査を踏まえた上で、発掘調査を実施するという方針が支持された。

遺跡探査については、日本文化財探査学会の協力を得て、同学会の工藤博司氏指導のもと、地中レーダーを用いた物理的探査を実施した。長坂寺遺跡では、駅館院推定域の現況が水田のため、土地所有者の承諾・協力を得て、農閑期に探査時期を設定した。一方、古大内遺跡では市街化が進み、対象地が神社境内・民家・駐車場となっているため、まとまった範囲を調査するのが困難な状況であった。そこでこれまで駅館院推定範囲とされてきた方形地割りの東外側にあたる畠地を調査箇所に選定し、土地所有者の承諾・協力を得て、長坂寺遺跡と併せて探査を実施した。

古大内遺跡では、探査成果を踏まえて発掘調査を実施した。調査成果は3月28日の現地説明会で一般に公開し、378人の参加者があった。

3月25日には第2回の古代官道調査委員会を開催し、当年度に調査した長坂寺遺跡・古大内遺跡の調査結果の報告と評価・検討、および次年度以降の調査計画についての検討を行った。

第4節 平成21年度の調査

6月14日に立命館大学で行われた日本文化財探査学会で、古大内遺跡の調査事例を報告するとともに、今年度の調査協力についても了解を得た。

古大内遺跡では前回の調査トレンチを拡張する形で発掘調査を再開し、前年度の調査における課題を追究した。同時に駅館院推定範囲内の現況についてのデータを得るために、土地所有者と事業者の承諾・協力を得て、発掘調査地に隣接する工場駐車場において地中レーダー探査を実施した。調査成果は7月20日の現地説明会で一般に公開し、250人の参加者があった。さらに8月8日には考古博物館講堂において、古大内遺跡の調査報告会を催し、150人の参加者があった。

長坂寺遺跡においても、前年度に引き続いだ地中レーダー探査を行い、前回の調査で空白であった、駅館院推定域の西辺を埋める形となった。

第1回の古代官道調査委員会は7月14日に開催し、古大内遺跡の発掘調査成果を評価検討するとともに、追加の遺跡探査と報告書作成に向けての討議を行った。第2回の古代官道調査委員会は11月17日に開催し、両遺跡の調査成果の検討、調査報告書の内容、来年度以降の調査計画などについて審議した。

年度後半には、報告書刊行に向けて、調査資料の整理作業を行った。整理作業は中村 弘が担当し、遺物の洗浄は下麦多佳子・三澤朋未が、遺物の整理・実測、図面のトレース等は折井千枝子・森本貴子が行った。古大内遺跡から出土した鉄滓の成分分析及び白土に関する分析はパリノサーウェイ株式会社に、炭化物のAMS測定はパレオラボ東海に委託した。

なお平成20・21年度にわたり、立命館大学青木哲哉先生より微地形分析の面から指導をいただいた。



写真1 古大内遺跡現地説明会



写真2 古代官道調査委員会視察状況

第2章 調査の成果

第1節 分布調査

県内の主要官道である山陽道・美作道・山陰道・南海道およびその支路と、駅家に比定される関連遺跡の分布調査を平成20年3月に実施し、古代官道および駅家推定地の現状を把握した。同時に、当該市町教育委員会の担当者に面会して、聴き取り用の調査シートをもとに、従前の調査成果や文献資料などについて取材した。その成果は、今後の調査を進める上での基礎資料として、表1-1～3にまとめた。

踏査を実施した中で、山陽道に関するいくつかの新しい知見もあった。まず「佐突駅家」に比定されている姫路市北宿遺跡では、これまで未周知の範囲で奈良時代の瓦を採集したため、北東側に遺跡の範囲が広がる可能性も考えられるとの指摘があった。また「高田駅家」についても、従来の比定地とされている上郡町神明寺遺跡とは別地点である高田宿遺跡周辺で奈良時代の瓦を採集し、立地の面からも駅家の新たな候補地になると考えられる。

山陰道・南海道については、最近の調査成果によって新たなデータが蓄積されてきている。特にほぼ山陰道に沿ったルートを通る北近畿農園自動車道に伴う発掘調査では、「栗鹿駅家」の関連遺跡である朝来市柴遺跡から出土した「驛子…」と書かれた木簡や、朝来市加都遺跡で見つかった「但馬道」と考えられる直線道路遺構など、直接的な証拠が見つかっている。また南海道では、三原平野にある南あわじ市轄多遺跡で官衙的な遺物が出土しており、「神本駅家」に関わる状況証拠を示すものと考えられる。ただし山陰道・南海道については、そのルートや駅家の位置など、未確定の部分がほとんどというのが現状で、今後の研究の余地が多く残されている。



写真3 姫路市北宿遺跡踏査状況



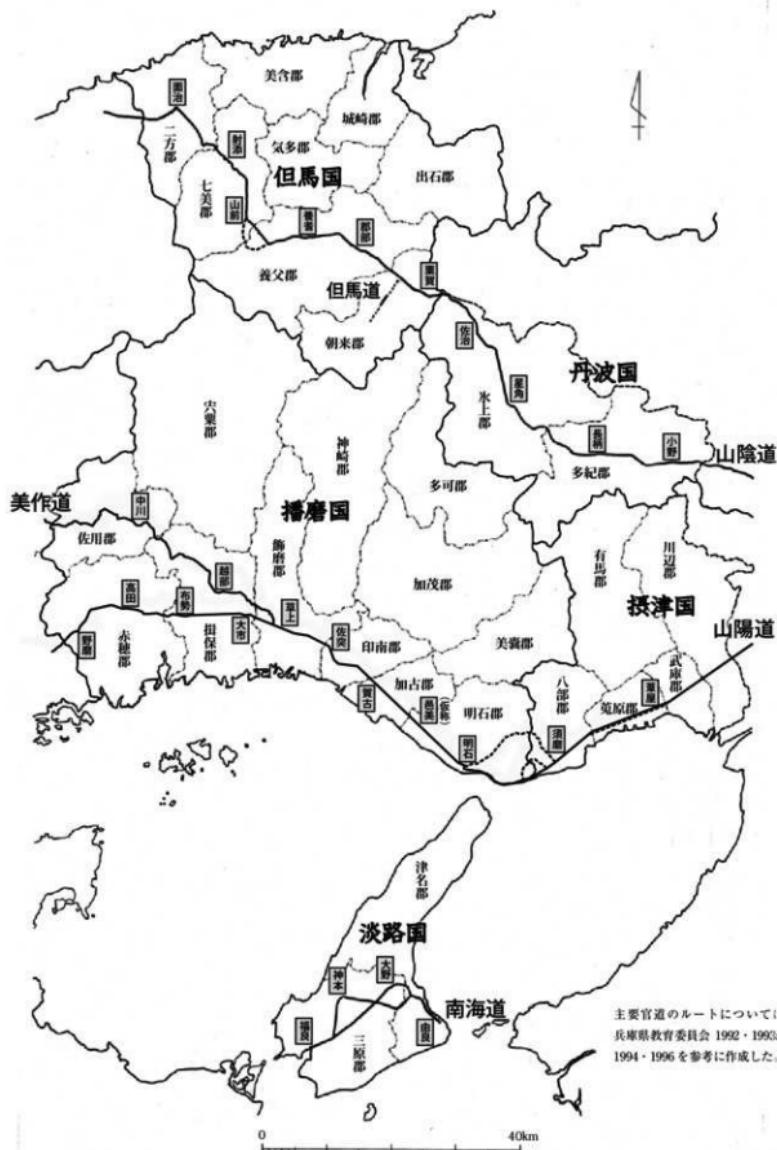
写真4 上郡町高田宿遺跡踏査状況



写真5 朝来市柴遺跡踏査状況



写真6 洲本市下内膳の駅路標柱とみられる立石



第1図 兵庫県下の古代官道と駅家

表1-1 兵庫県下の古代官道関連遺跡の現況調査（1）

表の項目凡例

調査年月日	官道名	駅名	区間、所在地	道路名	調査担当	調査日	所管教育委員会	地形、現況	遺構の有無	調査範 域見、その他の
-------	-----	----	--------	-----	------	-----	---------	-------	-------	----------------

2007144	山陽道	葦原	芦屋市西山町	芦屋庵寺	中川 涉	2008/3/10	芦屋市教育委員会 森岡秀八	芦屋川右岸の崩 状地帯	塔心礎	約90haの 確認調査										
現状は市街地で、旧状はうかがえない。阪急神戸線から1本北側の道に面するあたりが庵寺の中心で、昭和42年調査時の碑が建つ。塔心礎とみられる石柱は現在、芦屋市立美術博物館に移設保管。																				
北から順に森岡説、足利利説、吉吉本説、高橋説とする。																				
I森吉説はJRと国道2号の間の「大字名」である。JRと「西山町」、「大字野」を併記とする。																				
II足利説はJRと国道2号が並ぶ階層でいるものとする。																				
III吉吉説はJRと国道2号・阪神電鉄の間で、余剰地帯に余剰地帯に供給する。																				
IV高橋説は御用道路・濠ノ内北道跡の資料を重視し、足利説の二町分間に設定																				
芦屋庵寺については、塔心礎の石柱の「タブリ」、狛形瓦片などの存在から、寺跡であることは明らか。高橋説では、芦屋庵寺の近傍に駅家を設定しているが、上記の説明に付随している。																				
<table border="1"> <tr> <td>山陽道</td> <td>須磨</td> <td>神戸市須磨区 大田町通路</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>神戸市教育委員会 細原昭基</td> <td>自然堤防上、 市街地</td> <td>南側に、吉 田山道遺 跡</td> <td>兵庫教委、市 教委による 実ライン</td> </tr> </table>											山陽道	須磨	神戸市須磨区 大田町通路				神戸市教育委員会 細原昭基	自然堤防上、 市街地	南側に、吉 田山道遺 跡	兵庫教委、市 教委による 実ライン
山陽道	須磨	神戸市須磨区 大田町通路				神戸市教育委員会 細原昭基	自然堤防上、 市街地	南側に、吉 田山道遺 跡	兵庫教委、市 教委による 実ライン											
調査では方形振りの方の柱立式建物群、山陽道との間を示す溝を検出。出土品には縄文陶器・灰釉陶器・皇朝十二线など、官衙的遺物あり。特に「荒田郡・中富里 荒田酒[口]」銘の円瓶(馬指定文化財)が重要。																				
2007145	山陽道	明石	明石市立寺町 2丁目	太寺庵寺	中川 涉	2008/3/7	明石市教育委員会 細原昭基	段丘面上、 寺院(高家寺)、 住宅地、通路	塔基壇、心 礎、鐵石	高家寺境内に 多數										
太寺庵寺は7世紀の創建で、塔をもつところから、寺であることは確実。道路区画などから、方形プランが想定される。																				
駅家が太寺庵寺とすれば、西側の「春谷寺」は承認駅家とされるが、証拠は全くない。「高家寺」の「こうけいじ」から、「駅家」と書かれていたという説もあり、元氣の説文にある「駅」の意味に関する道跡も不明。																				
明石城跡は御用道路の西側に位置する。伊丹城跡の北側に位置する。明石城跡は御用道路の東側で、律令期の道路跡と古大内六角丸丸が、大文町で木町式平瓦が出土しており、濠沿いのルートも存在した可能性がある。																				
2007145	山陽道	(仮称) 邑美	明石市佐野町 長坂寺	長坂寺通路	中川 涉	2008/3/7	明石市教育委員会 細原昭基	段丘上の 稲作地	南北側に、 古代山道遺 跡	なし										
古代山道遺跡とされるが、西側の「春谷寺」は承認駅家とされるが、証拠は全くない。「高家寺」の「こうけいじ」から、「駅家」と書かれていたという説もあり、元氣の説文にある「駅」の意味に関する道跡も不明。																				
明石城跡は御用道路の東側に位置する。伊丹城跡の北側に位置する。明石城跡は御用道路の東側で、律令期の道路跡と古大内六角丸丸が、大文町で木町式平瓦が出土しており、濠沿いのルートも存在した可能性がある。																				
2007145	山陽道	片川	明石市片川町 北	片川通路	中川 涉	2008/3/7	明石市教育委員会 細原昭基	片川右岸段丘 上、片川東側 の水田(現在は 住宅地)	道路護岸と みられる溝 3本	H13に発掘 調査										
古代山道遺跡とされるが、片川を東西に横切る「通の塗」の段丘の西側に一致する。この溝と、北本2号の通の塗の間隔は10m、15mで、通物の出土率がかなり低く、当初15mの幅が、8世紀後半に10mに縮小した可能性。																				
周辺は魚住町水字辻内地に位置する。古代山道遺跡とみられる2本の溝を検出。溝間の幅は7.8mで、道路面の門地は秒利を入れて整地している。福里地帯と同様、段丘頂の土堆を走る南側の溝を山道の基準線とする。																				
2007146	山陽道	賀古	加古川市野口 町吉井	古大内道路	中川 涉	2008/1/8 2008/2/19	加古川市教育委員会 岡本一士	段丘上、神社、宅 地、駐車場、鐵 道跡の石材、 瓦片		確認調査I										
道路北側の池辺に「駅ヶ池」という地名があり。現況で約80m四方の正方形の土地区域が残る。かつては「坂の森」と呼ばれる高まりがあったが、現在は宅地や駐車場となるまで退散しない。																				
大歳持社境石には從翁の材が散在し、過去に播磨國府系瓦や鬼瓦など多款の瓦が採取される。現在も境内などに瓦の小片が散布。																				
2007147	山陽道	佐安	姬路市別所町 北宿	北宿通路	西口主介 美樹	2008/3/26	姫路市教育委員会 大谷輝彦	市街地(姫路警 察署、JR姫路 駅前)、姫路市 倉庫、宅地、 姫路城跡、 姫路市役 所前)	なし	下水工事に 伴う調査										
駅家の遺構は過去の開発によって失亡したとされる。ただし播磨倉庫と白鷹高校の間に散布する遺物、「馬ヶ谷」等の字名からみて、道路の範囲が北から東へ広がる可能性がある。																				
2007147	山陽道	草上	姫路市本町~ 花井木町	本町通路	西口主介 美樹	2008/3/26	姫路市教育委員会 大谷輝彦	市街地、堆 積地、塔心礎		郵便局建て 替えに伴う 調査										
本町通路は播磨国街筒造道路と考えられる。																				
2007147	山陽道	草上	姫路市辻井 辻井通路	辻井通路	西口主介 美樹	2008/3/26	姫路市教育委員会 大谷輝彦	市街地、堆 積地	塔心礎	26次の調査										
辻井通路については塔心礎の存在から、寺であることは確定。駅家については、現状では存否の確認困難。																				
2007147	山陽道	草上	姫路市今宿1 丁目~4丁目	今宿丁通路	西口主介 美樹	2008/3/26	姫路市教育委員会 大谷輝彦	市街地	なし	8次の調査										
国府系瓦は出土しているが、旧道路の埴築物とみられる。駅家本体は今宿丁通路と今宿通路の間に位置する可能性がある。																				
2007147	山陽道	大市	姫路市西脇	向山通路	西口主介 美樹	2008/3/26	姫路市教育委員会 大谷輝彦	堆積地、竹林、湖 底、墓地		市道改修に 伴う調査										
推定地内に遺構が残っている可能性があるが、駅家の範囲が西にずれた場合は、かなり削平を受けていると思われる。																				
2007148	山陽道	布勢	たつの市押西 町小太丸	小太丸通路	西口主介 美樹	2008/3/25	たつの市教育 委員会 草木通	崩塌地、 水田、宅地	遊石・瓦質 の駅舎施設	1986~1991 にかけて 開発した範 囲に伴う 調査										
「布勢」「難」などの豪華土器により、布勢駅家確定。瓦質、白壁、朱塗りの駅舎を実証。駅舎院と山陽道の取り付けを解明。																				

表1-2 兵庫県下の古代官道関連遺跡の現況調査（2）

表の項目例

遺跡番号	官道名	駅家名	区間、所在地	遺跡名	調査担当	調査日	所管教育委員会	地形、現況	遺構の有無	調査概要
所見、その他										

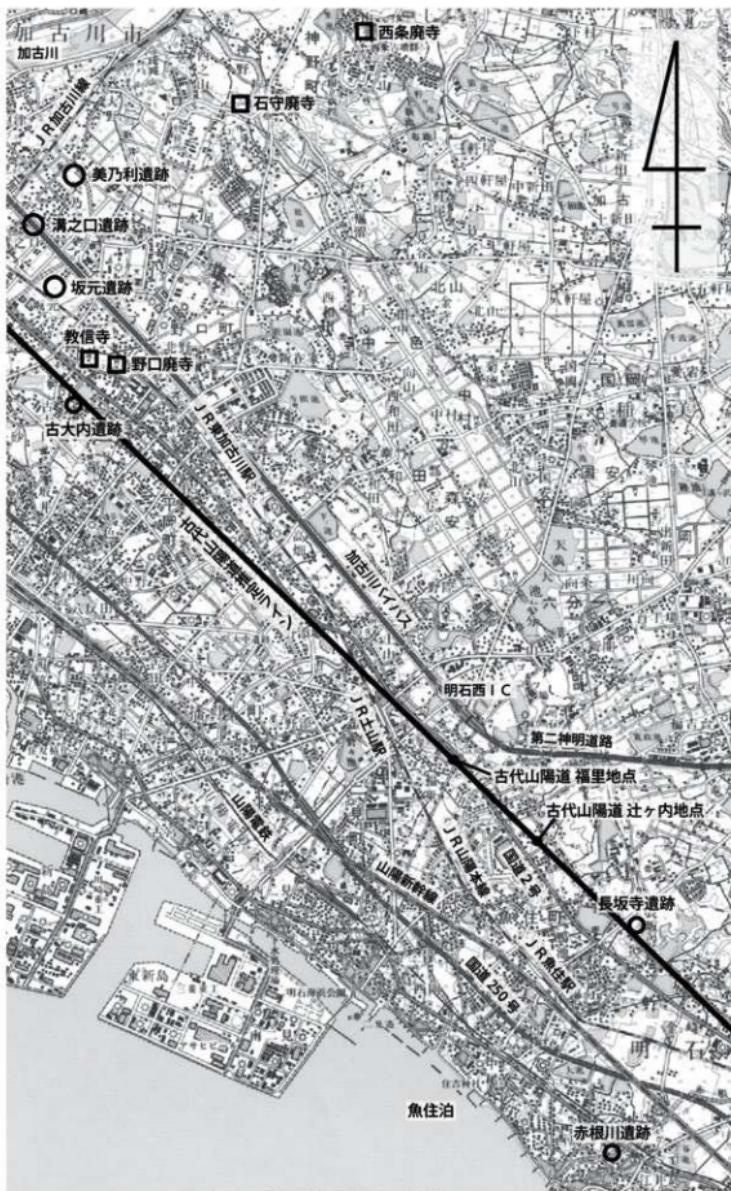
2007148	山陽道	高田	赤穂郡上郡町 宿	高田宿遺跡	西口主介 藤宮 正	2008/3/25	上郡町教育委員会 高田 術	西向き尾根先端 の平担地 園地整備済み	鹿鳴に、古 代山陽道 史跡なし	古 代山陽道 史跡なし
上記地図で瓦片を採集したこと、新たな候補地として挙げられる。地形的にも、他の駅家道路と共通。ただし園地整備済みなので、瓦が本来のものか検証必要。										
2007148	山陽道	高田	赤穂郡上郡町 神明寺	神明寺道路	西口主介 藤宮 正	2008/3/25	上郡町教育委員会 高田 術	南向きの緩傾斜面 の園地整備済み 等段（樹木）、宅地	心臓、壁石 北側に、古 代山陽道 個人住宅に 接する、古 代山陽道 史跡なし	古 代山陽道 史跡なし
長坂寺式軒丸瓦などが採集されており、高田駅家候補地として有力視されている。しかし塔心礎の存在から寺跡であるのは確定とみられる。										
2007148	山陽道	野市 (第2次)	赤穂郡上郡町 落葉地	落葉地遺跡	西口主介 藤宮 正	2008/3/25	上郡町教育委員会 高田 術	北、東、南を丘 間に囲まれた谷 の出入口 山林、荒れ地	北、東、南を丘 間に囲まれた谷 の出入口 岩石・瓦葺 範囲認定 駿院院跡	古 代山陽道 史跡なし
基壇、壁石・塗地脚が良好に保存する。南門には唐突敷を伴う八脚門。山陽道には西門から取り付くみられる。										
2007148	山陽道	野市 (第1次)	赤穂郡上郡町 落葉地	落葉地遺跡 八反坪地区	西口主介 藤宮 正	2008/3/25	上郡町教育委員会 高田 術	川と並んで走る 狭い谷間に立柱 式の唐突敷を伴 う調査	古 代山陽道 史跡なし	古 代山陽道 史跡なし
この字の意味に配する正解、場所、それを問う欄列と門が検出され、瓦葺き建物以前の「野駒駅家」と考えられる。ただし遺構の軸線は山陽道に合わせており、方位とは違っている。										
2007149	美作道	越前	たつの市新宮町 鳴鶴一丁目佐野	馬立遺跡	長瀬誠司 上川健太	2008/3/25	たつの市教育委員会 志水農業 振興部	保田川右岸の沖 積地 志水農業 振興部、水田、畠地	なし	園地整備に 伴う調査
網掛堀廻廊は、豊里型地割りが明顯であった。遺物、遺物はないが、駅家跡は馬立近が妥当される。横保川西岸の駒見寺跡道路では多数の瓦が出土し、寺跡と一緒に河内交通や伝馬道に開拓する施設とも考えられる。										
2007149	美作道	中川	衣原郡佐用町 木広	新宿廢寺	長瀬誠司 上川健太	2008/3/25	佐用町教育委員会 森	段丘丘端 築石3個	1962年に調 査	古 代山陽道 史跡なし
古代中里の中心部にあたる。新宿廢寺は駅家かどうか不明で、東側にある中里道路も駅家跡の推定地の一つ。										
2007150	山陰道	小野	蘿市山小野町	蘿市道跡	小川田弘 小川田法弘	2008/3/24	蘿市教育委員会 山田雅俊	北に蟹谷の中央 毛地、水田、道端 小野駅田の石碑	なし	試掘あり
駅間距離、周辺地形、字名などから推定地となっているが、遺物、道標の痕跡なし。										
2007150	山陰道	長柄	蘿市山西浜谷	下小西の坪 道路	池田弘弘 小川田法弘	2008/3/24	蘿市教育委員会 山田雅俊	山野城跡面 の池、水田、畠地	約200mに跨 る駅道に伴 う調査	古 代山陽道 史跡なし
「永井」墨書き器が出土しており、最も有力な推定地。周辺には小字名「名柄声」もある。推定山陰道に面する立地で、古代寺院跡の「寺内道跡」、駅街推定地の「東宮道跡」が周辺に存在。										
2007150	山陰道	長柄	蘿市山野中	電竜寺遺跡	池田弘弘 小川田法弘	2008/3/24	蘿市教育委員会 山田雅俊	山野城跡面 の池、水田、畠地	工場建設に 伴う調査	古 代山陽道 史跡なし
かつての推定地とされたが、左の出土や土地の存在から、現在は地方寺院跡との評価が有力。しかし岡謙二郎は長柄駅家が複数存在することを説いている。道跡周辺には駅家に隣接する施設も残る。										
2007151	山陰道	星角	蘿市山野中	電竜寺遺跡	池田弘弘 小川田法弘	2008/3/24	丹波市教育委員会 山田朝	内牧池東端の段 丘、平坦面 山野城跡	なし	駅街合併 工事建設に伴 う調査
奈良時代前半の拠点的な場所で、西側の柏原・本町道路でも多くの瓦が採集されたとい。ただし調査地点は、駅家推定地にはてや山間に寄りすぎる印象。										
2007151	山陰道	星角	丹波市水上町 右生	なし	山田清吉 山田雅弘	2008/3/25	丹波市教育委員会 山田厚善	今木原水分か の田、田辺の冲積地 水田	なし	なし
駅家候補地となってはいるが、現在とごろ開闢の成果は認められない。										
2007151	山陰道	佐治	丹波市青加原 道置	遠波道跡 山田道跡 山田道置	山田清吉 山田雅弘	2008/3/25	丹波市教育委員会 山田厚善	山麓の段丘上一 段の冲積地 水田、水田、畠地	なし	園地整備に 伴う調査
現在のところ駅家の開拓の成果は認められない。また、駅舎跡の一つである中佐庭跡は立地には不向きな条件。										
2007151	山陰道	日置	丹波市島町 (日置)宿	なし	山田清吉 山田雅弘	2008/3/24	丹波市教育委員会 山田厚善	段丘地形 水田、水田、畠地	なし	なし
古代官道は駅家推定地周囲を通過したとするが、地形的にはみて、ルートとしては不向きな条件。										
2007151	山陰道	丹波市	丹波市山南町 井原	井原道跡群	山田朝 山田雅弘	2008/3/25	丹波市教育委員会 山田厚善	段丘丘陵側の 段丘、平地、水田、 畠地	なし	水土郡教委 による調査
調査地周辺は「井原郷」の中心地。山陰道が山南町城を通す場合、駅家の可能性が推定される。井原道跡群の「野坂・秋ヶ前道路」で奈良時代の大坂方村や柏立社建築、高良田遺跡、古墳時代後期～飛鳥時代の建物跡、「法ラン經敷石路」で人形などが出土しているため、古跡的な性格が指摘される。特に「野坂・秋ヶ前道路」が古墳時代の可能性が高い。										
2007151	山陰道	新柳	丹波市水上町 油利	油利百坂大 道跡	山田朝 山田雅弘	2008/3/25	丹波市教育委員会 山田厚善	段丘上の平坦面 水田、水田、畠地	なし	水土郡教委 による調査
山陰道が山南町城を通す場合、駅家の可能性が推定される。地形的には通じているが、これまで当該時期の遺構・遺物が検出された事実はない。										
2007151	山陰道	新柳	丹波市水上町 新柳	新柳道跡	山田朝 山田雅弘	2008/3/25	丹波市教育委員会 山田厚善	冲積地 水田、水田、畠地	なし	水土郡教委 による調査
山陰道が山南町城を通す場合、駅家の可能性が推定される。地形的には通じているが、これまで当該時期の遺構・遺物が検出された事実はない。										
2007152	山陰道	栗鹿	朝来市山東町 栗鹿	栗鹿道跡 方谷追跡	山本三郎 田坂弘	2008/3/26	朝来市教育委員会 中島雄二	丘陵裏側の谷 の北側の谷 地帯、水田、道跡	なし	北畿自駕 車道に伴う 調査
栗鹿道から「獅子」一本橋が出土したことから、近辺に駅家が置かれた可能性が極めて高い。しかし両道路の遺構や地形からすると付随的な施設と考えられ、駅家本体は谷を挟んだ南側の微高地（小字「栗鹿加付」）に推定される。										

表1-3 兵庫県下の古代官道関連遺跡の現況調査（3）

表の項目凡例

調査年号	官道名	駅駅名	区間、所在地	道跡名	調査担当	調査日	所管教育委員会	地形、現況	道跡の有無	調査班
所見、その他										

2007152	山陰道	郡部	朝来市養父市 広谷・上野	なし	山本三郎 池田征弘	2008/3/27	養父市教育委員会 谷本 遼	大原用を挟んだ 丘陵部 宅地、水田、湿地	なし	なし
以前は養父町駅市駅付近するルートが想定されていたが、近年は養父町上野・広谷から八幡町朝倉に抜けるルートが有力。上野・広谷付近に駅家が推定されるが、明確な北緯度ではない。広谷駅側の上筋にある「鞍部」の地名が「郡部」に通じるという説もある。										
2007152	山陰道	養父	朝来市養父市 八木	殿原堀造跡 御里道跡	山本三郎 池田征弘	2008/3/27	養父市教育委員会 谷本 遼	役丘上で、丘陵 部斜面 水田、湿地	なし	現場監督、範囲確認に 伴う調査
兩道跡では食食・平安時代の円面鏡、施釉陶器、石器などが出土しており、官衙的な性格が想定される。養父の道跡地である八木に位置することから、駅家が存在している可能性が高い。										
2007153	山陰道	山崩	美方郡香美町 村崎・福岡	前田道跡	吉謙雅仁 小川岳太	2008/3/27	香美町教育委員会 石松 順	役丘上で、丘陵 部斜面 水田、水田	なし	なし
岡宮から暫定されている山陰道の2ルートの結点。周囲には八幡山古墳群が立地するなど、駅家の立地条件として良い場所。周辺の森脇では垂書きが出土。										
2007153	山陰道	射滌	美方郡香美町 村崎・福岡	なし	吉謙雅仁 小川岳太	2008/3/27	香美町教育委員会 石松 順	谷筋の平坦地 宅地、水田	なし	なし
矢田川と湯川の合流地点北端にあり、「射滌」の地名が残る。羽田町道に「弓北橋」と武内神社があり、南側には採石跡も存在する。この採取地区からは新羅墓刻に抜けることができる。このルートで岡宮駅へとしたところも推定される。										
2007153	山陰道	画治	美方郡新温泉 町羽田	八日市道跡	吉謙雅仁 小川岳太	2008/3/27	新温泉町教育委員会 石松 順	役丘上 水田、水田、湿地	塔心磯、礫 石	なし
かつては面治神社の西側が駅家推定地とされたが、道路の分布状況や地形などから、現在は八日市道跡周辺が有力。八日市道跡から井戸庵付近は、春来川と岸田川の合流点と北端の坂上付近で、住宅地となっているため、道跡の確認困難。井戸庵寺には塔心磯、石碑あり。最近の確認記述で、八日市道跡の東側で井戸庵道跡を見た。										
2007154	山陰道	支那	養父市日高町 柏ヶ森	柏ヶ森道路	別府洋二 山田浩明	2008/3/27	養父市教育委員会 加賀見省一	沖積地 市街地、水田	なし	日高町教委 による調査
柏ヶ森道路は第二次国定と推定される大原立柱建物や御車輪門をつくる地勢を検出。										
山陰道の路跡として丹後道・因幡道が想定されおり、不動坂止駅もその途上に立するものと推定。円山川の水駅も考慮の対象。										
2007154	山陰道	支那	春野	香美町東町	小寺道跡 三尾石道跡	別府洋二 山田浩明	2008/3/26	香美町教育委員会 行の介部	水田、宅地	なし
丹波へ接する谷の小道跡から円面鏡・転用土器・磨光土器・刻畫土器が、丹波へ接する谷の三尾石道跡からは磨光土器・木棒・齊半牛が出土する。春野・春部の地名は確認できず、所在地不明。出合岡跡を暫定。館に所在の赤坂1号墳は、駒長出自集団に岡津・城ヶ谷塚は各世紀後半に開拓部分に古代の道跡含む証がある。高麗夷入説の山田直4丁目付近が妥当。地形図、空中写真などから推測すると、大山津見神社西側の尾根に開拓した山形部が駅家の核心。今後、古代の城郭復原、難波調査などで検証必要。										
2007155	南海道	山崩	洲本市貞良町 山川	成山道跡	吉田 昇 西口主介	2008/3/18	洲本市教育委員会 瀬上 達	市街地	なし	歴史の道事業
山由由良駅家の道跡名であるのが間違い。新川山の山側に「馬鹿池」「馬場ノ」といった小字名が残るが、地形的に駅間に通じて知らない。現地名では「馬鹿池」はこれの地名ではない。										
新川山の開拓部分に古代の道跡含む証があり、高麗夷入説の山田直4丁目付近が妥当。地形図、空中写真などから推測すると、大山津見神社西側の尾根に開拓した山形部が駅家の核心。今後、古代の城郭復原、難波調査などで検証必要。										
2007155	南海道	前崩	大野	西日本大野	野上道跡	吉田 昇 西口主介	2008/3/18	西日本教育委員会 市浦主史	水田、宅地	なし
野上道跡では「円面鏡など官衙的遺物が採取されており、近隣には「前」「山前」「前山」など駅家周辺を想起させる小字名が立在する。道跡の西側には小丘（現墓地）があり、展望を兼ねて駅家の要望が満たす。ただし、小谷谷から広田中筋へ接する県道広田洲線沿いを南北道のルートと考えた場合、南北道の交錯点から外れる点が検討課題。										
2007155	南海道	前崩	大野	西日本新村	西口主介	2008/3/18	西日本教育委員会 市浦主史	役丘上	なし	歴史の道事業
和氣天神社周辺を大野地区の中心と想定し、小路谷から広田中筋へ接する県道広田洲線を南北道と考える。躍著な道跡はなく、関連地名も見出せない。										
2007155	南海道	前崩	大野	西日本金屋	下内膳道跡	吉田 昇 西口主介	2008/3/18	西日本教育委員会 市浦主史	役丘上 水田、宅地	なし
小路谷から広田中筋へ接する県道広田洲線を南北道と考えた場合、適地の一つ。新宮神社が存在する小山東麓に奈良時代の窯跡が存在するが、官衙遺跡はない。周辺に地名は見出せない。										
2007155	南海道	後崩	大野	西日本下膳	下内膳道跡	吉田 昇 西口主介	2008/3/18	西日本教育委員会 市浦主史	役丘地 水田、宅地、小学校	歴史の道事業 教委・市 教委による 発掘調査
下内膳道跡は官衙的性格の道構造が最も多く、西側の上筋側には「馬屋町」の小字名があることから駅家の可能性が從来より指摘される。道跡の中心と考えられる加田小学校からは棄置への見通しがよく、当該地周辺に接する大野小学校駅家が存する可能性は高い。										
駅路の標柱（マイルストーン）と考え方される立石が、加田小学校の東角に存する。この立石と南あわじ市八木立石にある立石とをつなぐルート（ほぼ現道が照査）を、神本駅家推定後の往復南道とする考え方がある。										
2007155	南海道	神本	南あわじ市役 所	南あわじ市役 所跡	幡多道跡	吉田 昇 西口主介	2008/3/18	南あわじ市教育 委員会 坂口宜生 定松住重	役丘上 宅地、寺院、耕作地	歴史の道事業 教委による 発掘調査
神本付近が駅家推定地となっており、周辺には「前田」「馬場ノ」「馬場ノ宿」などの小字名が立在する。幡多道跡からは磨光土器「家」や円面鏡といふ官衙的な遺物、大抵の標柱建物が検出され、駅家の周辺に遺構・遺物の可能性が高い。										
2007155	南海道	福良	南あわじ市福 良東本町	なし	吉田 昇 西口主介	2008/3/19	南あわじ市教育 委員会 坂口宜生 定松住重	谷筋の平坦地 菜園、耕作地	なし	歴史の道事業 道整備建設に 伴う発掘調査
現道福良交差点に向かって南向きに開く谷部には「馬宿」の字名、「東馬宿」「西馬宿」の小字名が存在。周辺には部分的に桑野型地割りが残る。福良駅家については、現時点で確実な推定地ではない。										



第2図 古代山陽道と関連遺跡・寺院 (1 : 50,000)

第2節 地中レーダー探査

(1) 調査の方法

地中レーダー探査とは電波の反射を利用して地下構造を映像化するもので、パルスレーダーを用いてアンテナを地表面に沿って走査し、地点ごとの受信波形をモニタ上に輝度変調をかけて表示することによって、測線下の地下断面を直視することができる。さらにこの連続断面を二次元方向に変換することで、深度ごとの平面図（タイムスライス）が得られる。なおこの時、電波の地中伝播速度を仮定値によって求めているため、グラフに示した深度は相対的なもので、実際とは誤差をもつものである。

探査については日本文化財探査学会（平成20年度会長・亀井宏行東京工業大学教授、平成21年度会長和田晴吾立命館大学教授）に指導・協力を依頼し、現地測定・データ解析は同学会員である工藤博司氏が行った。探査結果については、工藤氏のコメントをもとに、発掘調査の成果などもふまえて解釈を行っており、文責は中川にある。

調査の際には、まず対象範囲に方格のグリッドを設定し、グリッドラインに沿って50cm毎にレーダーを東西方向と南北方向に走らせ、直交した2方向の探査データをそれぞれ採取、解析した。

(2) 明石市長坂寺遺跡の探査結果

1 調査区の設定

長坂寺遺跡は明石市魚住町長坂寺字堀割ノ内に所在する。同地は「(仮称)邑美駅家」の存在が想定されている場所で、事前に作成した地形図を観察したところ、東西75m、南北90mのL字形の水田畦畔が正方位にのっとって残存していることが判明し、駅館院の痕跡を示す方形地割りの可能性が考えられた。そこでその地割りの範囲を中心に調査区を設定した。現地は水田・耕作地のため、調査は稲刈り後の農閑期に行った。また作付けの関係で平成20年度に調査できなかった箇所について、平成21年度に調査を追加した。

平成20年度の調査では4筆の水田を対象とし、南側の2筆をA区（地番1142がA-1区、1143がA-2区）、北側をB区（地番1166-2がB-1区、1147がB-2区）とした。平成21年度の調査ではA区とB区の間に位置する2筆の水田（地番1144・1146）を対象とし、2筆まとめてC区とした。

今回調査した箇所は、駅館院推定域の西辺を含む範囲にあたる。古代山陽道が推定域の南西側を南東-北西の方向に走ると想定されていることから、調査対象範囲内には、山陽道から駅家への進入口の存在が想定される。

表2 長坂寺遺跡・古大内遺跡調査一覧表

調査調査番号	遺跡名	所在地	調査種別	調査担当者	調査期間	調査面積 (a)
2008215	長坂寺遺跡	明石市魚住町長坂寺 1142.1143.1147.1166-2	探査	中川 淳 藤田 淳	平成21年1月12日～1月15日 (4日間)	2.114.5
2008216	古大内遺跡	加古川市野口町古大内中畠470	探査	中川 淳 藤田 淳 多賀茂治	平成21年1月15日～1月17日 (3日間)	600
2008231	古大内遺跡	加古川市野口町古大内中畠470	補足調査	中村 弘	平成21年3月10日～3月29日 (15日間)	77
2009195	古大内遺跡	加古川市野口町古大内中畠470	確認調査	中村 弘	平成21年6月26日～7月31日 (25日間)	78
2009196	古大内遺跡	加古川市野口町古大内中畠462-3, 466-1,467-1,467-3,467-5	探査	中川 淳 藤田 淳	平成21年7月18日～7月25日 (4日間)	1.639
2009234	長坂寺遺跡	明石市魚住町長坂寺1144.1146	探査	中川 淳 藤田 淳	平成21年10月25日～10月28日 (3日間)	1.008



第3図 長坂寺遺跡の位置

2 A区の探査結果

A-1区は南西-北東15m、北西-南東27mの不整台形で、駅館院推定域の南西コーナーを含む場所を占める。A-2区は南西-北東26m、北西-南東30mの不整台形で、東西方向の方形地割りの内側（北側）に位置し、推定域の南西部にあたる。現在の地盤高はA-1区が45.3mで、A-2区より約30cm低くなっている。

探査の結果、A-1区では、南に向かって基盤層が下がる状況がみられ、現状の水田面は盛土によって確保されたもので、A-2区で検出できる地形面は失われているものと判断された。

一方、A-2区では深度20~25cm付近で、方形地割りを示す畦畔の北側に沿って幅6~7m以上の帯状のラインが認められた（図版1-①a）。また深度55~60cm付近では、深度22cmの帯状ラインと平行もしくは直交するラインが複数認められ、全体として27m×17m以上の不整形な方形状を呈する（図版1-②b）。さらに深度67cm付近では、方形状エリアの中央付近に径25mと40m程度の円形状の弱い変化が2箇所認められる（図版1-②c）。



第4図 長坂寺遺跡の調査区

3 B区の探査結果

B-1区は南西-北東14m、北西-南東27mの長方形で、駅館院推定域の北西コーナーに近い場所を占める。B-2区は南西-北東49m、北西-南東16mの長方形で、駅館院推定域の北辺にあたる範囲に位置する。現在の地盤高はB-1区がA-2区とほぼ等しい45.6mであるのに対し、B-2区は約70cm低くなっている。大正期の耕地整理の際に、かなり削平を受けたことが予想されたため、B-2区の探査は、東西方向の走行のみにとどめた。

探査の結果、B-1区では深度23cmの面で、A-2区で検出した帯状の変化に対して直角方向のラインを検出し、その内側にも方形の輪郭をもった変化が認められた（図版1-③d）。また深度30cm以下でも、深度23cmでのラインと平行するいくつかのラインが検出でき、その間には直角方向の小さな方形状の輪郭線も存在する（図版1-④e）。

なおB-2区では予想通り、耕地整理に伴うとみられる切土と盛土の境界部を表すラインが読みとれ、旧地形は遺存していないものと考えられる（図版1-⑤）。

4 C区の探査結果

C区は南西-北東方向37m、北西-南東方向32.5mの方形で、駅館院推定域の西辺付近にあたる。現状の地盤高は45.7mで、推定域の中では最も高い場所の1つである。

探査の結果、C区では深度25cm前後の面で、北隅から南隅に向かう対角線方向に、2本の直線的な輪郭線が約6mの間隔で平行するのを検出した（図版1-⑥f）。この輪郭線はB-1区のものより10~20m東側にずれており、方形地割りの南北方向畦畔からは80~90mの距離がある。ただしレーダーに対する反応は非常に弱く、遺構の起伏としてはごく浅いものであるとみられる。

5 小結

正方位に平行もしくは直交する輪郭線「a・b・d・e・f」は、自然地形とは考えにくく、人為的な行為の結果とみられる。特にA-2区の帯状ライン「a」は、現地に残る方形地割りの畦畔が有意なものであることを強く暗示させる。さらにそのラインはC区「f」へと直角につながってゆき、一辺80~90m四方の方形区画を復原することも可能である。なおそうであれば、B-1区の「d・e」は、区画の外側の遺構群を反映していることが考えられる。

またA-2区のさらに下層でも、「c」が認められ、より深い位置での遺構の存在を考える必要に迫られた。しかし段丘上という立地条件からみて、複数の遺構面の存在は想定しにくいため、古い段階に盛土や整地といった改変が行われたことも考慮する必要がある。

ただし上記の輪郭線以外では、礎石や瓦溜まり状のものを想起させる強いレーダー反応は得られていない。輪郭線を検出した深度も地表下25cm前後と浅く、耕地整理などの時に大きく削平をこうむっている可能性が考えられる。



写真7 測定ラインの設定 (C区)



写真8 地中レーダー探査 (A-2区)

(3) 加古川市古大内遺跡の探査結果

1 調査区の設定

古大内遺跡は加古川市野口町古大内字中畑に所在する。同地は「賀古駅家」の存在が想定されている場所で、以前から駅館院の痕跡を示す方形地割りの存在が指摘されてきた。しかし同地は市街化が進んでいて神社境内・民家・工場の駐車場などに利用されており、無条件で調査が可能な範囲は限られているのが現状であった。そこで検討・調整した上で、方形地割りの東側に隣接する畠地を対象に調査することとした。当該地は、方形地割りと山陽道想定ラインとの間に位置し、進入口が予想される箇所であった。平成20年度の調査の結果、予想通り山陽道からの進入路の一部が検出されたことから、駅館院想定域内部の状況についての手掛かりを得るために、工場の駐車場を調査の対象に追加した。ただし平日は駐車場が使用されているため、土日祝祭日を選んでの調査となった。

平成20年度の調査対象とした畠地（地番470）についてはA区とした。平成21年度の調査はA区の西側に隣接する工場の駐車場を対象とし、フェンスを境に東側をB区、西側をC区（地番462-3）とした。さらに調査の都合上、B区は北側をB-1区（地番466-1、467-1、467-5）、南側をB-2区（地番467-1、467-3）とし、C区は南半部をC-1区、北半部をC-2区とした。

2 A区の探査結果

A区は南西-北東33m、北西-南東32mの不整三角形で、駅館院推定域の東辺に接する場所を占める。現況は畠地で、現在の地盤高は13.1mである。駅館院推定域との間を仕切るフェンス際に野井戸があり、その断面の地表下50cmほどの深さに、瓦などを含む層位が観察されたため、同地は大きな改変を受けておらず、遺構面が良好に遺存しているという見通しをもつことができた。

探査の結果、野井戸の東側付近の深度30cmで、径5mほどの範囲で、深度60cmのあたりまで落ち込む変化が認められた（図版3-①a）。次に深度約60cmの面では、北隅から野井戸の北側へ向けて調査区中央を横断する直線状のラインを検出した（図版3-②b）。これについては非金属の埋設管とよく似た反応を示すが、上面からの掘り込みは認められていない。



写真9 野井戸の断面観察



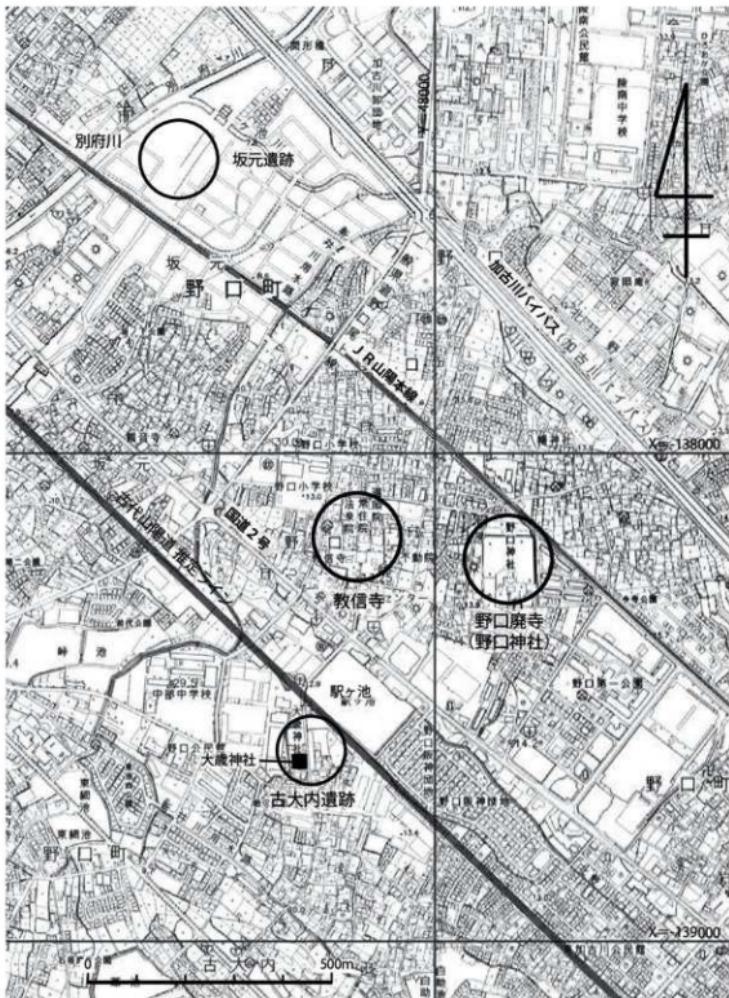
写真10 地中レーダー探査 (A区)



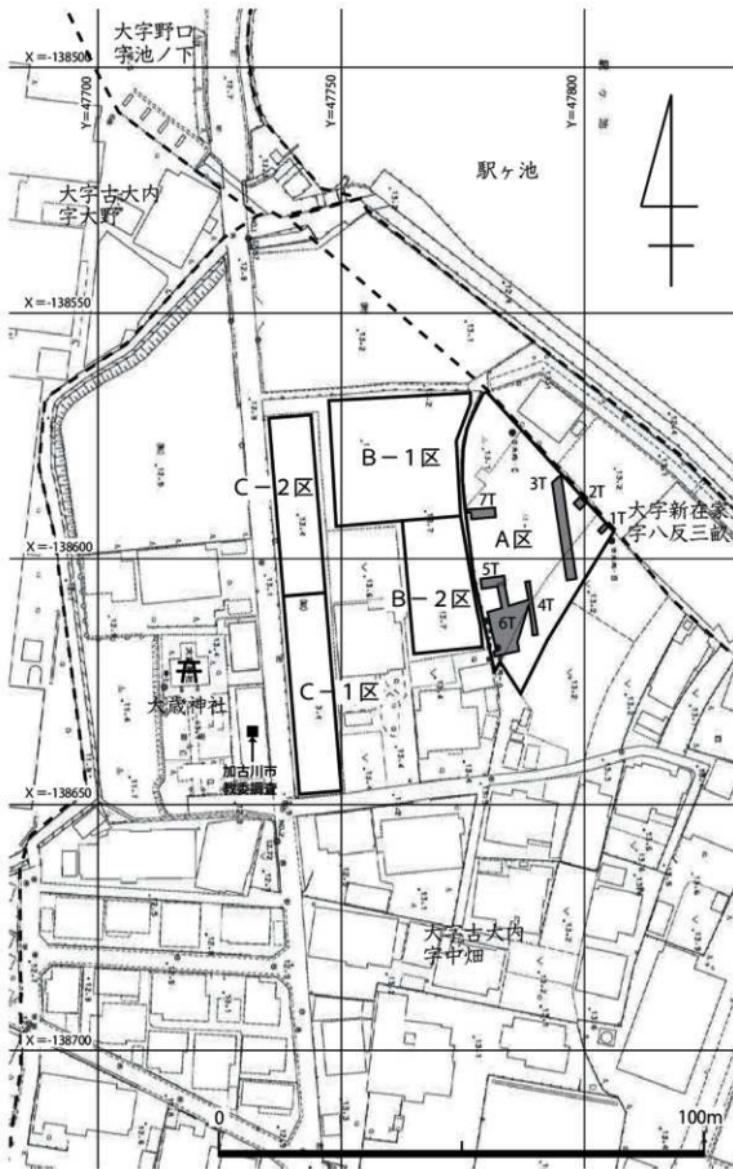
写真11 地中レーダー探査 (B-1区)

3 B区の探査結果

B-1区は東西が25~29m、南北24mの不整方形で、駅館院推定城の北東隅にあたる。B-2区は東西12~14m、南北27mの不整長方形で、駅館院推定城東辺の中央付近に位置する。現在の地盤高はB-1区が13.6m、B-2区が13.7mで、駐車場にした時に50~60cmの盛土を行っていることが分かる。C区も含めた駐車場部分は砕石舗装で、各区とも上面から30~50cmの間は強い抵抗を示す。



第5図 古大内遺跡の位置



第6図 古大内遺跡の調査区

探査の結果、B-1区では深度55cm付近で、いくつかの輪郭線を検出した。調査区北東隅の深度50～60cm付近に強い反応があり、数cm～20cmの石が混ざったような状態が考えられる（図版3-③c）。調査区の西側を東西方向タイムスライスでみると、幅2.5m、長さ10～13mの細長い輪郭が南北に2本平行し、輪郭内には深度50～70cmに土を硬く締め固めた様な強い反応と、その内側には10～30cm程度のやや強い凹凸のある面がみられる（図版3-③d）。さらに調査区南西隅では、土を締め固めたようなほぼ平らな面が二層か三層をなすが、小石の反応はみられない（図版3-③e）。同じ部分を南北断面でみると、幅4～5mの平らな面が、南端から22.5m付近まで続いている（図版3-⑥d）。その北側の23m付近には、石のようなものが何段か積み重なったような反応があった（図版3-⑥f）。

B-2区では3箇所で反応を検出した。調査区の北東側では、深度50～60cmで、幅2m未満、長さ6～7mの細長い輪郭が南北に延びており、石列状の強い変化が2～3層に重なる反応が得られている（図版3-④g）。調査区の南西側では、径5m内外の反応が2箇所あり、北側は深度50～80cm付近で、数cm～30cmの石のような強い変化（図版3-④h）、南側は深度60～70cm付近で、土を締め固めたような平らな層がみられた（図版3-④i）。

4 C区の探査結果

C区は駅館院推定城中央を南北に貫く市道の東側に沿った調査区で、東西幅8m×南北長76mの範囲を対象としたが、測定方法の関係で、C-1区（南北40m）とC-2区（南北36m）に二分した。現状の地盤高は13.4mである。

探査の結果、C-1区では調査区外東側に硬い壁のような反応があったため、判読は不能であった。C-2区では、南端から3m前後の地点に、直径30cmほどの石が3～4段垂直に積み重なったような反応がある（図版3-⑧j）。その他、調査区南半部では深度60cmの面で、深さ30cmほどの落ち込みが2箇所（図版3-⑨k）と、ほぼ平らな面の下に石を含む地点が1箇所ある（図版3-⑨l）。なおC-2区での反応はタイムスライス（二次元面）では明瞭でなく、断面観察によるものである。

5 小結

A区では発掘調査の結果、「a」の周辺で駅館院への進入口と瓦溜まりを、直線的なライン「b」では底に瓦片を敷いた暗渠状の溝を検出した。またB区との境界線際では築地塀に伴うとみられる雨落ち溝と瓦片が出土しており、石が混ざる反応があったB区の「c・g」も、内側の関連遺構の存在を示す可能性がある。

この他、B区・C区では、土が締まった平らな面を示す地点「d・e・i・l」と、石のようなものの強い変化を示す「g・h」、それが何段か積み重なったような反応の地点「f・j」などがみられる。具体的な遺構が見つかっているA区に加えて、方形地割り内部のB区・C区でも、駅館院に関わるとみられる遺構が存在する可能性が高まった。ただし礎石の並びなどは検出できず、大歳神社境内に集積された石材を考え合わせても、遺構面はある程度の削平をこうむっていることは確実である。

地元の方の証言によると、B-2区の南側では戦争中に尾上の特攻隊の宿舎が作られ、防空壕で深さ2m以上も掘削されたとのことであった。しかし少なくとも今回の調査範囲内では、新しい時期の大きな擾乱は認められなかった。

第3節 加古川市古大内遺跡の発掘調査

(1) 発掘調査の経過

古大内遺跡に存在する方形地割内は現在民有地で、しかも駐車場、住宅として利用されているため、発掘調査をすることは不可能であった。しかし、方形地割の東に隣接する土地が畠として利用されており、旧状を留めていると考えられ、かつ土地所有者のご理解がいただけたので、この地点を発掘調査することとした（第7図）。掘削は耕作土を機械で行い、それ以下は人力で行った。調査後は元の状態に復旧するため、耕土とそれ以下は分けて掘削し、埋め戻し時には造構養生を行ったのち埋め戻し、ランマで叩き締めてから耕土をのせて復旧した。

この地点を調査するにあたって、目的を①古代山陽道の痕跡の確認、②山陽道からの進入路の確認、③駅館院の痕跡の確認、④雑舍群の確認、⑤駅家周辺の土地利用の変遷、⑥レーダー探査結果の補完、の6点とし、トレンチはこの目的に留意しつつ、発掘調査の成果を順に取り入れながら設定した（第8図）。

発掘調査は年度をまたいで2回行っている。初年度に設定した1・2トレンチはこれまで古代山陽道と推定されてきた字界に接するところにあたり、古代山陽道の痕跡を確認するために設定した。3トレンチは、調査区内に進入路の存在を想定し、それに直交するような方向に設定した。また、この場所はレーダー探査によって溝状の遺構が存在するとの指摘があったため、それを確認する目的も兼ねている。4トレンチは3トレンチで確認した溝がどの方向を確かめるために設定した。5トレンチは門と進入路の存在を確認するため、方形地割の東辺中央に設定した。発掘調査が可能な範囲内で一番南端に6トレンチを設定し、墓地塚の痕跡を確認することにした。

初年度（平成20年度）の調査の結果、方形地割の中央である5トレンチには門がなく、墓地に伴うと思われる溝が方形地割に沿って確認できとともに、6トレンチからは瓦溜まりが見つかった。そこで、6トレンチについて瓦の検出まででいったん埋め戻し、次年度（平成21年度）に再度、範囲を拡張して調査した。また、平成21年度には別の地点でも墓地の痕跡を確認するために7トレンチを設定した。

さらに、現在、方形地割内に鎮座する大歳神社境内において確認された石製唐居敷と礎石についても一部移動させて写真撮影、実測を行った。調査終了後は調査前の状態に戻した。

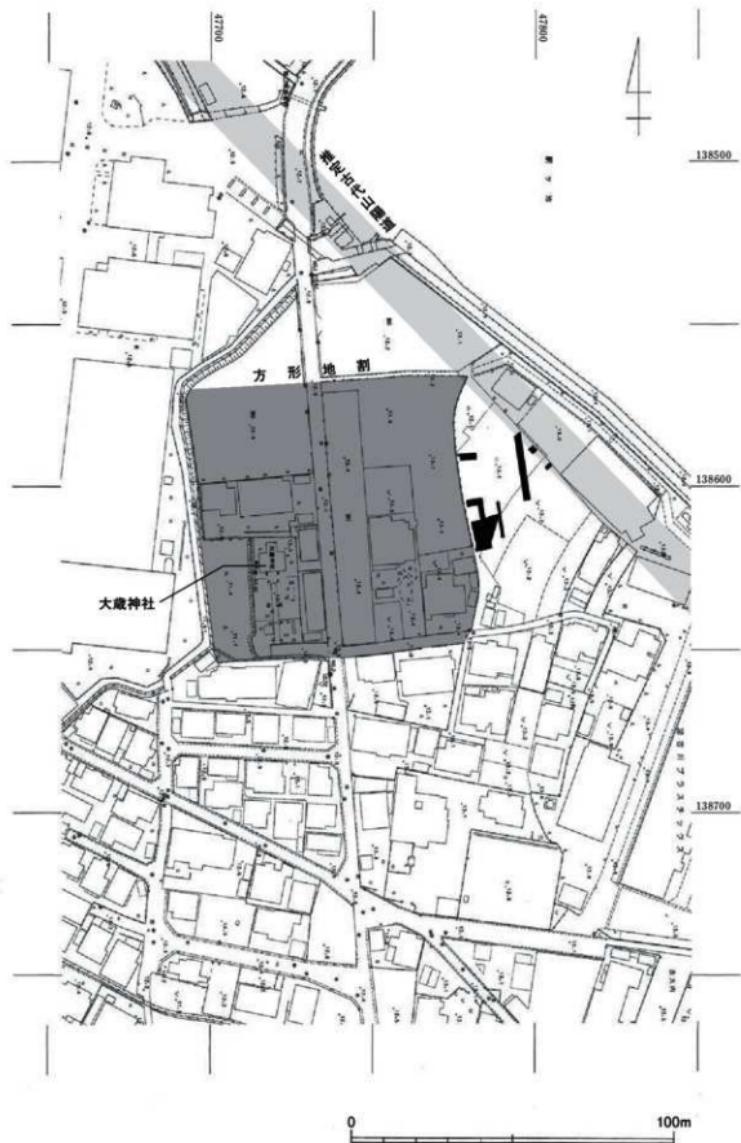
(2) 発掘調査の結果

1 基本層序

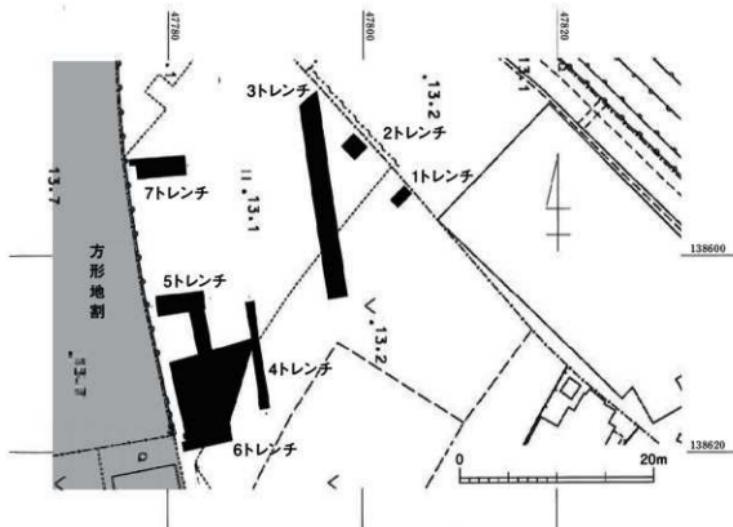
調査区全域の最下層には基盤層である明黄褐色極細砂が認められる。基盤層が最も高い3トレンチ南端、4トレンチ、6トレンチ中央では、基盤層の上に直接旧水田の床土と現耕作土が認められる。1～3トレンチ、および4トレンチの北側ではその下に黄灰色極細砂が堆積し、5トレンチ・6トレンチ北側・7トレンチでは暗褐色極細砂～細砂が堆積し、その下の造構埋土を覆っている。6トレンチでは南側で検出された瓦溜部分が基盤層を大きく削り込んでいるため、その埋土に多くの土層が堆積しているが、その埋没後は褐灰色極細砂、暗褐色極細砂がほぼ水平に堆積している。

2 各トレンチの遺構

1トレンチ（第9・10図）



第7図 方形容地割と調査区



第8図 トレンチ配置図

i) 概要

古代山陽道推定地の地割りに対し直角にトレンチを設定した。基本層序は基盤層の上に黄灰色極細砂があり、その上に床土、耕作土が認められる。3面に分けて調査し、各面で溝が検出された。第1面は床土の直下で検出され、第2面は同じ検出面でその下層にあたり、第3面は基盤層で検出され、第7・10層を埋土とする。同じ場所で検出された溝なので、SD01上層、中層、下層とする。

ii) 造構(第10図)

SD01がトレンチの北東半分を横切るように検出された。

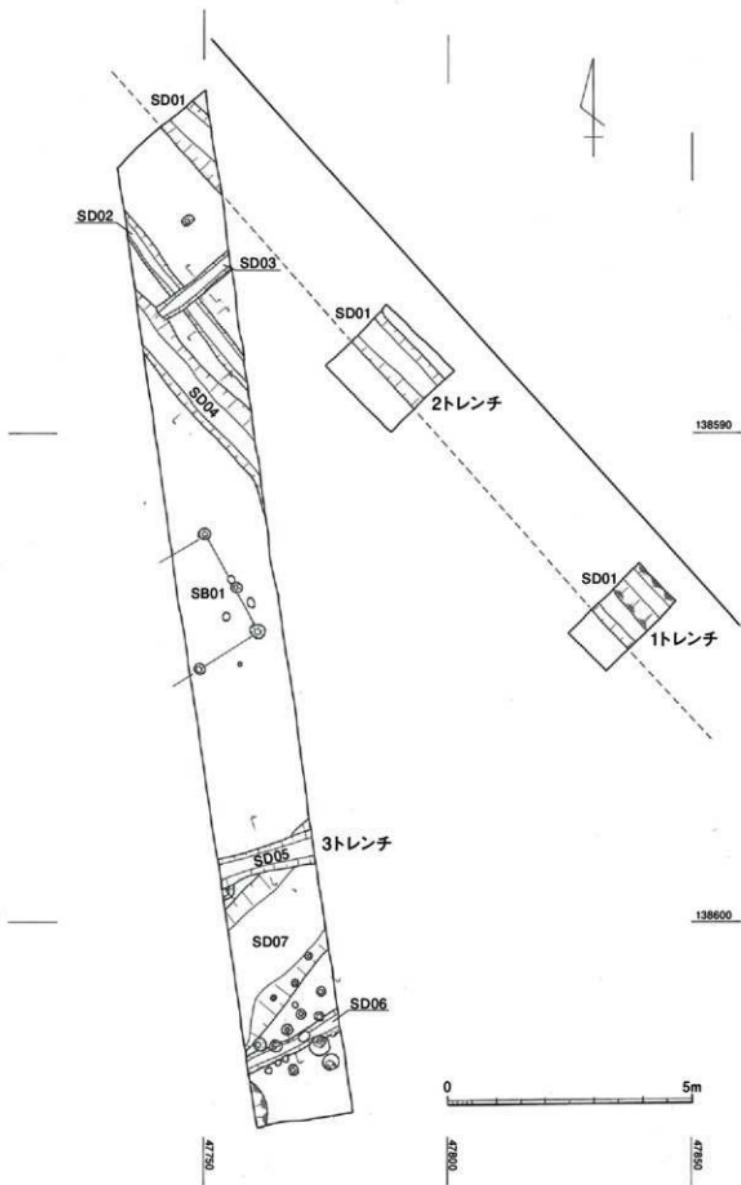
SD01 少なくとも3回の掘削が行われている。いずれも溝の肩は南西側のみ確認されており、反対側は調査区外のため明らかでない。溝は下層の溝が南西側にあり、新しい順に北東側にずれている。溝の幅は下層の溝で1m以上、中層の溝で1.4m以上、上層の溝で1.2m以上、深さは下層の溝で約32cm、中層の溝で約50cm、上層の溝で約30cmを測る。基盤層で検出された下層の溝が掘削された後、一度埋没し、その後中層の溝がほぼ同じ位置に掘削されているが、中層と上層の溝は完全に重複している。方位はN42°Wであり、古代山陽道と推定されている地割りに沿っている。

出土遺物は中層からは平瓦、須恵器、陶器が出土し、糸切り底の須恵器碗(1)のみ図示できた。最下層からは瓦が数点出土した。

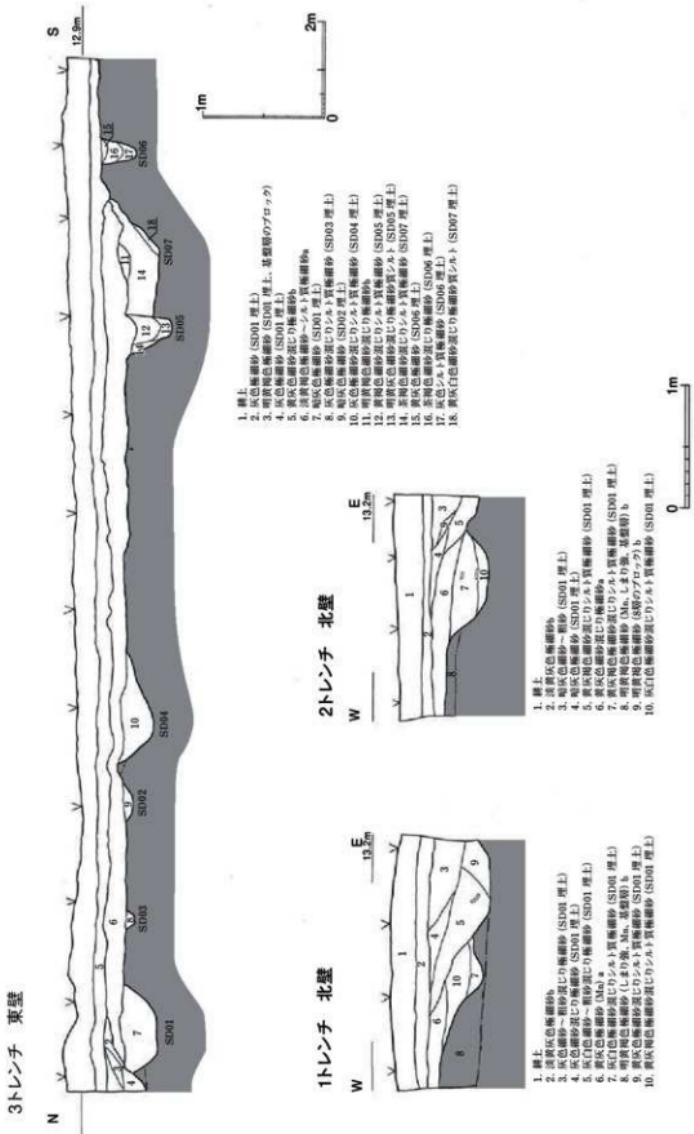
2トレンチ(第9・10図)

i) 概要

1トレンチのSD01を確認した。基本層序は1トレンチと同じである。



第9図 1～3トレンチ平面図



第10図 1～3 ベンチ 土層断面図

ii) 遺構 (第10図)

SD01 トレンチの北東半分を横切るように検出された。1トレンチと同じく3回の掘削が確認でき、埋設状況も同じである。最上層の溝の埋土に1トレンチでは検出されなかった基盤層のブロックが認められた。このブロックは3トレンチでも確認された。一度埋められ、再掘削された可能性もある。

出土遺物は最上層、中層、最下層ともに瓦が数点出土した。

3トレンチ (第9・10図)

i) 概要

方形地割と推定古代山陽道にはさまれた三角形地帯の状況を確認するために設定した。ほぼ南北方向に長いトレンチである。基本層序は、基盤層が最も高い南端ではその上に旧水田の床土と現耕作土が認められるのみであるが、それ以外の場所では基盤層が一段低く、かつ水平になっており、それを覆うように淡黄褐色極細砂シルト質極細砂が認められる。

基盤層の直上の層からは、軒丸瓦(28)を含む瓦のほか、須恵器鉢(2)、糸切り痕のある須恵器小皿(4)が出土し、その上層からは須恵器小皿(3)、土馬の足と思われる土製品(5)が出土している。

ii) 遺構

基盤層において遺構を確認した。基盤層は調査区の南端が最も高く、SD07から北側が一段下がっている。この段の上からはSD06が、段の下からはSD07を切るSD05が検出された。SD05と06は埋土が大きく異なっており、段の上と下で同時に存在したかどうかは明らかでない。溝の方向もほぼ同じ方向であるが、完全に平行ではない。SD06付近からは柱穴が多数検出されたが、建物は復元できなかった。

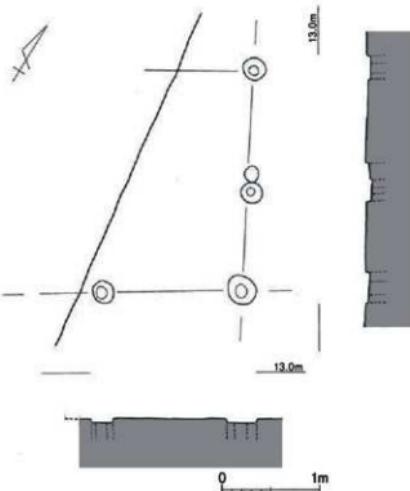
調査区の北端では1・2トレンチから続くSD01が検出された。また、SD01に平行するSD02・04や、直交するSD03が検出された。調査区中央ではSB01が検出された。

①独立柱建物 (第11図)

SB01と柱穴群が検出された。

SB01 トレンチのほぼ中央で検出された。検出できたのは建物東側の柱列と南側の柱列に限られ、建物はさらに西側に広がっているものと考えられる。他の遺構との重複関係は認められなかった。

規模は2間×1間以上で、方位はN30°Wを示し、溝などの遺構とは主軸方位が異なる。東側の1辺のみ明らかで、約2.25mを測る。柱穴の掘り形の平面形は円形で直径27.5~22.5cmである。遺物は出土していない。



第11図 SB01

柱穴群 トレンチ南端、SD06付近で検出された。調査区の制限と、柱穴数が多いため、建物に復元できたものはない。直径20cm程度の柱穴と40cm程度の柱穴がある。一部には柱の抜き取り後に瓦片を入れているものもあった。他の遺構と重複関係にあるものもあり、SD06または07を切っている。出土遺物は瓦のはか、土師器、須恵器があるが、いずれも小片である。

②溝（第15図）

SD01～07の7本の溝が検出された。SD01・02・04は北西～南東の方向を、SD03・05・06・07は北東～南西の方向を向いている。

SD01 トレンチの北端で検出された。1・2トレンチからのびる溝である。堆積状況は2トレンチと同じである。中層から瓦、須恵器、土師器壺の小片が出土した。

SD02 SD01に平行する方向の溝で、N39°Wを示す。幅約35cm、深さ約10cmを測る。他の遺構と重複関係があり、SD03に切られている。出土遺物は土師器片がある。

SD03 周囲にある溝（SD01・02・04）と直交する方向の溝で、N51°Eを示す。幅約30cm、深さ約5cmを測り、SD02を切っている。SD04とは切り合い関係が認められないで、同時に存在していたと考えられる。SD04の方が深く、幅も広い。遺物は出土しなかった。

SD04 N41°Wを示し、SD02と並行する。幅約80cm、深さ約25cmで、底が平らなため、断面形は台形を呈する。周囲で検出された溝の中ではもっとも大きい。SD03とは同時に存在していたと考えられる。遺物は埋土から瓦と土師器、須恵器の小片が出土した。また遺構の検出時に須恵器鉢と土師器羽釜が出土した。

SD05 トレンチ南側で検出された。N72°Eを示し、東西方向に近い。唯一SD06と近い方向であるが、まったく同じではない。幅約60cm、深さ約30cmを測る。SD07を切っている。瓦が比較的まとまって出土した。なお、この溝は、レーダー探査で溝が指摘された場所にあたる。探査結果からは「埋設管」のようなものがあると想定されたが、埋土内の瓦のまとまりが反応した結果であると考えられる。このSD05は、5トレンチまでのび行くことが探査結果で想定されており、5トレンチで検出された溝SD11から多くの瓦が出土している。

出土遺物は多くの瓦片のはか、土師器、須恵器片がある。

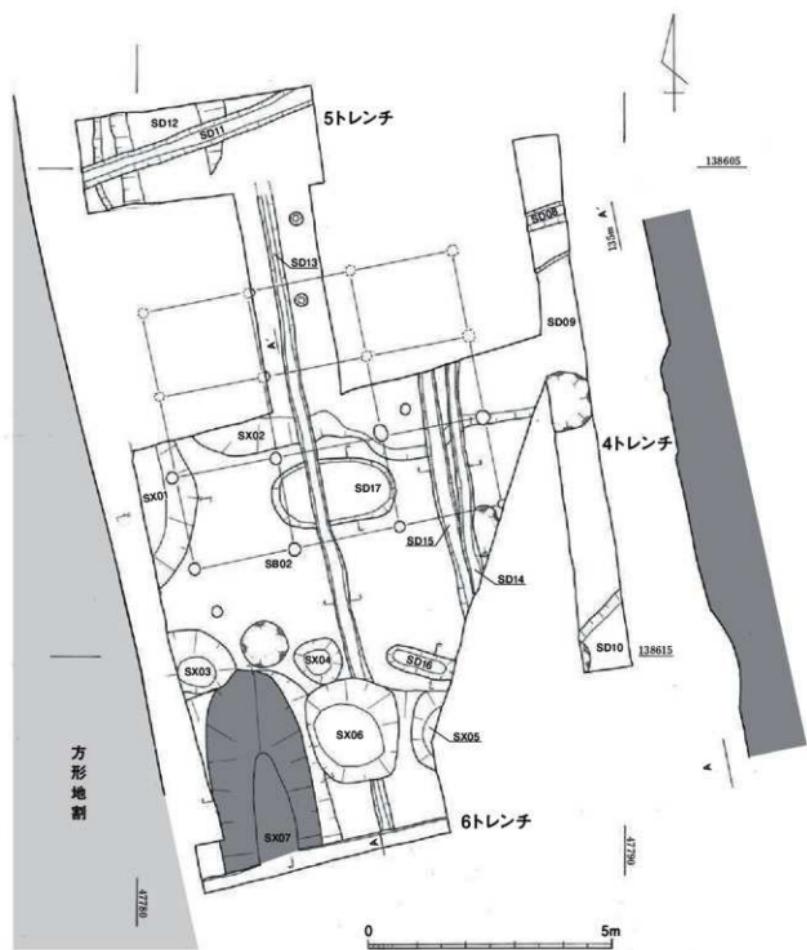
SD06 トレンチ南端で検出された。N64°Eを示し、東西方向に近いが、SD05とは若干方位が異なる。幅約30cm、深さ約25cmを測る。断面形は箱形を呈する。周囲からは柱穴群が検出されており、遺構が密集しているが、この溝はいずれの遺構にも切られている。出土遺物は土師器片がある。

SD07 トレンチ南側で検出された。N43°Eを示す。幅約2.2mと広く、深さは約20cmと浅いため、断面形は皿状を呈する。遺構の重複関係があり、柱穴とSD05に切られている。出土遺物は須恵器杯B（6）のはか、瓦片がある。

4トレンチ（第12・13図）

i) 概要

3トレンチから続く溝を確認するために南北に長くなるよう設定した。トレンチ中央部から南側にかけて地盤が高く、現在の耕作土やその下の床土以外に土層の堆積は見られない部分もある。北端では床土と基盤層との間に茶褐色極細砂～シルト質極細砂が堆積しており、瓦、須恵器杯・碗が出土している。



第12図 4~6トレンチ 平面図

その下層でSD08・09が検出された。

ii) 遺構 (第12・15図)

SD08～SD10が検出された。いずれもトレンチを横切る方向で、N44° E～N71° Eである。

SD08 トレンチ北側で検出された。N71° Eを示し、東西方向に近い。幅約45cm、深さ約20cmを測り、断面形はやや深い皿状を呈する。他の遺構と重複関係はない。出土遺物は須恵器横瓶の口縁部（7）がある。

SD09 SD08の南側で検出された。南側の肩が攪乱のため明らかではないが、北側の肩を観察すると、N61° Eを示す。東西方向に近いが、SD08よりは若干北に振っており、SD10の方位に近い。幅は攪乱のため明らかでないが、25～28m程度、深さ約23cmを測り、断面形は幅広く浅い皿状を呈する。他の遺構と重複関係はない。

SD10 トレンチの南端で検出された。N44° Eを示す。北側の肩のみ確認でき、南側は調査区外のため不明である。幅約13m以上、深さ約20cmを測り、断面形は幅広く浅い皿状を呈する。他の遺構と重複関係はない。遺物は瓦が出土している。

5 トレンチ (第12・15図)

i) 概要

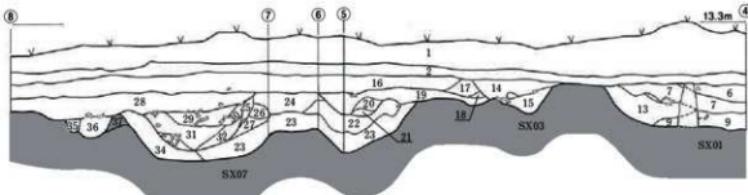
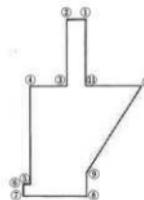
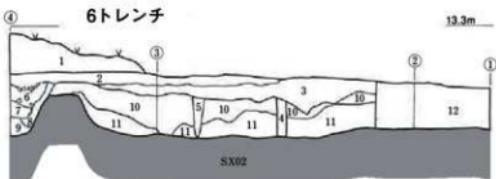
方形地割東辺の中央に位置するトレンチである。古代山陽道に面した場所に門があるとすれば、方形地割の東辺中央にあたる可能性が高いと考え、設定した。また、この場所にはレーダー探査で想定された溝があり、それを確認する目的も兼ねている。基本層序は、基盤層と現耕作土下の床土との間に、6トレンチ北側から続く褐色極細砂混じりシルト質極細砂が認められる。この層の上層でSD11が、下層でSD12が検出された。SD11検出時に軒平瓦の小片（50）を含む瓦と須恵器、土器が出土した。

ii) 遺構 (第15図)

上層と下層の2つの遺構面に分かれている。上層からはSD11が、下層からはSD12が検出された。

SD11 上層で検出された。レーダー探査により推定された溝で、その結果から3トレンチのSD05から続く溝であることがわかる。N69° Eを示す。探査結果によると、溝は3トレンチまではほぼ直線的に延びている。幅約25cm、深さ約60cmを測り、深くしっかりととした溝である。断面形は高さのある台形を呈する。3トレンチ同様、瓦が多く出土し、探査結果からも溝全体に瓦が集積していることがうかがえる。出土した瓦はいずれも破片であるが、まとまって出土していることから、暗渠として使われた可能性が考えられる。この溝はSD12と重複関係にあり、SD12を切っている。調査区からさらに西側に延びていることから、方形地割の中にまで延びるようである。出土遺物は瓦のみである。

SD12 下層で検出された。トレンチを南北に横断する方向で、N9° Wを示し、方形地割の東辺に沿って延びている。幅約27m、深さ約45cmを測り、浅い皿状を呈するが、トレンチの南側では東側の肩がなくなり、底と同じ高さとなっている。埋土の上層からは瓦がまとまって出土したが、下層からはあまり出土していない。7トレンチでも同様に方形地割に沿った溝SD18が検出されており、そこまで続くものと考えられる。出土遺物は瓦のみである。



6 トレンチ (第12・13図)

i) 概 要

方形地割東辺とそれに伴う溝を検出するために設定した。調査の結果、瓦溜が検出され、門に近い場所である可能性が考えられたため、次年度に5トレンチとつながるまで拡張した。なお、6トレンチ北西側の方形地割東辺との間には現代の素掘りの井戸があるため、この部分については発掘できなかった。

調査の結果、5トレンチで確認されたSD12は6トレンチの北側までしか続かず、6トレンチ中央までは溝が続かないことがわかった。SD12が地割に伴う溝であり、それが6トレンチ中央まで続かないのであれば、この部分が方形地割への入り口である可能性が高くなる。

基本層序は、トレンチ中央の東西方向で基盤層が高く、その上に現耕作土と床土が認められる。トレンチの北側には5トレンチまで続く褐色細砂とその下の灰色細砂混じりシルト質細砂があり、北半分を覆っている。トレンチ南側では基盤層が大きく凹んでおり、現耕作土と床土の間に何層もの堆積がある。土坑の大半はこのトレンチ南側の基盤層が低くなっているところで検出された。また、調査区の南西隅で、SX07上層の西側には粘質の層が積層しているのが確認できた。調査範囲が限定されていたため、詳細は不明であるが、遺構を構成する盛土である可能性が考えられる。

ii) 遺 構

掘立柱建物1棟、溝5条、土坑7基が検出された。溝はSD13～15が南北方向で、SB02や方形地割とは平行している。調査区南端は基盤層が大きく削り込まれておらず、その肩部においてSX03～07が集中して検出された。これらの土坑からはいずれも瓦片がまとまって出土している。

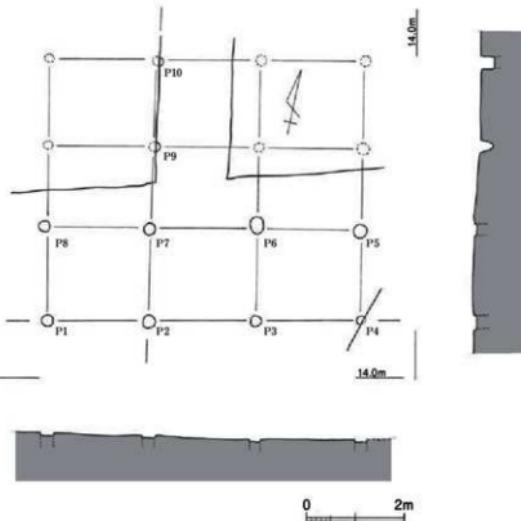
①掘立柱建物 (第12・14図)

SB02と若干の柱穴が検出された。SB02を構成する柱穴以外は調査区内では柱列を復元するには至っていないが、調査区北

端での検出面はSB02と同じであり、大きく時期を隔てるものではないと考えられる。

SB02 トレンチの中央から北側で検出された。検出できたのは南北のみであるが、絶柱であるため南北は3間であることがわかる。

SD13～15、SD17、SX01・02と重複しており、SX01には切られ、SX02を切っているが、その他の遺構との前後関係は不明である。なおSD17は柱穴間にちょ



第14図 SB02

うど納まっており、建物に伴うものである可能性もある。SD13～15とは層位的に同じであり、かつ方向も近いことから、大きく時期を隔てるものではないと考えられる。

規模は3間×3間以上で、方位はN12° Wを示す。唯一確認できた南辺は約6.5mを測る。南北方向は2列目（P2～P10）を見ると、5.4mである。柱穴の掘り形の平面形は円形で、直径25cm程度である。埋土は暗灰色板細砂である。P4の精査時に13世紀前半の同安窯系青磁碗が出土したほか、P6からは須恵器片、P3からは土師器片が出土している。

その他の柱穴 SB02以外にも柱穴が若干検出されているが、建物を復元するには至らなかった。トレンチ北側で検出された柱穴は層位的にSB02と同じであり、大きな時期差はないものと考えられる。

②溝（第16図）

SD13～17の5本が検出された。SD13～15はSB02とほぼ平行する。SD17はSB02の柱穴間にちょうど収まっており、土坑状である。SB02に伴うものである可能性がある。

SD13 トレンチの中央で検出された。N11° Wで、南北方向にトレンチを横切っている。幅約30cm、深さ約45cm、断面形は箱形を呈し、ブロック状の埋土で埋められている。溝底のレベルは南側の方が約10cm低い。この溝を追ってトレンチを拡張したが、5トレンチのSD11との関係は層位的に同じであったが、直接の切り合い関係は明らかにできなかった。SB02、SD17、SX02、SX06と重複関係にあり、SX02、SD17を切り、SX06に切られている。SD17がSB02に伴うものであるならば、このSD13はSD17を切っているので、SB02よりも新しいことができる。出土遺物は瓦、須恵器、土師器片がある。遺構の時期はSB02より新しいとすると、13世紀前半以降とができる。

SD14 トレンチの東端で検出された。N7° Wで、南北方向にトレンチを横切っている。幅約30cm、深さ約15cm、断面形は深い皿形を呈す。溝底のレベルは南側の方が約5cm低い。SB02、SD15と重複関係にあり、SD15を切っている。出土遺物は須恵器杯蓋片や土師器片がある。

SD15 トレンチの東端で検出された。N11° Wで、南北方向にトレンチを横切っている。幅約40cm、深さ約45cm、断面形は台形を呈す。溝底のレベルは南北ではなくて変わらない。SB02、SD15と重複関係にあり、SD14に切られている。出土遺物は瓦のほか、須恵器片、土師器托状皿高台部などがある。

SD16 トレンチの南側、SX05付近で検出された。N75° Wで、ほぼ東西方向である。幅約50cm、深さ約10cm、断面形は浅い皿形を呈す。溝の西側は途切れしており、東側は調査区外へ延びている。他の遺構との重複関係はない。出土遺物はなかった。

SD17 トレンチの中央で検出された。N85° Eの方向である。長さ約2.6m、幅約1.3m、深さ約5cm、断面形は浅い皿形を呈す。SB02の柱穴間に納まっており、SB02に関係する遺構である可能性もある。平面形は梢円形を呈することから、溝というよりは土坑としたほうがよいかもしれない。SD13と重複関係にあり、SD13に切られている。出土遺物は瓦、須恵器片がある。

③土坑（第15・16図）

SX01～07の7基が検出された。SX01・02は調査区北側にあるが、それ以外は調査区南側の基盤層が低くなっているところで検出された。SX02以外は瓦片が集積された状態で出土している。

SX01 トレンチの北西端で検出された。調査区の端であるため、土坑の一部のみ検出された。現在確認できる幅で約1.2m、深さ約35cmであり、断面形は深い皿状を呈す。SB02と重複関係にあり、SB02を切っている。埋土は一部にしまりの強い土層があったが、地表に見られるような版塗状となるものではなかった。出土遺物は鬼瓦（31）、平瓦（36・37）などの瓦のほか、須恵器片、土師器片がある。

SX02 トレンチの北端で検出された。当初土坑として調査したが、調査区を北側に拡張した結果、5トレンチまで続いており、土坑とするよりは、広い範囲で基盤層が一段低くなっている状態である。よって南側の辺のみ確認できた。土坑の南西角は比較的整った弧を描いているが、東側は不整形である。深さ約30cmで、底は平である。SD11・13～15、SB02と重複関係にあり、いずれの遺構にも切られている。

出土遺物は鬼瓦（30）を初めとする瓦が上層から若干と、須恵器杯身片と蓋片、土師器甕（21）がある。

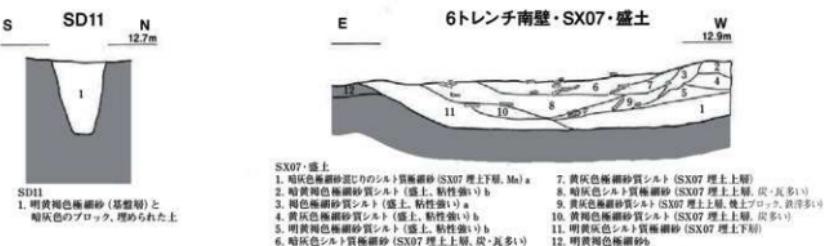
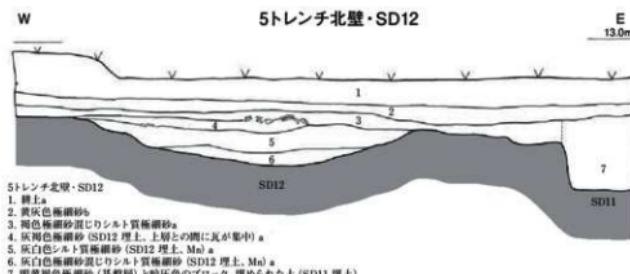
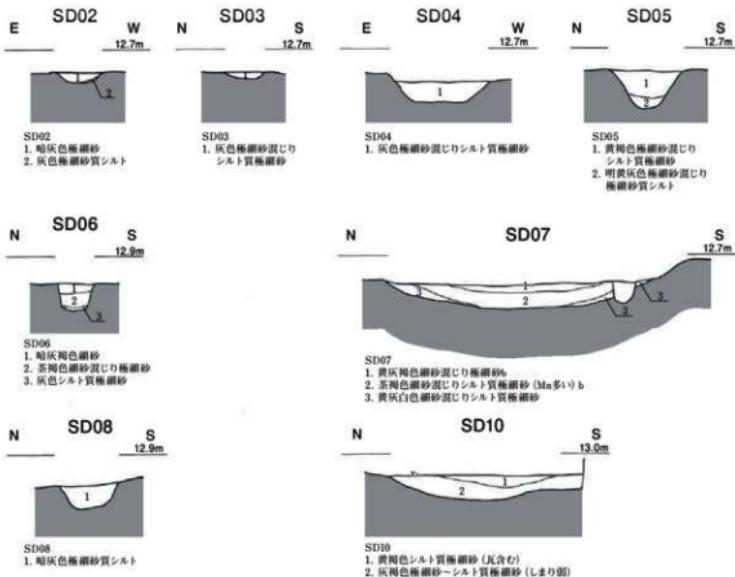
SX03 トレンチの西辺中央で検出された。基盤層が高いところを削り込んでいる土坑で、短径約1.3mを測る。深さは、北側では約25cm、南側では肩のレベルが低くなっているため約15cmと浅い。瓦がまとまって出土しているが、密集しているほどではない。SX03～06と同じような場所に位置しており、連続する同じ性格を持った土坑であるかもしれないが、SX07ほど瓦の集積は密ではなく、また鍛冶関係の遺物も出土していない。出土遺物は瓦以外に須恵器片、土師器片がある。

SX04 トレンチの中央で、基盤層が南側に向かって落ち込む肩部分で検出された。直径約1.0mを測る、平面形は不整形の円形を呈する。深さは約10cmで、断面形は浅い皿状を呈する。瓦がまとまって出土しているが、密集しているほどではない。SX03～06と同じような場所に位置しており、連続する同じ性格を持った土坑であるかもしれないが、SX07ほど瓦の集積は密ではなく、また鍛冶関係の遺物も出土していない。出土遺物は瓦のほか土師器片がある。

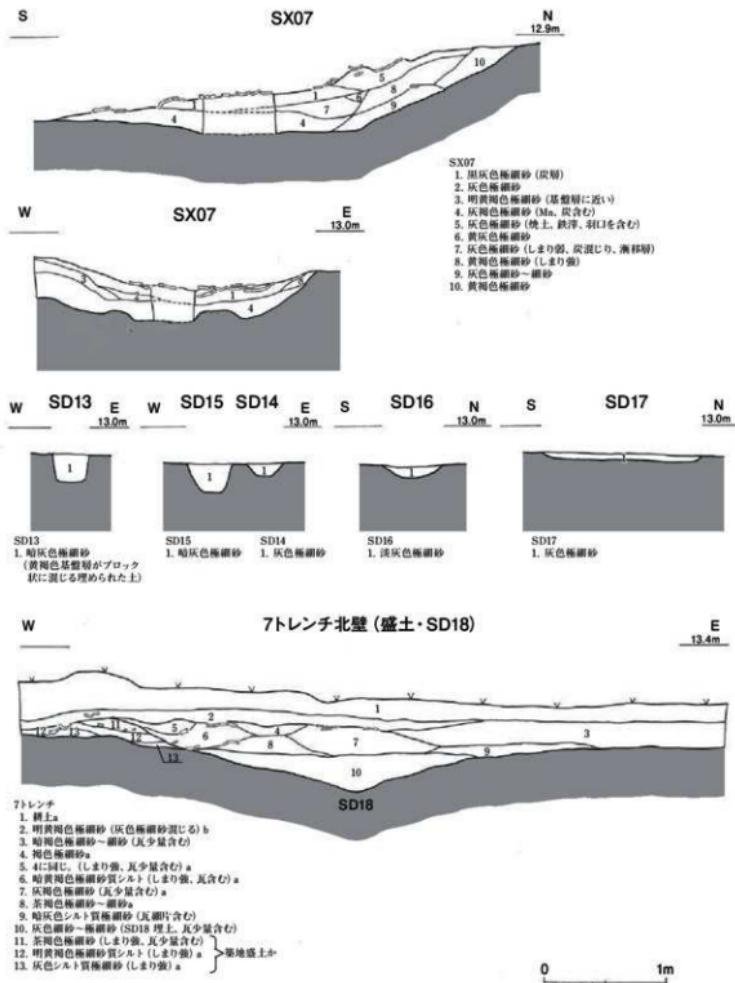
SX05 トレンチの南東端で検出された。基盤層が高いところを削り込んでいる土坑で、確認できる部分で直径約1.6mを測る。深さは、北側で約10cm、南側では肩のレベルが低くなっているため約5cmと浅い。瓦がまとまって出土しているが、密集しているほどではない。SX03～06と同じような場所に位置しており、連続する同じ性格を持った土坑であるかもしれないが、SX07ほど瓦の集積は密ではなく、また鍛冶関係の遺物も出土していない。出土遺物は瓦のほか須恵器片、土師器片がある。

SX06 トレンチの南端で検出された。基盤層が高いところを削り込んでいる土坑で、平面形は円形を呈する。直径約2.1m、深さは、北側では約35cm、南側では肩のレベルが低くなっているため約15cmと浅い。瓦がまとまって出土しているが、密集しているほどではない。SX03～06と同じような場所に位置しており、連続する同じ性格を持った土坑であるかもしれないが、SX07ほど瓦の集積は密ではなく、また鍛冶関係の遺物も出土していない。SD13と重複関係があり、SD13を切っている。出土遺物は瓦のほか須恵器（22）がある。

SX07 トレンチの南西隅で検出された。基盤層が高いトレンチ中央部を北側に向かって削り込んでいる土坑で、平面形は南北に長細い楕円形を呈し、N11°Wの方向であるが、南端と西端は調査区外のため不明である。長径約3.9m以上、短径約3.0m以上、深さは、北側では約75cm、南側では肩のレベルが低くなっているため約45cmと浅くなる。遺物の出土状況から大きく2層に分かれる。上層からは瓦片が大量に出土した（第12回SX07のアミ部分）。瓦片はいずれも手のひら程度の小片がほとんどであり、建物の崩壊で落下した瓦がそのままの状態で出土したのではなく、壊れた瓦を別の場所から移動して投棄したものと考えられる。瓦片の出土状況は北から南に向かって傾斜しており、東西断面では皿状に集積している。瓦片と共に奈良時代の須恵器や、土師器が団化できたものだけで10点以上出土しており、今回の調査の中で最も遺物に恵まれている。瓦片の直下からは、炭層が確認された（写真図版6）。炭層には鉄滓、輪の羽口が含まれており、鍛冶に伴うものであると考えられるが、周囲が焼けた状態や、焼土塊もなく、また一部に限られているため、これらについても別の場所から移動されたものと考えられる。炭の年代測定の結果、資料①が7世紀後葉～9世紀前葉、あるいは9世紀中葉、資料②が6世紀中



第15図 造構断面図 (1)



第16図 造構断面図 (2)

葉～7世紀前葉となっており（第3章第3節参照）、資料②が土器の年代より古いが、資料①の測定値とは矛盾しない。また、鉄滓の分析の結果は第3章第2節に詳しい。

瓦片が集積していた範囲の南東隅、瓦片の直下からは白色土や、一辺約40cmの竜山石片が出土している。白色土の分析結果は第3章第2節に詳しい。竜山石片には加工痕はないが、方形地割内に鎮座する大歳神社に置かれた礎石と考えられる石が竜山石であることから、関連性が考えられる。

これらの瓦を中心とした遺物を含む層と基盤層の間の層を下層とする。このような瓦溜まりの下に間層があるという状況は他の土坑では観察されない。この間層は第4層、第8・9層の灰褐色極細砂や灰色極細砂～細砂、黄褐色極細砂で、特にしまりの強いものではなかった。この層内で土坑の北西隅からは完形の平瓦（34）が出土しているが、上層の瓦片が小片であるとの対照的であり、また、今回の調査した中で唯一の完形品である。

また、調査区南西隅では、この間層の直上に粘性の有る層の積層が確認できた。何らかの造構に伴う盛土である可能性が考えられる。

このように、SX07とSX03-06は同じような場所に位置しているが、後者はSX07の上層ほど瓦の集積が密ではなく、また鍛冶関係の遺物も出土していないため、造構の性格が異なるのであろう。

上層からの出土遺物は、軒丸瓦（27・29）、丸瓦（33）、平瓦（34・35・39～45、47～49）を含む多量の瓦片のほか、須恵器（8～18・23）、土師器（19）、輪羽口（20）、キャップ状鉄製品（26）、鉄滓などがある。なお、丸瓦と平瓦の重量比はおよそ2：8であった。

7トレンチ（第16・17図）

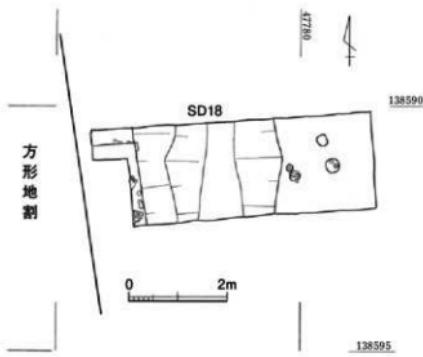
i) 概要

方形地割に沿う南北方向の溝を確認するため、発掘調査が可能な範囲で最も北側に、トレンチを設定した。基本層序は現在の耕作土とその下の床土、さらにその下に暗褐色極細砂があり、トレンチ東端ではその下は基盤層となっている。トレンチ中央部分にはSD18がありその埋土がある。トレンチ西端には、しまりの強い層が基盤層の上にあり、盛土である可能性が考えられる。床土直下から火打金（25）が出土した。

ii) 造構（第16図）

溝1条と、盛土、柱穴が確認できた。

SD18 トレンチを横断するよう検出された。方位は西側の肩部分でN9°W、底でN3°Wであり、北からやや西に振っている。深さ約60cm、幅約2.9m、断面形は幅の広い逆三角形状を呈する。溝内の西側斜面は途中で緩い段がある。溝の西側の埋土直上からは、瓦片がまとまって出土した。溝の埋土からも瓦片が出土しているが、上



第17図 7トレンチ平面図

層よりは少ない。このような瓦の出土状況は5トレンチのSD12に近い。出土遺物は瓦のはか、土師器甕(24)が溝の西斜面から出土した。

盛土 トレンチの西端で確認できた。SD18の西側肩に盛り上げている。しまりが強い層が3層確認でき、各層の高さは10cm程度、合計約25cmの高さで確認できた。盛土内には瓦片が含まれている。東側にあるSD18の肩からは、丸瓦(32)、平瓦(38・46)などの比較的破片の大きい瓦がまとめて出土している(写真図版8)。出土遺物は瓦のはか、須恵器片がある。

3. 出土遺物

各トレンチから瓦類のはか、土器、鉄製品、輪羽口、鍛治溝が出土している。特に、6トレンチから出土した瓦類や須恵器、土師器、輪羽口、鉄製品を中心に図化した。

i) 土器・土製品(第18図)

1~4は須恵器である。1は碗である。底部には糸切り痕が確認できる。2は須恵器鉢の口縁部である。縁部をわずかにつまみ上げ、丸くおさめる。外面には稜をもつ。3・4は須恵器小皿である。3の底部には糸切り痕が認められる。

5は土師質の土製品で、土馬の脚のようであるが、明らかでない。

6~18・22・23は須恵器である。6は杯Bの高台部分である。細片のため、径は不明である。7は口縁部である。直線的に延び若干開く口縁部で、体部の内面には一部同心円文が確認できる。横瓶と思われる。8は棱輪蓋で、環状鉢をもつ。天井部は平らで、ゆるやかに外方へ屈曲する。天井部にはヘラ削りが施される。鉢から一部口縁部にかけて緑色の自然釉が認められる。9~12・22・23は杯B蓋である。天井部からゆるやかに内湾する。10~12・22の天井部にはヘラ削りが認められる。口縁端部の屈曲がやや鋭い9・10と、屈曲があまく、端部も丸い11・12がある。摘みはやや頂部が盛り上がるものが大半であり、特に22は尖り気味であるが、9はほとんど平らである。23は小型で、天井部から稜をもって屈曲する。9・22は転用硯である。13~18は杯Bである。いずれも底部に回転ヘラ削りが施される。13~15は底部から体部へゆるやかに湾曲し、15は屈曲部より内側に直立する高台を貼り付ける。16は底部から体部へ鋭く屈曲し、高台は外側へ踏ん張っている。18は大型で、直径17.8cmを測る。

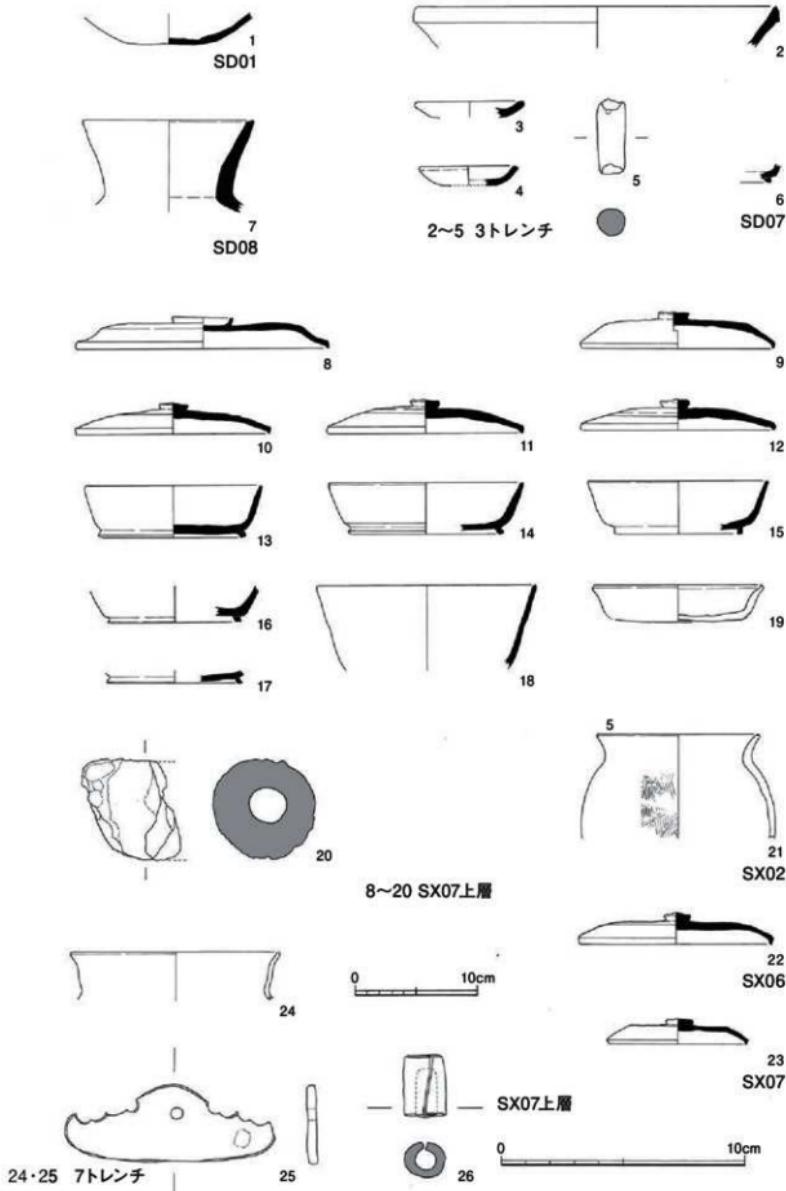
19は土師器杯である。表面が荒れており、暗文は確認できない。口縁端部を若干つまみ上げる。

20は輪羽口である。外径9.5cm、内径3.1cmを測る。強く熱を受けている側(図の左側)は斜めになってしまっており、右側は欠損している。かなり脆くて剥離するため、樹脂を含浸し固定した。

21・24は土師器である。21は甕である。外面は縱方向のハケの後横ハケ、内面は上半に横ナデ、下半には指頭圧痕が認められる。24は甕の口縁部である。薄く、上下に2段のナデが認められる。端部は丸くおさめられる。

ii) 鉄製品(第18図)

25は火打金である。三角形の両底角が上方に反り上がり、打撃部が弧状を描く。頂部に直径5mm程の円孔がX線画像で確認できる。26は用途不明鉄製品で、キャップ状を呈する。断面形は外径が直径1.8cm、内径が0.9cmの円形である。筒部は鉄板を巻いたため、合わさる部分に約2mm程度の隙間が認められる。頂部は厚さ約5mmで塞がっている。



第18図 出土遺物（土器・鉄製品）

iii) 瓦類(第19~23図)

軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦が確認できた。細片のものが多かったため、特徴的なものをピックアップして図示している。量が多かった丸瓦と平瓦は合計261kgあり、重量比では、丸瓦：平瓦=58.6kg:202.45kg=22%:78%であった。

軒丸瓦(27~29)

出土したものの全てを図化した。27~29はいずれも細片であるが、いわゆる古大内式軒丸瓦と判断できる。27を見ると、瓦当部に丸瓦を差し込みその内外に粘土を充填することによって接合している。(写真図版12) 接合後は丸瓦内面を縱方向のナデ、外面は縱方向のケズリが認められる。

軒平瓦(50)

小片であるが古大内式軒平瓦と考えられ、中心飾りのやや左側にある。摩滅のため写真図版11にのみ掲載した。

鬼瓦(30・31)

2片確認できた。30は口の右上側から額頭にかけての破片、31は口の左側の破片である。厚さは5cm程度であり、焼成、胎土も似ているが、出土遺構は異なっている。30には范傷が明瞭に認められ、左下から右に向かって多くの筋が認められる。

丸瓦(32・33)

確認できた破片ではいずれも玉縁式丸瓦であり、そのうち2点のみ図示した。法量は全長35.6~35.2cm、玉縁長4.9~4.5cm、筒部幅13.0~14.0cm、玉縁幅11.0~10.0cm、厚さ18~20cmである。いずれも凸面は横方向のケズリ、凹面には全体に粘土接合痕、糸切り痕、布目痕があり、側端面内縁にはケズリが確認できる。

32の凸面には玉縁部分に粘土を足した際の接合痕が横方向に認められる。凹面側端面内縁のケズリは、遺存状況が悪いため不明瞭であるが、少なくとも幅の広いものではない。布目痕は玉縁部も含めて全面で確認できる。33の凹面中央には布目痕が縱方向に崖んだ痕跡が認められる。縱方向の粘土接合痕が明瞭で、玉縁方向からみて右回りに巻き付けられていることがわかる。また、先端部付近には粘土が不足した部分に補充した際の接合痕も見える。布目痕は玉縁部では見えず、横やや斜め方向のナデが確認できるのみである。先端部、側端面内縁には幅広い面取り状のケズリが施される。また33の先端部付近の側端面には横方向の棒状圧痕が認められる(写真12)。

平瓦(34~49)

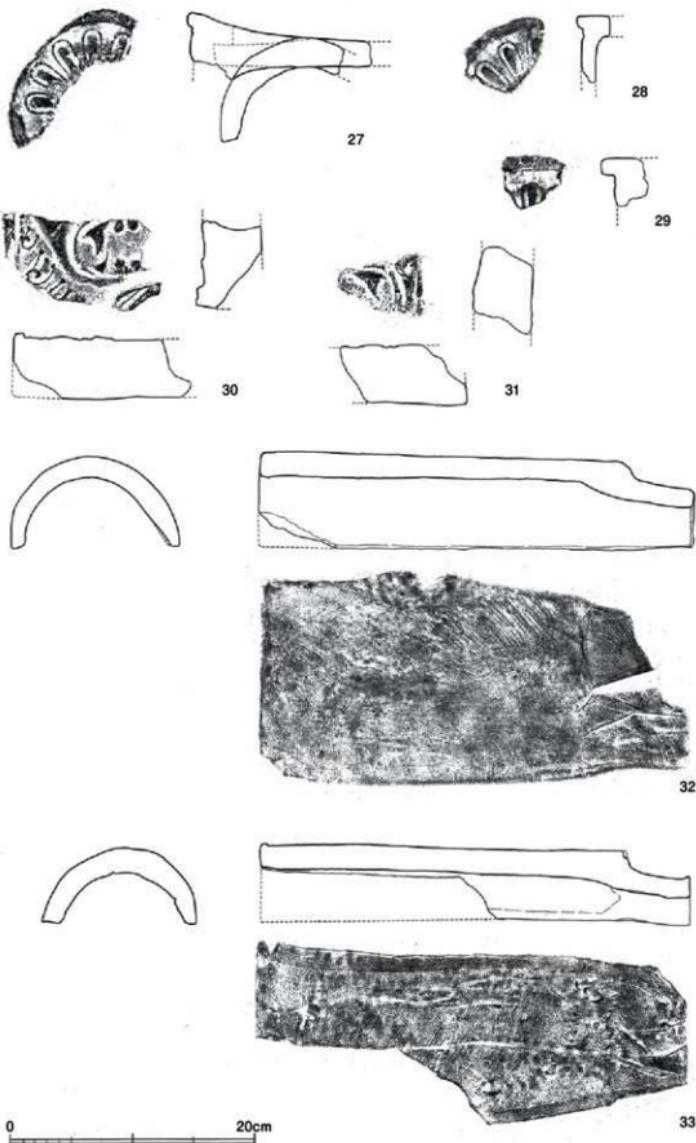
出土瓦の中で最も量が多い。法量が分かる個体が少なく、完形となる34を見ると、全長32.6cm、広端幅26.0cm、狹端幅21.0cm、厚さ1.7cmを測る。

凹面の調整は糸切り痕、布目痕と縱方向のナデが確認できる。凸面の調整はタタキの後、部分的に縱方向のナデが認められるが、一部の瓦には凹面凸面共にナデが確認できないものもある。側端面内縁には面取り状のケズリが施される個体が多いが、幅には違いがある。いずれの個体も桶巻作りの痕跡は確認できなかった。

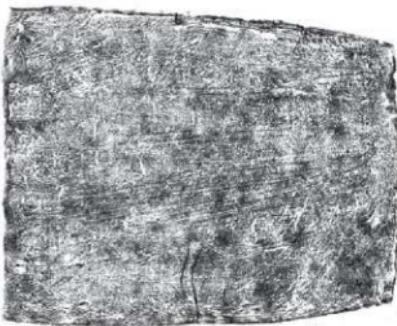
34の凸面はタタキのうち広狭両端面付近を中心



写真12 丸瓦側端面の棒状圧痕



第19図 出土遺物（瓦 1）



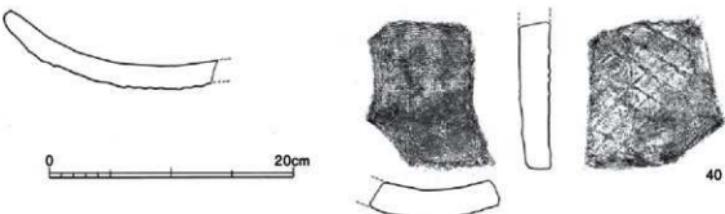
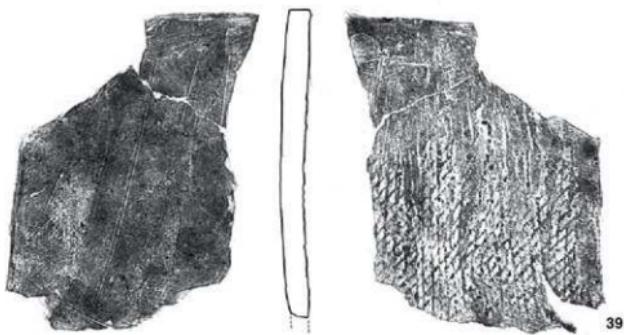
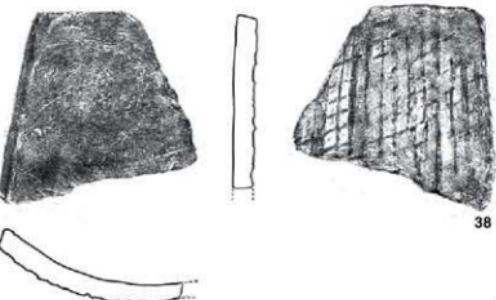
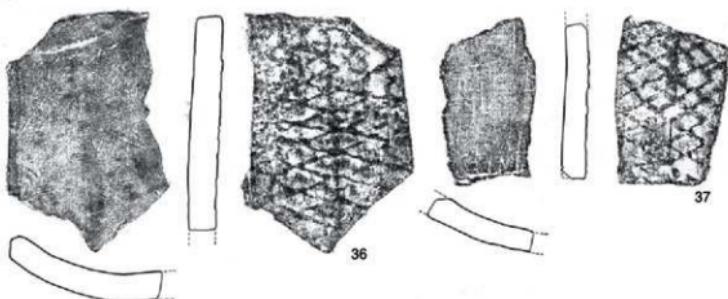
34



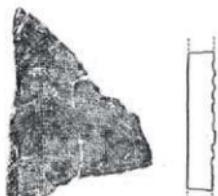
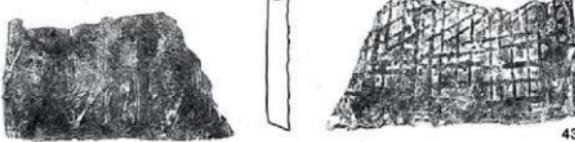
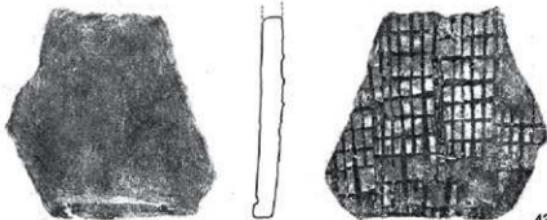
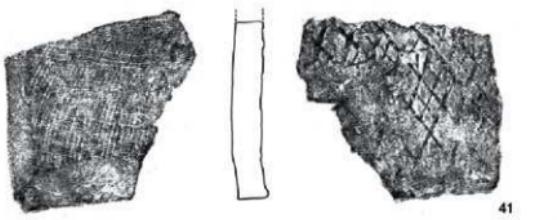
35



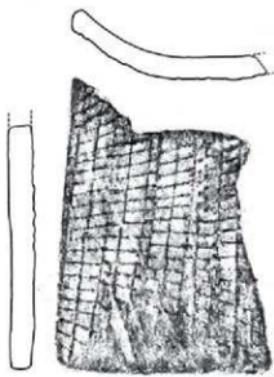
第20図 出土遺物（瓦2）



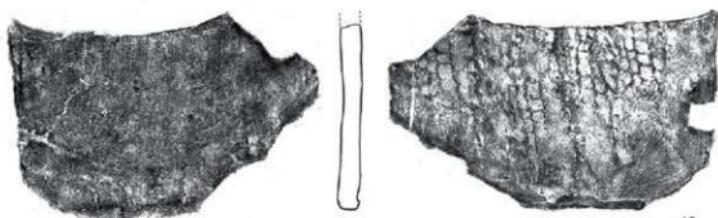
第21図 出土遺物（瓦 3）



0 10cm



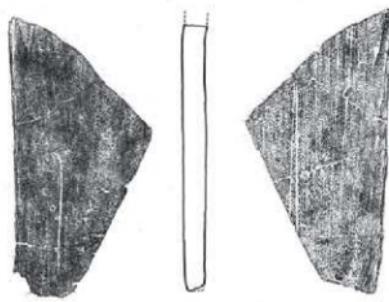
第22図 出土遺物（瓦 4）



46



47



48



49



第23図 出土遺物（瓦 5）

ナデが認められ、一部は側縁にかけて弧を描いてつながっている。凸面中央部にもナデが認められるが一部にすぎない。凹面は幅1cmほどの狭いナデが10条ほど認められ、5本の指による2回程のナデが施されたようである。側端面には幅狭のケズリが認められ、そのために側端面からの粘土が凹面側にも巻き込んでいる。狭端面付近には紐状の圧痕が認められる。35は遺存状況が悪く凹面は不明瞭であるが、布目を幅2cm程のナデで丁寧に消している状況がうかがえる。凸面は側端面付近の一部がナデにより凹んでいる。36の凹面には布目痕と縦方向のナデが確認できる。側端面内縁には2条の幅狭のケズリが認められる。狭端面付近にも幅広のケズリが認められるが、ほとんどケズリ込まれていない。布目痕のある紐状の圧痕が認められる。37の凹面は布目痕と、縦方向の幅の狭いナデが認められる。端面付近には紐状の圧痕が認められる。38の凹面の狭端面付近にはナデが認められる。凹面は側端面付近から狭端面付近につながる紐状の圧痕があり、布目痕はこの部分まで確認できる。側端面内縁には2条の幅狭のケズリが認められる。39の凸面の狭端面付近には調整がなく粗雑である。凹面は布目痕と幅の広い縦方向のナデが確認できる。狭端面付近には紐状の圧痕があるが、横方向のナデにより部分的に消えている。側端面内縁には幅の狭い2条のケズリが認められる。40の凸面は斜格子のタタキが確認できるが、それに切られるような縦・横方向のタタキ目もうかがえる。凹面の端面付近には幅広の2条のケズリが認められる。41の凸面は斜方向のタタキが確認できるが、一部に横方向のタタキ目もある。広端面付近にはナデが認められる。凹面は側端面内縁にケズリが2条認められる。内側のケズリは幅が広い。広端面内縁にも幅広のケズリが認められる。42の凹面には布目が確認できるが、ほとんどがナデにより消えている。端面付近には幅1cm近い紐状の圧痕があり、布目はこの部分まで確認できる。43の凸面は格子と斜格子の両方のタタキ目が認められる。端面付近は部分的にナデが認められる。凹面は布目痕と縦方向のナデが認められる。端面内縁には幅狭のケズリが認められる。44の凸面には側縁に平行する長方形のタタキが確認できるが、横方向の筋は放射状であり、端に行くに従って斜格子となっている。凹面は摩滅が著しいが、布目痕が若干確認できる。ケズリなどは確認できない。45の凸面の側端面付近は幅広のケズリが認められる。46の凸面は格子目タタキであるが、タタキ板の劣化のためか豆粒状の圧痕となっている。側端面から狭端面に沿ってつながるケズリが認められる。凹面は布目痕と幅広のナデが確認できる。端面内縁には幅狭のケズリが認められる。47の凸面には幅4.5cm以上の無文のタタキが認められ、約5mmの段がつくほど強く当たっている。側端面にはケズリが認められるが凹面側は丸くなってしまおり、明瞭なケズリはない。凹面は布目痕と縦方向のナデが認められる。布目痕は広端面近くで確認できる紐状の圧痕まで認められる。広端面近くは幅狭のケズリが認められる。48の凸面は繩目が確認でき、側端面内縁には幅広のケズリが認められる。凹面は布目が一部に認められるが、ほとんどナデにより消えている。ナデは側端面付近まで及ぶ。49は布目痕、繩目タタキ以外の調整は確認できない。端面付近は紐状の圧痕が認められ、布目痕はこの部分まで認められる。この部分から端面までは平らに削られている。

iv) 鉄 淬

SX07上層を中心にして炭や蘿羽口と共に出土している。残留鉄分によって分類すると、比重の重いものが2.6kg(写真図版16-51)、比重の軽いものが4.8kg(同52)、ガラス質のものが0.7kg(同53)、合計約8.1kgであった。これらはそれぞれ精練段階で生成される鍛冶滓、鍛練段階で生成される鍛錬鍛治滓、炉内で蘿の羽口に生成されるガラス質滓に相当すると思われる。一部の資料を分析しており、第3章第2節に詳しい。

(3) 石製唐居敷の調査（第24図）

方形地割内に位置する大歳神社には、古大内遺跡から出土したとされる礎石が多数置かれていることは以前から知られていた。現在でも、22石が確認できる。その中でも大型のものに、唐居敷に見られる方立穴らしい加工が認められたため、調査を実施した。左右の1対が確認できたが、いずれも神社境内で庭石のように立てられ、方立穴や軸摺穴を隠すように下部が埋められていたために、これまで唐居敷と気付かなかつたようである。

この1対の石製唐居敷が門として使用されている状態で、外側から内側に向かって左側の石を唐居敷1、右側の石を唐居敷2とする。いずれも石材は黄色の竜山石を使用している。

調査にあたっては地元の了解のもと、現況に復することを条件に石材の移動を行ったが、唐居敷2については植木や神社拝殿の関係で現状に復することが困難と考え、現状のままで移動せずに調査を実施している。

i) 唐居敷1

平面形は五角形を呈し、長さ約118cm、幅約89cm、厚さ約43cmを測る。上面は剥離が多く、方立穴、軸摺穴のいずれも上面は欠けている。方立穴は上面で約31cm×13cm、底面で約29cm×9cm、深さ約8cmを測る。底面の隅にはノミの痕跡が残される。軸摺穴は上側がやや細長い長方形を呈し、扉の軸による摩滅のためか、さらに梢円形にくほんでいる。上側の長方形部分は上面で約13cm×10cm、底面で約12cm×8.5cm、深さ約6cm、下側の梢円形部分は上面で長径約8.5cm、短径約6.5cm、下面で長径約7cm、短径約4.5cm程度である。

ii) 唐居敷2

方立穴、軸摺穴を確認するため、手前にあった石材のみ移動し、現状のまま調査を行った。平面形は細長い三角形を呈し、長さ130cm以上、幅約65cm、厚さ約46cmを測る。凹凸があるものの全体的に各面とも平面的である。方立穴、軸摺穴とも、唐居敷1より遺存状況がよく、石材も硬質な感じを受ける。

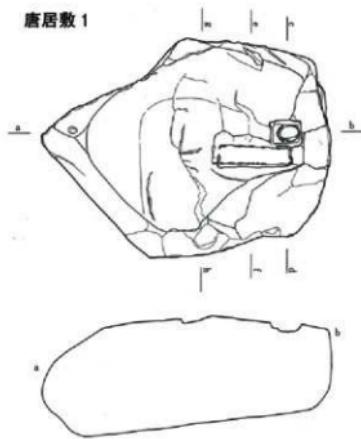
方立穴は長方形を呈し、上面で約30cm×10cm、底面で約26cm×6cm、深さ5cmを測る。軸摺穴は上側がほぼ正方形を呈し、扉の軸による摩滅のためか、さらに梢円形にくほんでいる。上側の正方形部分は上面で11cm×10cm、底面で9cm×8cm、深さ7cm、下側の梢円形部分は上面で長径14cm、短径7cm、下面で長径9cm、短径4cm程度である。軸の摩滅が円形ではなく、梢円形のは、扉の軸がずれたためであろう。

iii) 礎 石

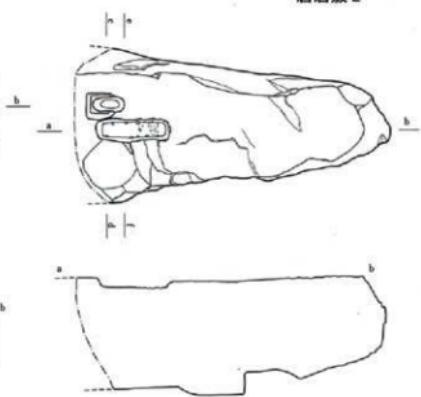
神社境内に多く残されている礎石と思われる石材の内、全体の観察が可能なものを1点図化した。現状で神社拝殿のそば、向かって右側にあるものである。平面形は角が丸くなった6角形を呈し、長さ最大92cm、幅81.5cm、確認できる高さは46cmを測る。上面には60cm四方の平坦面がある。断面形は細長く、角の丸い算盤玉形を呈するが、下方は土中であり、さらに厚みがあると思われる。明瞭な加工痕は観察できなかった。これ以外の礎石を観察すると、平坦面があり、その反対側は中央が高く山形をしたような形状のものが多い。大きさは80cm×80cm×50cm程度のものが中心である。

また、これらの石材以外に唐居敷でも礎石でもない大型の石材も存在しているが、現在は地中に埋められている部分もあるため、用途は不明である。

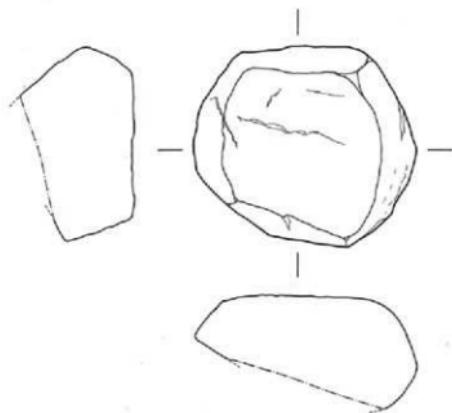
唐居數 1



唐居數 2



礎石



0 1m

第24回 石製唐居數・礎石

表3 土器・金属器一覧表

番号	出土場所			種別			法量(cm)			形態・手法		胎・土		焼成		色調	
	トレンチ	土	石	土	石	骨	口径(長さ)	底面(厚)	底面(幅)	6.6	回転・手打	相思・相思多く含t ₂					
1	31トレンチ	SX004	中層	集思器	棒	-	-	-	-	-	回転・手打	相思・相思多く含t ₂					
2	31トレンチ	中央3.5m点	包含層	集思器	棒	-	39.8	-	-	-	回転・手打	相思・相思多く含t ₂					
3	31トレンチ	-	包含層	集思器	小皿	8.6	1.4	-	-	-	輪底丸t ₂ 、掌掌等つくり	相思	相思	相思	相思	相思	
4	31トレンチ	中央過ち点A	包含層	集思器	小皿	7.2	2.1	4.4	4.4	回転・手打	輪底丸t ₂ 、掌掌等つくり	相思	相思	相思	相思	相思	
5	31トレンチ	包含層	土製品	土製品	土	2.3	2.2	-	-	-	掌掌の跡不明	相思	相思	相思	相思	相思	
6	31トレンチ	SX007	包含層	集思器	棒	-	-	-	-	-	回転ナギ	相思・相思	相思	相思	相思	相思	
7	41トレンチ	SX008	包含層	集思器	棒	13.8	-	-	-	-	回転ナギ	相思等当て具見	相思	相思	相思	相思	
8	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	20.6	2.7	-	-	-	天井部斜面ハラタギ、外面口沿	相思	相思	相思	相思	相思	
9	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	15.6	3.1	-	-	-	回転ナギ、外側用	相思	相思	相思	相思	相思	
10	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	15.8	2.6	-	-	-	天井部斜面ハラタギ	相思	相思	相思	相思	相思	
11	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	16.0	2.8	-	-	-	天井部斜面ハラタギ	相思	相思	相思	相思	相思	
12	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	15.6	2.5	-	-	-	天井部斜面ハラタギ	相思	相思	相思	相思	相思	
13	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	14.4	6.3	-	-	-	底部斜面ハラタギ	相思	相思	相思	相思	相思	
14	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	15.8	4.3	12.2	12.2	底部斜面ハラタギ	相思	相思	相思	相思	相思		
15	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	14.6	4.4	10.4	10.4	回転ナギ	相思	相思	相思	相思	相思		
16	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	-	-	-	-	-	底部ハラタギ	相思	相思	相思	相思	相思	
17	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	-	-	-	-	-	10.6	底部ナギ	相思	相思	相思	相思	
18	61トレンチ	SX007	上層	集思器	棒	17.8	-	-	-	-	回転ナギ	相思	相思	相思	相思	相思	
19	61トレンチ	SX007	上層	土製品	土	13.6	3.1	10.4	10.4	口縁周辺斜千折り曲面が付くおざかわら	相思	相思	相思	相思	相思	相思	
20	61トレンチ	SX007	上層	土製品	土	30.0	外径	3.0	8.5	-	底部3mm程の粒若干有	相思	相思	相思	相思	相思	
21	61トレンチ	SX002	-	土製品	要	13.0	-	-	-	-	口縁はく外角、底部はく内めら	相思	相思	相思	相思	相思	
22	61トレンチ	SX006	上層子下層	集思器	棒	15.6	2.6	-	-	-	外側に方頭のツバのつる、一部は内凹	相思	相思	相思	相思	相思	
23	61トレンチ	SX007	上層子下層	集思器	棒	11.2	2.1	-	-	-	回転ナギ	相思	相思	相思	相思	相思	
24	71トレンチ	地上直層	-	土製品	要	16.8	-	-	-	-	口縁22段のリブにより直角、底部は丸い	相思	相思	相思	相思	相思	
25	71トレンチ	包含層	生土下	陶製品	火打金	8.7	0.4	3.1	3.1	三角形の窓付近と把手(径5mm)をもつ、両足角	直上方へ突起	-	-	-	-	-	
26	61トレンチ	SX007	上層	陶製品	用具	2.6	1.5	1.7	1.7	厚5mmの厚底物で、片側面部には厚さ5mmの蓋がされている。	-	-	-	-	-	-	

表 4 瓦一覽表

順序 番号	形 種	出土場所		法 量(m)	長 さ	幅(底面) 幅(表面)	厚 さ	地 成	色 調			
		土 層	地 質						表	底		
27	軒瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	2.3	やや不規 5Y4/1灰白色		
28	軒瓦	3トレンチ	-	-	-	-	-	-	不規 7.5Y3/5灰白	-		
29	軒瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	やや薄 2.5Y3/5灰白	-		
30	瓦	6トレンチ	SX02	上層	-	-	-	-	5.2	不規 5Y7/1灰白色		
31	瓦	6トレンチ	SX01	-	-	-	-	4.9	やや薄 5Y3/3灰白色	5Y6/1灰白色		
32	瓦	7トレンチ	盛土東回	356	(14.0)	14.0	4.9	11.0	2.0	やや薄 10Y8/4灰白色	2.5Y8/4灰白色	
33	瓦	6トレンチ	SX07	上層	35.2	-	13.0	4.5	10.0	1.8	良 5Y8/3灰白色	-
34	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	32.6	26.0	21.0	-	-	1.7	良 7.5Y6/1灰白	7.5Y6/1灰白
35	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	(26.5)	-	-	-	1.7	やや不規 2.5Y8/3灰白色	2.5Y8/3灰白色
36	平瓦	6トレンチ	SX01	-	-	-	-	-	2.2	良 5Y7/2灰白色	5Y7/2灰白色	
37	平瓦	6トレンチ	SX01	-	-	-	-	-	1.9	良 7.5Y6/1灰白	7.5Y6/1灰白	
38	平瓦	7トレンチ	盛土東回	-	-	-	-	-	1.7	良 10Y8/2灰白色	10Y8/2灰白色	
39	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	2.0	良 5Y8/2灰白色	5Y8/2灰白色	
40	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	2.3	不規 2.5Y5/1灰白	2.5Y5/3灰白色	
41	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	2.6	やや不規 5Y4/1灰白	5Y4/1灰白	
42	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	1.7	やや不規 5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	
43	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	2.0	良 7.5Y6/1灰白	5Y4/1灰白	
44	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	1.9	不規 5Y4/1灰白	5Y6/1灰白	
45	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	2.2	良 2.5Y8/2灰白色	2.5Y5/1灰白	
46	平瓦	7トレンチ	盛土東回	-	-	(24.0)	-	-	1.7	良 2.5Y8/2灰白色	2.5Y5/1灰白	
47	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	2.8	良 7.5Y6/1灰白	10Y4/1灰白	
48	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	1.9	良 7.5Y5/1灰白	5Y5/1灰白	
49	平瓦	6トレンチ	SX07	上層	-	-	-	-	2.3	良 7.5Y6/1灰白	10Y5/1灰白	
50	軒平瓦	5トレンチ	包含層	-	-	-	-	-	-	不規 5Y8/3灰白色	-	

第3章 分析・鑑定

第1節 邑美駅家～賀古駅家における古代山陽道と地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。人間活動には、居住、生産、および埋葬などをはじめとする多様なものが認められる。古代山陽道の建設もそのひとつである。この道は、古代における国家プロジェクトの一環として計画的につくられ、平野では直線状に延びることが多い。こうした古道は通行の利便性を考慮して地形と関連づけてつくられた可能性が高い。そのため、古道の実態や建設計画を詳細に解明するには、道に沿った地形環境を調査し、それらの関連性を考察する必要があると考えられる。

本稿では、邑美駅家（仮称）付近から賀古駅家付近にかけての古代山陽道推定経路（以下、古代山陽道）と地形環境との関係について明らかにしたい。調査では、主に空中写真的判読と現地踏査によって地形を分類し、これに古代山陽道の推定経路を重ね合わせて考察した。空中写真は縮尺15,000分の1のものを用い、地形分類は古代山陽道を中心に幅およそ2kmの範囲を約10kmの長さにわたって行った。

2. 邑美駅家付近～賀古駅家付近における地形分布の概観

邑美駅家、賀古駅家、ならびに古代山陽道は印南台地⁽¹⁾の南西部にみられる。邑美駅家は明石市の長坂寺遺跡に、また賀古駅家は加古川市の古大内遺跡に存在したと考えられており、それらを結ぶ古代山陽道は現海岸線にほぼ平行する北西～南東方向に直線状に延びると推定される（第25図）。長坂寺遺跡付近から古大内遺跡付近に至る古代山陽道の両側には、更新世段丘、完新世段丘、および現氾濫原などが認められる。

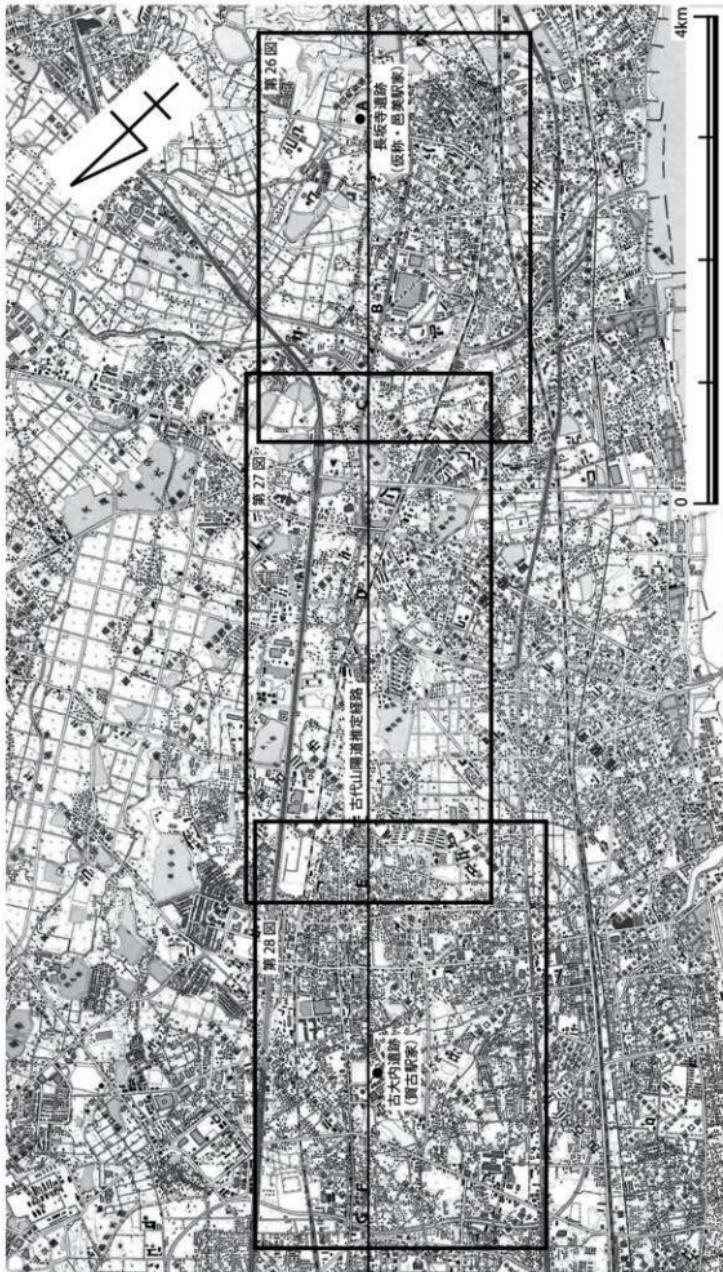
更新世段丘は、最もよく発達し、古代山陽道を中心とした幅約2kmの範囲では25面に分けられる。本稿では、これらを高位のものから順に更新世段丘1～25と呼ぶ。こうした更新世段丘を下刻して、瀬戸川や喜瀬川、加古川の支流である別府川などの小規模な河川が南西の瀬戸内海に向かって流れ下る。完新世段丘や現氾濫原はこれらの河川沿いに分布する。

本稿では、長坂寺遺跡付近から古大内遺跡付近までの古代山陽道を地形分布の特徴が異なる4区間に分け、それぞれにおける地形環境、ならびにそれと古代山陽道との関係について述べる。各区間は第25図に示すA～B地点間、B～C地点間、C～E地点間、およびE～G地点間である。

3. 各区間における地形環境と古代山陽道の関係

（1）A～B地点間について

この区間には、古代山陽道の両側に更新世段丘とこれを刻む開析谷が認められる（第26図）。更新世段丘については、更新世段丘1～9・13・14・24・25が分布し、高位の段丘群である更新世段丘1～9と低位のそれにあたる他の段丘に大きく分けられる。両者の境界には、5～10mの大きい比高をもつ段



第25図 古代山陽道、駅家および地形分類別の位置（下図には国土地理院発行「加古川」三木」「高砂」「東二見」を使用）

丘崖が存在する。とくに高位の段丘群では、各段丘面が南北に長く発達し、この傾向は更新世段丘5～8で顕著である。このような高位の段丘群には、開析谷が多くみられる。これらは、50～200mの幅で、比較的深く刻まれている。

古代山陽道は、A地点付近で開析谷を通過する。これは比高の大きい段丘崖を避けて道をつくったためである。A地点付近では、古代山陽道が更新世段丘24から5へと延び、これらは約10mの高低差をもつ。両段丘の間に分布する開析谷の谷底は、東へ急傾斜し、更新世段丘24と傾斜変換線で接する。また、開析谷と更新世段丘5との間には、2～3mの崖がみられる。A地点付近では、開析谷を利用することによって、傾斜する谷底と小さい比高の崖を通るだけで高低差の大きい段丘間を通行できる。

A～B地点間の古代山陽道は起伏の小さい経路になっている。ここでは、道が更新世段丘5～8を通る。この区間で最も高位の更新世段丘5には、長坂寺遺跡が位置し、古代山陽道はそこから西へ1面ずつ低位になる段丘面を通過していく。各段丘の段丘崖は比高1～2mであり、道は西に向かって段階的に高度を下げる比較的緩やかな状況を呈する。

(2) B～C地点間について

本区間では、瀬戸川と清水川の両岸に更新世段丘13・14・24や現氾濫原、支流性扇状地などがみられる(第26図)。これらのうち現氾濫原は、河川に沿って分布し、洪水によって冠水する危険性が高い。そのため、古代山陽道が通過する現氾濫原は下流(南西)と比べて幅が小さい。

B地点付近の古代山陽道は、支流性扇状地を通るため、比高の大きい崖を横断しない。この付近では、更新世段丘8の段丘面が瀬戸川の現河床よりおよそ10m高い。これらの間には、古代山陽道に沿って支流性扇状地と更新世段丘14がみられる。支流性扇状地は、東側の更新世段丘から供給された堆積物によってその段丘崖下に形成されたもので、地表高度は西へ急激に下がる。この扇状地は、東側の更新世段丘8と比高約2mの段丘崖で境され、西側の更新世段丘14とは傾斜変換線で接する。B地点付近は高低差が大きいにもかかわらず、古代山陽道は比高の小さい崖と傾斜する扇状地を通るにすぎない。

対岸のC地点付近では、古代山陽道が西に向かって更新世段丘14と24を経て13に至る。これらはそれぞれ比高約1mの段丘崖を有する。ここでは、更新世段丘13が清水川の現河床より約5m高い。この高低差を通行しやすくするため、古代山陽道は2面の段丘を経て段階状に通されている。

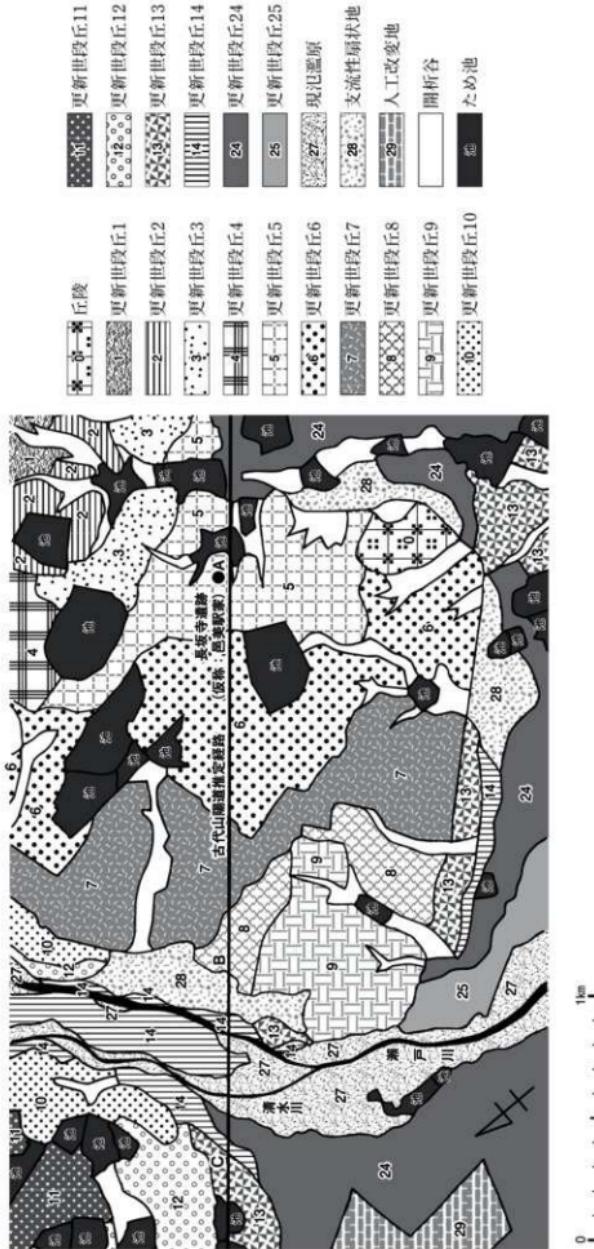
(3) C～E地点間について

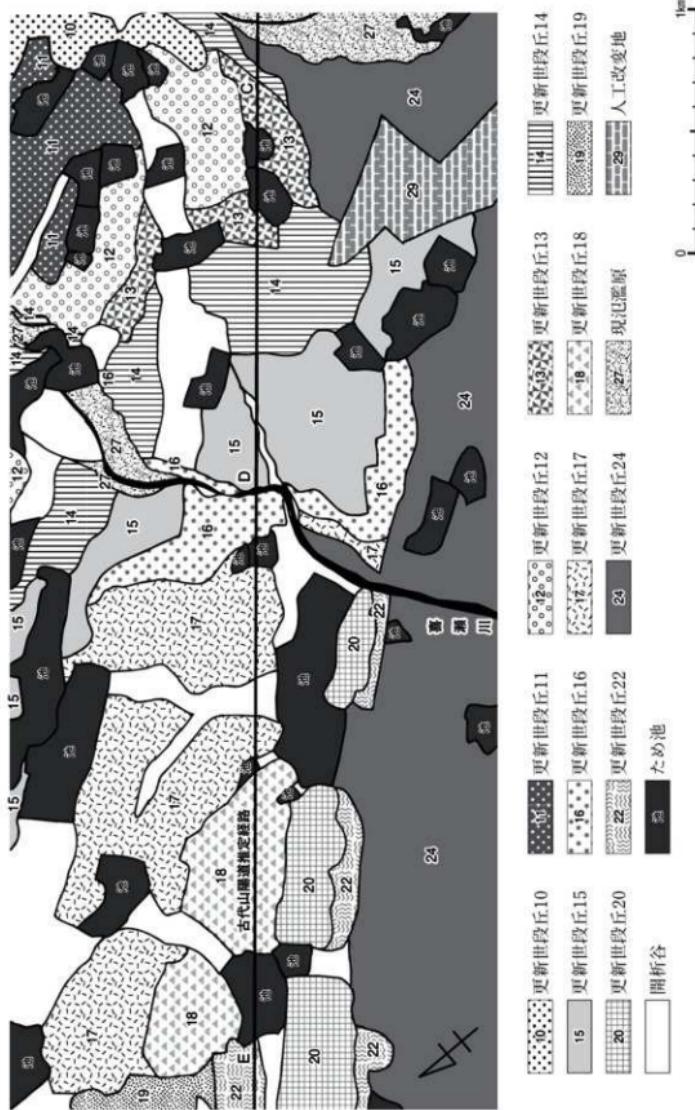
当該区間には、更新世段丘10～18・20・22・24、現氾濫原、および開析谷が分布する(第27図)。更新世段丘は発達がよく、現氾濫原はD地点を流下する喜瀬川沿いにわずかにみられるだけである。開析谷は、更新世段丘を刻むもので、北東～南西方向と北西～南東方向に延びる。このような地形のうち古代山陽道が通るのは、6面の更新世段丘と開析谷で、前者は東から順に更新世段丘13～18である。

古代山陽道は、ここでもA～B地点間と同様に、西に向かって1面ずつ低くなる段丘を通過する。これらの段丘崖はそれぞれ約1mの比高で、各段丘面は北北西～南南東方向に長く延びる。道は、こうした段丘面を斜めに横切るために、A～B地点間に比して長い距離でひとつの段丘面を通る。

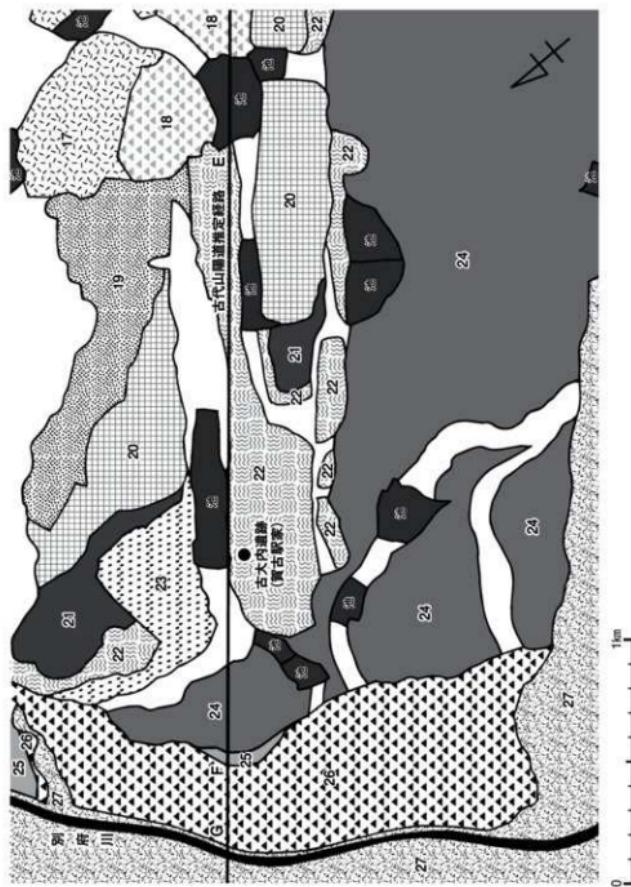
一方、古代山陽道は開析谷を5ヶ所で横断する。これらのほとんどは、北東～南西方向に延びるもので、谷底と付近の段丘面は数十cm～1mの比高である。開析谷中は段丘面より低湿であるため、古代山陽道はこれを縦断して延びていない。なお、古代山陽道が喜瀬川を横切るD地点では、更新世段丘15

第26図 A～C地の地形分類図





第27図 C～E地点間の地形分類図



第28図 E~G地点間の地形分類図

と16が流路をはさんで近接する。そこでは、現氾濫原がほとんど発達していない。

(4) E～G地点間について

この区間には、更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、ならびに開析谷が認められる（第28図）。更新世段丘は、更新世段丘19～25の7面が存在し、ほとんどが北西～南東方向または北北西～南南東方向に長く発達する。完新世段丘と現氾濫原は別府川沿いにみられる。ここで完新世段丘は、繩文海進頂期直後の海退に伴って段丘化したと推定されており⁽¹⁾、古代山陽道の建設時にはすでに存在していた。開析谷は、更新世段丘に刻まれたもので、多くが1m前後の深さで北西～南東方向に延びる。

古代山陽道は、これらのうち更新世段丘22・24・25と完新世段丘を通り、G地点で現氾濫原に至る。本区間では、道の起伏を小さくするため、古代山陽道が更新世段丘22を長い距離にわたって通過する。この段丘は、約2kmの長さで北西～南東方向に延び、道はそのほぼ両端を結ぶようにつくられている。古大内遺跡はこうした更新世段丘22の北西部に立地する。

F地点付近の古代山陽道は、C地点と同様に、高低差の著しい地点を階段状に通っている。ここでは、更新世段丘24と26の間に約3mの高低差がみられ、間には更新世段丘25が小さい面積ながら認められる。古代山陽道は、そこを通過しており、F地点付近でも通行が比較的容易な比高の小さい崖を横断する。

4. おわりに

邑美駅家（長坂寺遺跡）付近から賀古駅家（古大内遺跡）付近までの古代山陽道は印南台地の南西部を北西～南東方向に延びる。そこには、更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、支流性扇状地、および開析谷が認められる。こうした地形を直線状に通過する古代山陽道は地形環境と深く関係する。

古代山陽道は、A～B地点間とC～F地点間で12面の更新世段丘を通過する際、起伏が比較的小さい。この道は、A～B地点間やC～E地点間で西へ1面ずつ低位になる段丘面を通り、E～F地点間では道と平行な段丘面を約2kmにわたって延びる。そのため、通行が容易である。また、古代山陽道は洪水の危険性が高い現氾濫原や低湿な環境の開析谷を短い距離で通過する。すなわち道は、B～C地点間で現氾濫原の幅が小さい箇所を横断し、D～F地点間では浅い開析谷を縦断しないのである。

他方、A、B、C、およびF地点付近の古代山陽道には、高低差の大きい段丘面を容易に往来するための工夫がみられる。この道は、A地点とB地点付近で地表傾斜の大きい開析谷の谷底や支流性扇状地を通過する。そのため、高低差の著しい地点でも、傾斜する地表と小さい比高の崖を通るだけで道の通行が可能である。またC地点とF地点付近では、1～2面の更新世段丘を経て大きい高低差の段丘間を通過する経路がとられている。これによって、道は比高の小さい段丘崖を階段状に通過する状況となる。

古代山陽道は以上のような地形環境との係わりを総合的に考慮してつくられたと考えられるのである。

註

(1) 印南台地の地形については、田中眞吾「加古川市付近の地形と地質」、加古川市『加古川市史』第1巻所収、1989年に詳述されている。

(2) 抽稿「坂元遺跡の地形環境」、兵庫県教育委員会『坂元遺跡II』所収、2009年

第2節 古大内遺跡出土白土・鉄滓の成分分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、奈良時代の賀古駅家推定地である古大内遺跡より出土した壇土に由来する白土、および鉄滓について、その由来に関する情報を得ることを目的として、自然科学分析調査を実施する。以下に、その分析結果について報告する。

1 白土に関する分析

1-1 調査目的

駅館院は、築地塀で囲まれ、内部には白土の壁、赤色の柱、瓦葺きの建物が並んでいたと推定されている。今回の発掘調査で出土した白土は、築地塀の化粧土、または建物の壇土の可能性があると考えられている。そこで、白土の材質に関する情報を得ることを目的として、X線回折法による調査を行う。また、白土を含む土塊中には、いわゆるスサ材として用いられたと思われる植物の圧痕や炭化物が認められる。これらの植物遺体の種類を把握するために、珪化組織片の有無および種類同定を行う。

1-2 試料

白土試料は、6トレンチSX07上層より出土した白土1点である。このほか、白土と黄褐色土からなる土塊（試料番号2009195-113）、スサ材が多く混じる黄褐色土からなる土塊（試料2008231-50）の2点がある。

X線回折は白土試料について実施する。珪化組織片の観察は、試料2009195-113の土塊中の黒色を呈する0.5mm程度の植物片、試料2008231-50の土塊中に多数認められる、幅2mm程度の印象化石ないし圧痕のようにみえる細長い植物繊維の痕跡部分について実施する。各試料の採取位置を第30図に示す。

1-3 分析方法

(1) X線回折

白土より採取した試料をメノウ乳鉢で微粉碎した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit : 1°
Target : Cu (K α)	Scattering Slit : 1°
Monochromator : Graphite 溝曲	Receiving Slit : 0.3mm
Voltage : 40KV	Scanning Speed : 2° /min
Current : 40mA	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 3 ~ 45°

(2) 植物遺体の同定

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列（灰像）などの組織構造を呈している。植物珪酸体や灰像は熱に強く、葉や茎が炭化・灰化しても灰像として残存する場合が多い。今回の墨体試料では、黒色を呈する植物遺体片と植物体自体が分解・消失し印象化石のような状態となっている部分とが確認される。分析は、黒色を呈する植物片については観察の障害となる有機物を過酸化水素水で漂白、灰化した。また幅2mm程度の印象化石ないし压痕のようにみえる細長い植物繊維の痕跡部については、過酸化水素水で漂白した。この際、土壌粒子をほぐしたところ、植物体に由来すると思われる微小な破片が残存している状況が確認された。これらを400倍の光学顕微鏡下で観察し、イネ科葉部（葉身と葉鞘）に由来する植物珪酸体からなる珪化組織片については近藤（2004）の分類に基づいて種類を同定した。

1-4 結果

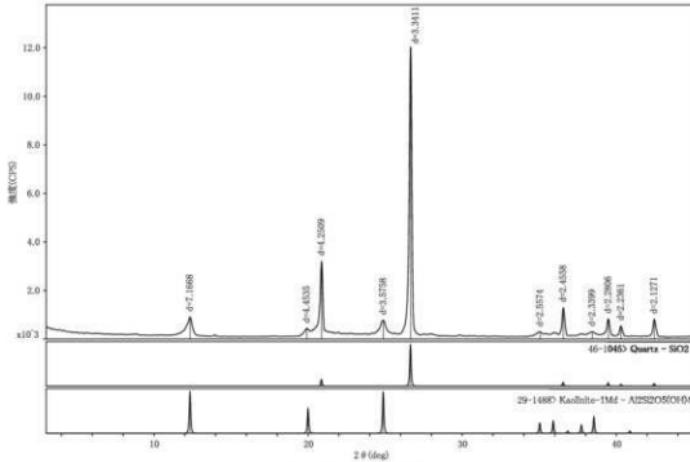
(1) X線回折

本試料では、石英（Quartz）の強い回折が確認されるほか、粘土鉱物であるカオリナイト（kaolinite）の回折が認められる（第29図）。

なお、実体顕微鏡下における観察では、径0.2~0.5mm大的石英および磁鐵鉱の斑晶が散在され、バブルウォール型の火山ガラスや斜長石斑晶とみられる仮像も確認される。基質は淡褐色~乳白色を呈し、粘土鉱物によって交代されているが、一部に軽石様の纖維状組織がごく僅かに認められる。基質は全体的に多孔質で、水酸化鉄によって淡褐色に汚染されている部分が点在する。

(2) 植物遺体の同定

試料2009195-113の黒色を呈する植物遺体は、特徴的な形態を有する植物珪酸体は認められず、種類を特定できなかった。一方、試料2008231-50に多数存在する組織痕跡では栽培植物であるイネ属の葉部に形成される短細胞列の組織片が確認された。



第29図 出土壁材のX線回折図

1-5 考察

調査を行った壁材（6トレンチSX07上層より出土した白土試料）からは、石英およびカオリナイトが検出され、漆喰の構成成分である炭酸カルシウムは認められなかった。したがって、壁材を構成する白色部分の物質は、ケイ酸アルミニウムを主体とした白色粘土、いわゆる「白土」の範疇に含まれる材質と見られる。なお、実体顕微鏡による観察では、火山ガラス片や軽石様の組織が認められている。母材としては軽石質凝灰岩などの火山碎屑岩の可能性が想定されるが、さらに詳細な鉱物学的な調査を行い、情報を付加した上で検討していくことが今後必要と思われる。

一方、壁体に混じっていた植物遺体痕跡のうち、黒色を呈する植物組織片は種類を特定できなかったが、黄褐色土中に多数存在する植物痕跡からは栽培植物のイネ属に由来する組織片が検出された。前者の黒色を呈する植物組織片については、植物根のような管状の形態を有しており、土塊中での分布密度も低く、壁体自体が隙間が多いことから、埋没した後に取り込まれたものに由来する可能性もある。一方、黄褐色土中に存在する植物組織の痕跡は、分布密度が比較的高く、不規則に配置していることなどから、土塊がつくれる際に取り込まれたものである可能性が高い。そうだとすると、壁体材料として、イネ属の植物体（特に稲葉）がスサとして壁土に取り込まれていることになる。

2 出土鉄滓の金属学的調査

2-1 調査目的

鉄滓は、6トレンチSX07上層より輪の羽口や土器とともに出土している。この鉄滓は、駅館院内のものが捨てられたのか、駅館院外から持ち込まれたものか判断できないが、院内のものだとすると、本来、迎賓館的な役割をもつ駅館院内に工房があったことになる。そこで、今回の分析調査では、出土鉄滓がどのような作業に伴う反応副生成物かを明らかにすることを目的として、金属学的調査を実施する。

2-2 試料

出土鉄滓は試料2009195-106と試料2009195-108の2点である（表5）

表5 試料表

試料名	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目		
			大きさ (mm)	重量 (g)	肉眼観察	顕微鏡組織	化学分析
2009195-106	鉄滓	奈良時代または 古代末～中世	74 × 51 × 40	107.2	○	○	○
2009195-108	鉄滓 (羽口付)		69 × 53 × 51	109.5	○	○	○

2-3 調査方法

（1）肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。これらの記載をもとに分析試料採取位置を決定している。

マクロ組織は、本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(2) 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μと1μで順を追って研磨している。

(3) 化学組成分析

試料の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化磷 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

2-4 結果

(1) 2009195-106 : 鋼治滓

肉眼観察 : 不定形の鋼治滓破片と推測される。側面2面は破面である。表面の色調は黒灰色で、酸化雰囲気に曝されたためか部分的に赤みを帯びる。また茶褐色の鉄錆化物も薄く付着しているが、全体に着磁性は弱い。滓部は比較的滑らかな流動状の部分と、細かい木炭痕が著しい部分とが混在する。全体に気孔は少なく緻密で重量感がある。

顕微鏡組織 : 第31図①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル (Ulvöspinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、さらに微細な白色樹枝状結晶ウスタイト (Wustite : FeO) が若干晶出する。

化学組成分析 : 表6に示す。全鉄分 (Total Fe) 49.82%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.09%、酸化第1鉄 (FeO) 52.95%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 12.26%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 27.18%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は0.92%と低値であった。また主に製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は4.36%、バナジウム (V) は0.12%、酸化マンガン (MnO) が0.30%含まれる。銅 (Cu) は<0.01%と低値であった。

以上の調査結果から、当鐵滓は砂鉄を始発原料とする鍛冶原料（鉄塊系遺物）の不純物（製鍊滓）除去で生じた精鍛冶滓と推定される。

(2) 2009195-106 : 鋼治滓

肉眼観察 : 一部羽口先端破片が溶着した、不定形の鋼治滓である。羽口外面は黒色ガラス質化が進んでおり、滓部上面も広い範囲がガラス質滓で覆われる。また胎土部分は淡赤褐色で、粗粒や細かい砂粒が多量に混和されている。

また滓は暗灰色で、明瞭な破面はみられない。下面側は木炭痕による凹凸が著しい。表面の気孔は少なく緻密である。

顕微鏡組織 : 第31図④～⑥に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

化学組成分析 : 表6に示す。全鉄分 (Total Fe) 34.11%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸

表6 化学組成

試料名	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)
2009195-106	鉄滓	奈良時代 または古代末～中世	49.82	0.09	52.95	12.26	22.44	3.37	0.56	0.36	0.37	0.08	0.30
2009195-108	鉄滓 (羽口付)		34.11	0.07	32.62	12.42	39.32	5.48	1.70	0.63	1.08	0.16	0.31

試料名	遺物名称	推定年代	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	磁黄 (S)	五酸化錳 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	パナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	造津成分	造津成 分/ Total Fe	TiO ₂ /Total Fe
2009195-106	鉄滓	奈良時代 または古代末～中世	4.36	0.05	0.02	0.33	0.17	0.12	<0.01	0.02	27.18	0.54556	0.08752
2009195-108	鉄滓 (羽口付)	世	27.1	0.04	0.07	0.40	0.19	0.08	<0.01	0.04	48.37	1.41806	0.07945

* 造津成分：二酸化珪素・酸化アルミニウム・酸化カルシウム・酸化カリウム・酸化ナトリウムの和

化第1鉄 (FeO) 32.62%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 12.42%の割合であった。造津成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) 48.37%と高値で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) 2.33%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 2.71%、パナジウム (V) 0.08%であった。酸化マンガン (MnO) 0.31%、銅 (Cu) は<0.01%と低値である。

当鉄滓は、上記の2009195-106に比較して、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂、V) が若干低めであるが、その影響が確認された。当鉄滓も2009195-106と同様、砂鉄を始発原料とする精鍊鍛冶滓と推定される。

2-5 考察

今回分析を実施した、6トレンチSX07上層から出土した鉄滓は、2点ともに精鍊鍛冶滓に分類される（表7）。また砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂、V) の影響が残ることから、砂鉄製鍊鉄塊が鍛冶原料として、鍛冶工房内に搬入されていたと判断される。

兵庫県下では、播磨北部（佐用郡・宍粟市）を中心に、奈良時代以降の製鉄遺跡が多数確認されている（土佐1992）。これらの地域では製鉄原料に砂鉄を用いており、当遺跡出土鍛冶滓の鍛冶原料も、こうした地域から搬入されたと想定しても、大きな矛盾はない。

表7 出土鉄滓の調査結果

試料名	遺物名称	推定年代	課題鏡組織	化学組成 (%)							所見	
				TotalFe	FeO	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造津成分		
2009195-106	鉄滓	奈良時代 または古代末～中世	津部：U + W + F、微小金屬散在	49.82	12.26	0.92	4.36	0.12	0.30	27.18	<0.01	精鍊鍛冶滓 (始発原料： 砂鉄)
2009195-108	鉄滓 (羽口付)		津部：U + W + F	34.11	12.42	2.33	27.1	0.08	0.31	48.37	<0.01	精鍊鍛冶滓 (始発原料： 砂鉄)

U : Ulvöspinel (2FeO · TiO₂)、W : Wustite (FeO)、F : Fayalite (2FeO · SiO₂)

また、今回は分析調査点数が限られることもあり、鍛冶原料の不純物除去（＝精錬鍛冶）後、熱間での鍛打作業（＝鍛錬鍛冶）が行われたことを証明する遺物は今のところ検出されていない。しかし、輪の羽口が出土していることなどを踏まえると、駅館院内の瓦溜近傍で、鍛造鉄器の製作まで行われていた可能性は充分考えられる。

当該地は古代山陽道の「大路」のあった賀古駅家推定地に重なり、官営施設内の鍛冶工房跡の存在を示唆する。今回分析調査の精錬鍛冶に供した鉄塊の在地同定は今後重要な問題となる。しかし、残念ながらこれを解明するに耐えうる充分なデータ数は多くない。大澤（2005）による、佐用郡内の砂鉄と製錬滓の調査結果を整理すると、低チタン砂鉄を原料とする日名倉山系グループと高チタン砂鉄の大撫山系グループに分れることが指摘されている（表8・9）。今回の古大内遺跡出土の2点の精錬鍛冶滓は、後者の高チタン砂鉄相当品の可能性をもつが、産地の最終特定は資料数の蓄積をまって評価することが大切である。

引用文献

- 近藤鍊三。2004. 植物ケイ酸体研究. ベドロジスト, 48, 46-64.
- 大澤正巳。2005. 「生栖遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」. 『兵庫県文化財調査報告第280冊 生栖遺跡 県道八鹿山崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』. 兵庫県教育委員会.
- 土佐雅彦。1992. 『製鉄遺跡』. 兵庫県生産遺跡調査報告第1冊 兵庫県教育委員会.

表 8 千種川上・中流域における検出鉄等分析結果について（大澤 2005より引用）

番号	通路の名称	道路の所在地	Total Fe	Metallic Fe	FeO	FeO _x	SiO	Al ₂ O ₃	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	S	P ₂ O ₅	C	V	Cr	
1	西下野筋A地区上部	兵庫県佐用郡佐用町 西下野字下木柄	43.1	0.00	51.3	4.6	228	4.8	24	1.1	4.7	0.65	0.69	0.036	0.31	0.16	0.21	0.03
2	西下野筋B地区上部	兵庫県佐用郡佐用町 西下野字下木柄	44.0	0.25	47.3	9.4	218	5.8	1.8	0.97	5.0	0.05	0.81	0.031	0.29	0.10	0.25	0.02
3	黒土道路	兵庫県宍粟市千種町 黒土	43.7	0.71	44.2	20.8	208	5.9	1.1	0.83	8.0	0.05	0.92	0.033	0.20	0.11	0.21	0.03
4	小原木道路	兵庫県宍粟市千種町 西下野字小原木	49.2	0.63	50.0	18.6	181	3.5	1.6	1.7	5.0	0.05	0.64	0.029	0.22	0.12	0.06	0.03
5	高保木道路	兵庫県宍粟市千種町 西下野字高保木	48.9	0.63	55.1	21.7	217	5.2	1.4	0.76	5.2	0.04	0.79	0.019	0.27	0.04	0.24	0.03
6	天見原道路	兵庫県宍粟市千種町 西下野天見原	43.0	0.62	44.8	23.6	236	6.5	1.8	1.2	5.5	0.04	1.1	0.027	0.21	0.050	0.25	0.02
7	カンナ池道路	兵庫県宍粟市千種町 東内字カンナ池	44.7	0.52	48.0	22.7	227	4.3	0.84	0.69	5.6	0.03	0.59	0.033	0.16	0.034	0.22	0.02

(分析：新日本製鐵、提供：北山地帯土壤土質研究会……大澤正ひに提供)

道路の所在地については、現地の表記に訂正している。

なお、西下野筋A・B地区は誤記として、他の5ヶ所について概要を明記しておきたい。

(イ) 黒土
田舎土村全体が花崗岩質(砂礫土)の物理的条件が比較的面が多く、各所にかってたたら鉱脈が形成されたり、その前段の鉱脈とならぬもので、その前段の鉱脈となつたのが、朝日ヶ所にわたる。(ロ) 小原木
川幅8m程の河岸の東側部分に位置し、耕種地約2haに開拓してある。西下野字小原木の西側に位置する。耕種地は北の発掘調査にかかるものである。耕作地は北の発掘調査にかかるものである。(ハ) 高保木
小原木の対岸で黒土山脈からなるまでが砂礫層で、土壌は砂礫層である。その堆積物を確認したが、その堆積物も北の発掘調査にかかるものである。耕作地は北の発掘調査にかかるものである。(二) 天見原
小原木・高保木から西へ河岸を走るこの約4km程で、子種の天見原の地名で、黒土から砂礫を走ること約5kmを走る。高見三笠山麓斜面に立地し、黒土から砂礫を走ること約5kmを走る。(キ) カンナ池
小原木・高保木のすぐ西側に河岸内に対し、黒土から砂礫を走ること約5kmを走る。

表 9 兵庫県下生用耐火材料と鉄鋼の化学組成（大澤、2005年より引用）

試料番号	通称名	出土位置	種別	測定年代	金属性質	全分析 (Total Fe)	酸化二価鉄 (FeO)	酸化三価鉄 (MnO ₃)	酸化四価鉄 (Al ₂ O ₃)	酸化亜鉛 (ZnO)	酸化カドミウム (CdO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マanganese (MnO)	酸化チタン (TiO ₂)	酸化錫 (Sn)	酸化鉻 (Cr ₂ O ₃)	酸化ニッケル (NiO)	酸化バナジウム (V ₂ O ₅)	酸化鉄 (Fe ₂ O ₃)				
SY-1	高炉S1	Kガラスアーチ炉ガラ士	耐火	64.10	0.07	28.71	59.64	31.4	0.36	0.29	0.113	0.029	0.59	2.94	0.05	0.009	0.16	0.11	0.20	0.045	0.42	0.065		
SY-2	大黒山S1	赤色風化地土	耐火	57.42	0.06	22.16	57.24	0.84	0.26	0.01	0.13	0.03	0.038	1.39	1.08	0.12	0.007	0.025	0.03	0.05	0.001	3.551	0.065	
SY-20	木戸口A	赤色粘土	耐火	52.19	0.05	21.49	54.9	2.90	0.06	0.22	0.45	—	—	1.06	1.59	0.06	0.025	0.043	0.09	0.24	0.021	5.723	0.154	
SY-21	木戸口B	溝埋まり	耐火	54.15	—	23.36	51.9	1.00	0.278	0.15	0.43	—	—	1.21	1.60	0.12	0.022	0.010	0.11	0.50	0.023	0.290	0.331	
SY-22	長尾	G-708X	砂鉄	57.11	—	23.93	55.0	0.84	0.244	0.13	0.97	—	—	0.84	1.67	0.07	0.023	0.047	0.07	0.23	0.021	4.28	0.077	
SY-3	高炉S1	5号炉SiO ₂ 炉灰	耐火	48.2	—	18.55	46.6	0.30	0.266	0.14	1.16	—	—	1.04	2.54	0.06	0.057	0.11	0.26	0.019	4.28	0.089	0.522	
SY-4	木戸口B	スワグ部原石瓦	耐火	28.5	—	10.76	32.2	19.62	0.726	1.44	—	—	—	2.11	2.81	0.10	0.032	0.12	0.06	0.28	0.029	29.29	1.028	
SY-5	木戸口B	スラグ部原石瓦	耐火	27.7	—	11.76	25.50	1.76	0.795	1.45	—	—	—	1.81	2.16	0.09	0.032	0.11	0.06	0.25	0.023	38.49	1.006	
SY-6	木戸口B	赤色粘土	耐火	47.9	—	19.4	12.9	21.4	56.8	0.35	0.088	—	—	0.96	1.67	0.06	0.032	0.03	0.05	0.14	0.045	29.15	0.622	
SY-7	木戸口B	赤色粘土	耐火	34.0	—	11.94	31.6	17.10	4.03	0.79	1.09	—	—	1.27	2.08	0.09	0.024	0.19	0.05	0.29	0.024	26.89	0.773	
SY-8	木戸口A	赤色粘土	耐火	26.72	—	11.9	2.75	27.2	2.76	0.96	3.03	—	—	1.22	2.00	0.08	0.023	0.19	0.05	0.28	0.034	42.05	1.374	
SY-9	木戸口A	赤色粘土	耐火	28.3	—	11.0	3.77	23.96	2.65	4.18	4.49	—	—	1.27	2.88	0.07	0.025	0.14	0.07	0.29	0.024	36.98	1.307	
SY-10	木戸口A	赤色粘土	耐火	47.55	—	15.0	7.85	19.20	0.26	0.96	1.93	—	—	0.87	1.69	0.04	0.03	0.18	0.36	0.025	0.14	0.390		
SY-11	木戸口A	赤色粘土	耐火	49.5	—	15.51	18.54	0.66	1.66	2.77	1.74	—	—	0.75	1.54	0.06	0.027	0.12	0.06	0.28	0.029	27.52	0.564	
SY-12	木戸口A	赤色粘土	耐火	50.8	—	15.0	7.60	18.48	1.83	1.12	—	—	0.66	1.53	0.11	0.045	0.14	0.06	0.23	0.023	33.33	0.489		
SY-13	木戸口A	赤色粘土	耐火	34.8	—	12.4	2.63	16.14	6.27	0.68	1.27	—	—	1.64	2.60	0.12	0.028	0.17	0.09	0.38	0.037	26.96	0.758	
SY-14	木戸口A	赤色粘土	耐火	35.4	—	11.0	2.83	17.08	6.22	0.82	1.28	—	—	1.64	2.31	0.15	0.037	0.12	0.07	0.25	0.048	27.40	0.774	
SY-15	木戸口A	赤色粘土	耐火	32.2	—	11.2	14.28	17.08	0.80	1.35	1.16	—	—	2.41	3.65	0.06	0.044	0.05	0.09	0.23	0.065	20.9	0.328	
SY-16	木戸口A	赤色粘土	耐火	39.2	—	16.5	3.35	12.66	5.07	0.29	0.97	—	—	1.83	2.53	0.05	0.034	0.13	0.07	0.27	0.040	20.89	0.325	
SY-17	木戸口A	赤色粘土	耐火	39.7	—	16.0	0.92	17.82	1.66	3.19	1.11	—	—	2.06	2.76	0.05	0.022	0.10	0.04	0.26	0.045	26.05	0.546	
SY-18	木戸口A	赤色粘土	耐火	26.11	—	9.6	1.94	16.90	5.78	2.05	1.35	—	—	2.06	2.95	0.06	0.033	0.03	0.13	0.27	0.047	26.98	0.625	
SY-19	木戸口A	赤色粘土	耐火	31.1	—	9.6	1.94	16.90	5.66	2.07	1.35	—	—	1.35	2.07	0.06	0.022	0.14	0.06	0.27	0.045	27.25	0.536	
SY-20	木戸口A	赤色粘土	耐火	47.0	—	34.9	28.4	6.56	1.74	17.14	5.18	1.62	1.10	—	2.20	2.74	0.07	0.033	0.10	0.08	0.29	0.045	32.41	0.881
SY-21	木戸口A	赤色粘土	耐火	30.8	—	34.5	5.76	8.65	1.77	17.78	5.62	4.67	2.40	—	1.35	21.54	0.05	0.025	0.17	0.10	0.29	0.045	32.92	0.867
SY-22	木戸口A	赤色粘土	耐火	33.7	—	40.0	3.73	21.74	6.74	—	—	—	—	1.66	22.96	0.06	0.038	0.081	0.06	0.32	0.060	25.91	1.083	
SY-23	木戸口A	赤色粘土	耐火	30.4	—	36.8	5.53	21.28	6.60	1.03	1.91	—	—	1.97	22.86	0.05	0.025	0.084	0.06	0.31	0.049	37.04	1.412	
SY-24	木戸口A	赤色粘土	耐火	26.24	—	30.6	3.34	21.74	7.41	3.05	1.89	—	—	1.97	22.86	0.05	0.025	0.13	0.06	0.32	0.049	37.04	1.412	
SY-25	木戸口A	赤色粘土	耐火	29.5	—	30.6	2.99	21.00	7.92	3.52	1.79	—	—	1.66	21.10	0.07	0.033	0.10	0.04	0.31	0.049	34.23	1.015	
SY-26	木戸口A	赤色粘土	耐火	32.9	—	38.9	1.69	31.4	13.14	1.69	21.3	0.98	—	—	1.55	2.56	0.04	0.03	0.13	0.17	0.22	0.033	43.96	1.337
SY-27	木戸口A	赤色粘土	耐火	54.3	—	62.3	8.40	13.14	1.69	21.3	0.98	—	—	1.12	6.51	0.06	0.045	0.019	0.08	0.35	0.022	39.94	1.367	
SY-28	木戸口A	赤色粘土	耐火	55.9	—	62.8	12.41	17.88	1.62	1.69	—	—	0.16	6.51	0.03	0.050	0.032	0.15	0.043	0.017	24.96	0.447		
SY-29	木戸口A	赤色粘土	耐火	31.6	—	37.5	3.46	19.60	5.74	2.97	0.98	—	—	1.26	27.5	0.06	0.036	0.046	0.13	0.19	0.035	29.17	0.925	
SY-30	木戸口A	赤色粘土	耐火	40.3	—	47.5	1.82	6.40	1.52	1.03	1.02	—	—	2.28	31.1	0.15	0.029	0.061	0.13	0.67	0.029	11.77	0.292	
SY-31	木戸口A	赤色粘土	耐火	20.3	—	38.7	9.44	15.04	4.76	6.64	1.08	—	—	1.52	22.88	0.10	0.031	0.35	0.18	0.44	0.028	25.52	0.711	
SY-32	木戸口A	赤色粘土	耐火	30.3	—	34.9	4.51	15.70	4.92	1.80	1.37	—	—	2.57	30.2	0.03	0.038	0.077	0.12	0.17	0.027	23.78	0.285	

* 金谷川土10-05-27は本調査のグリードで測定したものです。

* 金谷川土10-05-27は本調査の直前に行われた干式調査のグリードで測定したものです。

木戸山系グレート群：高チタン砂鉄

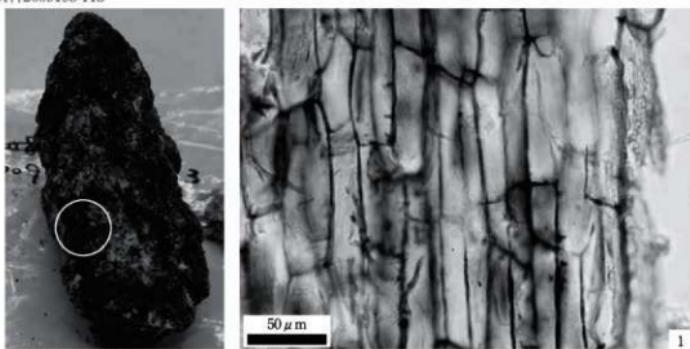
木戸山系グレート群：低チタン砂鉄

2009195調査の6 トレンチSX07上層：白土。



○：X線回折に用いた部分

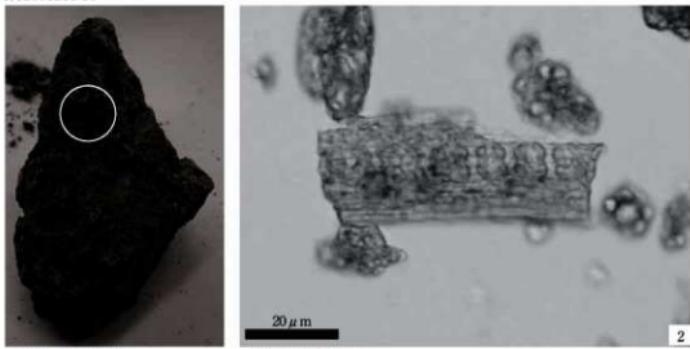
試料2009195-113



○は灰像分析位置

1.不明組織片

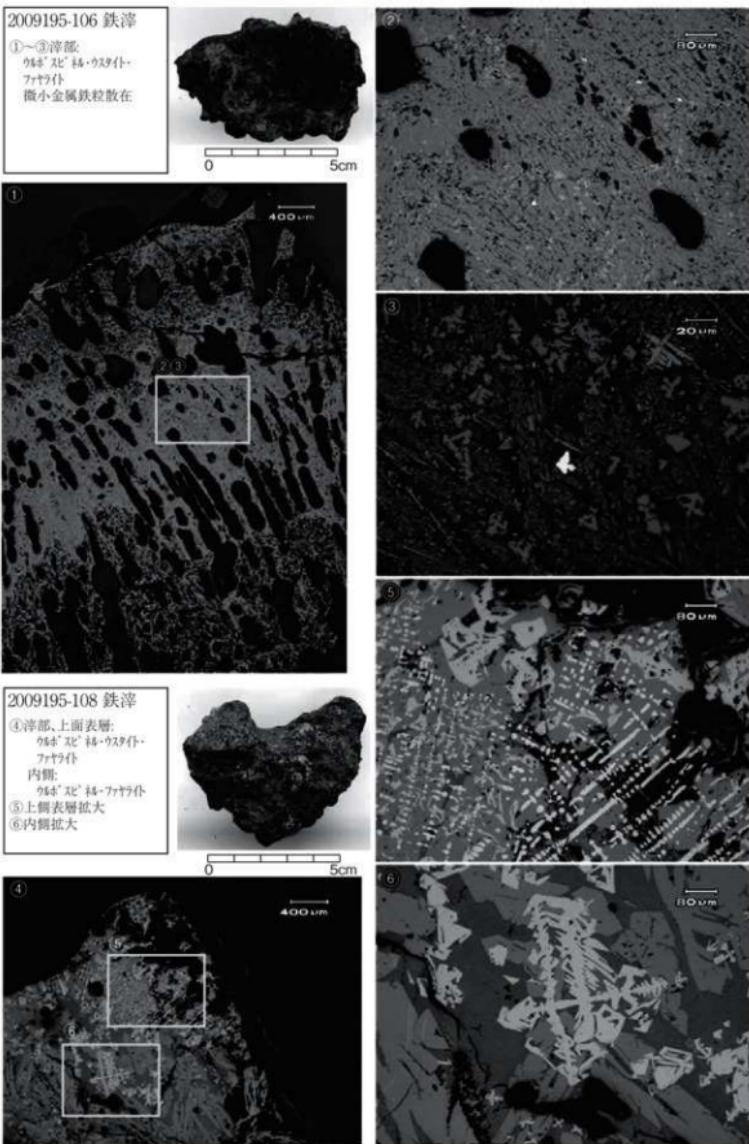
試料2008231-50



○は灰像分析位置

2.イネ属短細胞列

第30図 白土試料写真と灰像写真



第31図 鉄滓の顕微鏡組織

第3節 古大内遺跡出土炭化物のAMS測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・尾喜大真・丹生越子・廣田正史・小林絃一

Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

1. はじめに

加古川市野口町古大内に所在する古大内遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表10のとおりである。

表10 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-14910	調査区：6トレンチ 遺構：SX07 上層 その他：鍛冶関連遺物	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12N、水酸化ナトリウム：1N、塩酸：12N）
PLD-14911	調査区：6トレンチ 遺構：SX07 上層 その他：鍛冶関連遺物	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12N、水酸化ナトリウム：1N、塩酸：12N）

試料はいずれも炭化材で、瓦溜に捨てられた状態で出土しており、同じく瓦溜より出土した鍛冶関連遺物に伴うものと考えられている。瓦溜からの出土遺物は、奈良時代の駅家が廃絶した古代末～中世のものである可能性がある。ただし、出土遺物には奈良時代の土器が含まれており、鍛冶が行われていたのは駅家が機能していた時期で、試料は奈良時代から平安時代に鍛冶に利用された材である可能性もある。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表11に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第32図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が96.8%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表11 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C 年代 (yrBP±1σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-14910	-27.34±0.22	1250±19	1250±20	694AD (55.3%) 748AD 765AD (12.9%) 777AD	681AD (93.4%) 820AD 843AD (2.0%) 859AD
PLD-14911	-25.07±0.19	1477±18	1475±20	567AD (68.2%) 609AD	552AD (95.4%) 635AD

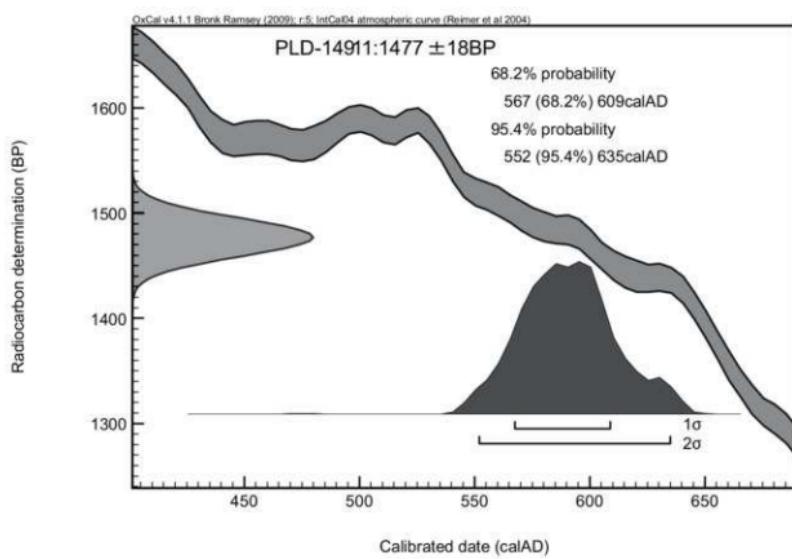
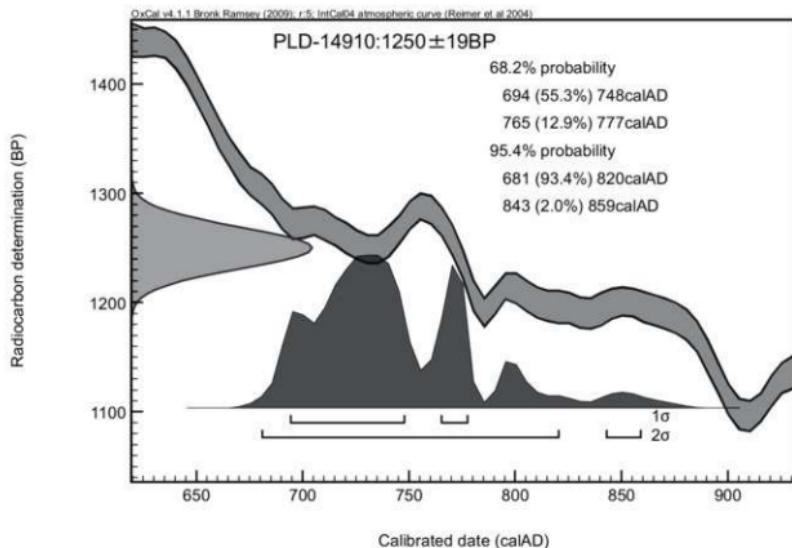
4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。

PLD-14910は、2 σ暦年代範囲で681-820calAD (93.4%) よりも843-859calAD (20%) となり、7世紀後葉～9世紀前葉あるいは9世紀中葉の範囲を示した。PLD-14911は、同じく2 σ暦年代範囲で552-635calAD (95.4%) となり、と6世紀中葉～7世紀前葉の範囲を示した。ただし、いずれも最外年輪が確認されていない試料であるため、実際の伐採年代は得られた年代よりも新しい可能性がある。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy : The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代. 3:20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmeli, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第32回 歷年較正結果

第4章 まとめ

第1節 古代官道研究の現状と課題

1 古代道研究の現状

兵庫県における古代道の研究は、1960年代の今里幾次⁽¹⁾や高橋美久二による播磨国の駅家所在地の研究成果〔今里1960、高橋1968〕によってスタートした。この成果を受けて、続く1970年代から1980年代になって歴史地理学の分野の木下良や吉本昌弘により山陽道のルートの解明が進んだ〔木下1976、吉本1985a・1985b〕。考古学の成果によって駅家遺跡の推定地を絞り込めたことが、これらをつなぐことで道路痕跡をみつけるという歴史地理学の手法により古代道路を見発見することを容易にするとともに、お互いの研究成果がそれを補完しあってそれぞれの正しさを裏付けた好例である。これらの研究によって、古代山陽道は、平野部をほぼ直線的にむすんだものであることが明らかにされたのである。

しかしながら、想定される道路跡に対して、実際に発掘調査により遺構が確認された例は多くない。これまでの調査例としては、山陽道では、たつの市小丸遺跡東側で幅7m以上の道路面が〔山下1989〕、上郡町落地跡八反坪地区では幅10.2~10.3mの道路跡が〔島田2005〕、明石市古代山陽道路跡福里地点では12mと15m以上の道路跡が〔福原2003〕、辻ヶ内地点では幅8mの道路跡が〔福原2008〕それぞれ検出されているのがすべてである。周辺に目を向けると、山陽道については、高槻市の鷺上郡衙跡や郡家今城跡で、8世紀の半ばまでに整備されたと考えられる路面幅10m~12mで石や瓦と粘土を突き固めた道路が確認されており、さらに9世紀半ば~後半には路面幅5~6mに縮小されていることがわかっている〔宮崎1994〕ことから、道路整備の初期段階では10~12mの規模であったものが、平安期に6~8m程度に狭められたと考えられている。

東山道や東海道で確認されている前期駅路が皆12m幅であることを考えると、第1級国道である山陽道が10~12mと幅を持ちながらではあるが、やや狭いことが気になるが、吉本の歴史地理学の立場からの研究によると、山陽道の余剰帯は18mであり、山陰道や北陸道の23mよりも狭いが、これは山陽道の造営年代が天智朝にさかのばるもので、基準尺に高麗尺を用いたためではないかとされている〔吉本2005〕。以後の検証が待たれるところである。

これらの道路跡に共通するのは、従来の文献研究では過小に評価されていた古代道が、近世の街道の規模を大きく上回るものであったことである。また特に山陽道では、その設置に際して、平野部では岬と岬の間をむすんだ直線を基準としており、結果として郡単位の条里型地割りの基準線ともなっていることも明らかとなっている。

なお、基本的に瓦葺きの施設を持つと考えられる山陽道の駅家と違って、おそらく瓦葺きではない山陰道、南海道、美作道など兵庫県内の他の古代道では、駅家の位置は地名からおおよその場所が推定されているだけで、まだ駅家遺跡を特定するには至っていない。道路遺構としては、佐用町長尾・沖田遺跡佐用郡衙前で幅3.5mの推定因幡道〔兵庫県教委1991b・1993b〕が、丹波市七日市遺跡氷上郡衙別院前で幅10~11mの推定丹後道〔兵庫県教委1991a・2004〕が、そして朝来市加都遺跡では路面幅6.0~6.8mの古い段階と幅4.2~5.4mの新しい段階の推定但馬道〔兵庫県教委2005・2007〕が確認されるにとどまっている。このうち加都遺跡では、段丘上の高い部分では側溝を掘っただけであったが、谷間の低地部分では石や木とともに盛土をした遺構が確認されているのは、盛土工法による古代道としては県内唯一の事例である。なお、これらの道路については、そのルートもまだよくわかっていない。

表12 文献に残る播磨国の駅家

文献	野原	高田	布勢	大市	草上	佐安	賀古	邑美	明石
	やま	たかだ	ふせ	おうち	くさのかみ	さつち	かこ	おうみ	あかし
風土記（713ころ）				邑智			賀古		明石
続日本紀（729）	山陽道諸国駅家の跡を造らんが為に駅起程五万束を充て								
太政官符（769）									
続日本紀（773）					草上駅				
類從三代格（807）	9駅から5匹ずつ減ず								
日本後紀（839）						佐安駅建立			
後拾遺柱生伝（866）							賀古駅北に 敷信住		
菅家文草（888）								明石駅駅権	
菅家後集（901）大鏡								明石駅駅長	
延喜式（924）	野原	高田	布勢	大市	草上		賀古		明石
枕草子（996ころ）	山の駅								
大日本國法華經疏記（1046ころ）	野原駅								
時範記（1099）					高草駅				明石駅

2 駅家研究の現状

（1）山陽道の駅家推定遺跡

兵庫県内の駅家については、今里幾次と高橋美久二による山陽道の駅家研究が進んでおり、全国的に見ても他の追随を許さない〔今里1980、高橋1995〕。また、近年では岸本道昭や木本雅康により一般向けの入門書も刊行されており〔岸本2006、木本2008〕、これまでの研究成果を容易に知ることができるようになっている。ここでは、紙幅に限りがあるため詳しくは述べないが、特に課題となる点について触れておきたい。

「延喜式」によると兵庫県内の山陽道には9駅の存在が確認できるが、高橋美久二の研究により、廃止された2駅を加え、もとは11駅が置かれていたことが明らかとなっている。これらの駅のうちで播磨国に存在した9駅に関連する文献の記録を整理したものが表12である。これらの記録から、おおよその遺跡の所在場所は検討がつくのだが、実際の遺跡をあてるとなると、まだ困難な点が多い。本報告書第1章で駅家推定地の分布調査成果の概要をまとめてあるが、駅家遺跡の所在場所を確定できるものは、山陽道以外では皆無であるのは無理もないとしても、実はまだ山陽道でも多くないのである。兵庫県内の山陽道に設置された駅家推定地の遺跡を東から順に検証してみよう。

揖津国では2駅が存在する。芦屋駅は、芦屋市阪急芦屋川駅西側の芦屋川西岸付近に存在すると考える説が有力である。古代寺院である芦屋庵寺周辺にあって官衙的色彩の強い遺跡としては、三条九ノ坪遺跡や寺田遺跡、月若遺跡、津知遺跡、あるいは駅銘墨書き土器が出土した神戸市東灘区深江北町遺跡が候補地となっているが、いずれも駅館院など中枢部分の遺構は見つかっておらず、決め手を欠く。

須磨駅は、神戸市須磨区板宿付近にあると考えられている。道路側溝ではないかと考えられる遺構や官衙的建物跡などが見つかっている大田町遺跡が唯一駅家に迫る遺構であるが、先の深江北町遺跡同様、内容的には付帯施設であり、駅館院などの駅家本体の施設とは考えられない。

播磨以西の山陽道諸国ではまとまって瓦が出土することから所在場所を推定することが可能なのであるが、これら揖津国駅家遺跡については、まとまった瓦出土地がなく、蘆屋、板宿などの地名が示すような草葺きや板葺きなど、瓦を使用しない施設であった可能性も否定できない。続日本紀729年の記

述も「為造山陽道諸国駅家」としており、厳密に言えば畿内に属する摂津国を含んでいないことも気になるところである。ただ、どちらも六甲南麓に所在する遺跡であるため、平安時代以降の土砂の堆積量は多く、地下深く埋没しているために瓦が発見されにくいだけである可能性も高い。

播磨国では9カ所の駅が存在していた。明石駅は最も記録に登場する駅である。所在場所は、播磨国府系瓦が出土し官衙風建物が建ち並ぶ吉田南遺跡説と、太寺庵寺付近もしくは明石公園付近の大きはふたつの説がある。このうち吉田南遺跡は山陽道から離れすぎている上に、内容的には明らかに郡衙遺跡であることから、やはり太寺庵寺周辺の舌状に張り出した段丘上に所在していたと考えるのが無理がないであろう。次の2駅は、後述するとおり、(仮称)邑美駅は明石市魚住町の長坂寺遺跡、賀古駅は加古川市野口町古大内遺跡で確定であろう。

佐突駅は、姫路市別所町の北宿遺跡が有力とされている。確かに鎌谷木三次の記録〔鎌谷1942、鎌谷引用は以下同〕や採集されている瓦から有力な候補地であることは間違いないが、平地の中にあり、やや地形的に他の駅家の立地場所との違いが気になる。小犬丸遺跡と小犬丸中谷庵寺との関係のように、寺院跡である可能性も考えておく必要があるかもしれない。

草上駅は、かつて姫路市本町遺跡や井上庵寺付近に想定されたことがあったが、前者は播磨国府関連の遺跡であることが明らかであり、後者は塔心礎を持つ明らかな寺院跡であるとともに、山陽道から離れてしまうことから、近年では山陽道沿いにあり播磨国府系瓦がまとまって出土した今宿丁田遺跡説が有力となっている。しかし、遺構は全く検出されていない上に、立地的に平地の真ん中にであること、さらには距離的に佐突駅と大市駅の中間から大きく西にずれており、佐突駅が廃止された後はさらにその差が著しくなることから考えると、位置的に無理があるように思われる〔山下1994〕。やはり、播磨国府近辺にあった可能性が高いのではないだろうか。

大市駅は、高橋により姫路市大市中の向山遺跡に比定されている。確かに、採集資料や立地的には無理がないが、現在想定されている山陽道から離れすぎているため、山陽道のルート設定自体を見直す必要があるようと思われる。続く布勢駅は、たつの市揖西町の小犬丸遺跡で確定している。

高田駅は上郡町神明寺遺跡とされており異論がでていないが、当該遺跡は寺院跡である可能性が高く、別の場所を考える必要がある。今回の分布調査で新たに国府系瓦散布地を発見しており、立地的にも無理がないことから、今後の調査が期待される。

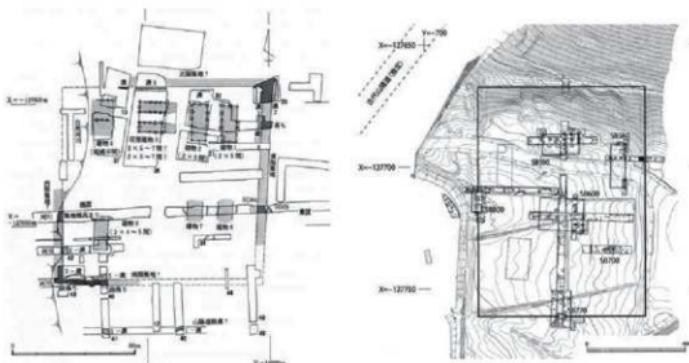
野原駅は上郡町落地遺跡飯坂地区については間違いがない。ただし、前期駅家と考えられている八反坪地区については、まだこの遺構を駅家と断定できる根拠はないのではないか。この場所が播磨国の西端であることなどから、関とはいわないまでも、国境への入国にともなう儀式を行うなど、何らかの役所関連施設である可能性も含めて、今後の事例を待つ必要があると思う。

(2) 駅家遺跡であることが確実となった4遺跡

次にこれらの遺跡の中から、ほぼ駅家であることが確実となった4つの遺跡についてみてみたい。

①小犬丸遺跡〔布勢駅〕 たつの市揖西町小犬丸

鎌谷により古瓦散布地として知られ小犬丸庵寺とされていた遺跡であったが、今里や高橋の研究〔今里1974・1978、高橋1968・1990〕により山陽道布勢駅と推定されていた遺跡である。1983年には駅家推定地を横断する県道拡幅に伴い発掘調査が行われ、瓦葺建物跡や基壇、築地塀跡などの存在が確認されていたが〔別府1987〕、1986年に駅家推定地の東側の湿地で見つかった井戸の周囲から「駅」銘墨書土器や「布勢駅」木簡などが出土し、日本で初めて駅家跡と確定した〔山下1989〕。この発見が契機とな



第33図 小犬丸遺跡（左）と落地遺跡の駅館院配置図

って範囲・内容を確認するための調査が行われることになり、その後数年にわたる調査の結果、約80m四方を築地塀で囲まれ、内部には7棟の瓦葺き建物が並んでいたことが判明した。築地塀や建物はすべて瓦葺きで柱は丹塗り、壁は白壁であったと考えられる。中心建物は2間×7間の建物2棟を接して建てた双堂と推定されている〔岸本1992・1994〕。これらの成果は、日本で初めて駅家本体の様子を明らかにするとともに、高橋が文献をもとに推定した山城国山崎駅の構造〔高橋1986〕が駅家に共通する基本様式であり、駅家本体が駅館院をなしていたことも裏付ける結果となった。また中村太一は、この成果をもとに全国で初めてCGにより駅館院を復元しており、外国使節をもてなす迎賓館としての機能を持っていたとされる山陽道駅家の華やかなイメージがよみがえった〔中村2000〕。

②落地遺跡（野磨駅）赤穂郡上郡町落地

・八反坪地区

1990年のほ場整備の際に、野磨駅家推定地から南西に約300m離れた田んぼの中で、塀で囲まれた区内にこの字形に配置された掘立柱建物3棟が検出された。区画の前には両側に側溝を持った幅約10mの山陽道の道路敷きを検出しており、道に面する位置には掘立柱の八脚門が配置されていた。遺構から出土する遺物の年代が7世紀末から8世紀初頭であることから、瓦葺き以前の初期の駅家ではないかとされ、先の小犬丸遺跡とともに全国的にも注目された〔島田2005〕。

・飯坂地区

鎌谷によって落地廃寺とされていた古瓦散布地において、2001年に開発計画が持ち上がり、樹木が伐採されたところ、驚くべきことに礎石を伴った建物基壇と背後の斜面にまで繋がる築地塀跡が出現した。上郡町教育委員会によりさっそく調査が開始された結果、南北92m、東西68mの長方形の範囲を築地塀が囲んでいることが明らかとなった〔小田2006〕。築地に囲まれた空間の中には七間四面の後殿跡の全容を確認したほか、双堂形式の中心建物など瓦葺き礎石建ちの建物6棟が立ち並んでいた。これらの遺構が良好に残されていたことは驚きであったが、もっと驚いたのは、築地塀の北部は山の斜面にまで登るようになっていたことである。また、予想外の西側で、駅家では初めて門の遺構がみつかったのが、立派な八脚門には頑丈な唐居敷が使われていたことも驚きであった。大日本法華経験記や今昔物語

に大蛇のすむ駅として、また枕草子には趣のある駅としてとりあげられた野磨駅の実態がこれほどまでに残されていたことなど、とにかく驚きの連続であった。これらの遺構は八反坪地区の遺構や道路跡とともに、平成18年に駅家遺跡としては全国で初めて国史跡に指定された。

③古大内遺跡（賀古駅）加古川市野口町古大内

鎌谷が古大内庵寺とし、高橋により賀古駅家と推定されていた遺跡である〔高橋1978〕。出土瓦は今里により播磨國府系瓦の一種古大内式の指標ともなっている。詳細は次節の中村報告を参照していただきたいが、今回の発掘調査により、ほぼ賀古駅家であることが確定したといつていいだろう。

④長坂寺遺跡（邑美駅）明石市魚住町長坂寺

鎌谷が長坂寺庵寺跡とし、高橋美久仁氏により記録に残らない廃止された駅家跡と推定され、仮称邑美駅（播磨國風土記では「大海」）と命名された遺跡である。今回の調査で現地に一辺約80mの正方形を向く方形区画が残っていることが初めて確認でき、レーダー探査の結果、遺構の存在が確認された。726年に聖武天皇が行幸した印南野邑美頤宮にあたるのではないかとも考えられている〔高橋1990〕。

(3) 駅家遺跡に共通する要素

駅家跡であることがほぼ確かな遺跡は以上の4遺跡であるが、これらの遺跡に共通する要素を抜き出せば、駅家遺跡の標準とでもいべきものが見えてきそうである。そこで、これらの4遺跡について、これまでの調査成果をもとにその要素を比較整理したのが表13である。

これらの調査成果から駅家の共通要素を抽出してみると次のようになる。

- ・ 塚地で開まれた 一辺80m程度（270尺=約81mか）の正方形区画（=駅館院）を標準とする。地形的にとれない場合は、約6,400m²の面積を確保する。
- ・ 塚地は瓦葺き、粉（白土塗り）壁、丹塗り柱とする。
- ・ 山陽道に面した側（南・西・東）に表門を置く。
- ・ 表門は格式の高い八脚門で、唐居敷を用いる。仕様は塚地と共通。
- ・ 駅館院の内部には6~7棟以上の瓦葺建物を置く。建物の仕様は塚地と共通。
- ・ 中心部分には儀式、接待の場として使用すると考えられる双堂形式の建物を置く。
- ・ 当初は掘立柱建物であったが、奈良時代に外国使節向けに瓦葺に建て直した。

表13 駅館院の構成要素比較

遺跡名	小丸丸	落 地	吉大内	長坂寺
駅 名	布 勢	野 前	賀 古	（邑美）
立 地	谷間（扇状地）	谷間（扇状地）	段丘上突端部	段丘上突端部
規模（東西×南北）	約80m×80m	68m×94m	約80m×80m	約80m以上×80m以上
方 位	ほぼ正方位	ほぼ正方位	N 8° W	ほぼ正方位
塚地	有	有	有	未確認
	瓦葺き	瓦葺き	未確認	未確認
	丹塗り	有	未確認	未確認
	白土	有	未確認	未確認
門	表門（形式） 未確認（推定南門）	西門（八脚門）	東門（八脚門）か？	未確認
	唐居敷 未確認	有	有	未確認
建物	瓦葺き 有	有	未確認	未確認
	棟数 7棟以上 (うち1棟は双堂)	6棟以上 (うち1棟は双堂)	未確認	未確認
主要瓦の形式		古大内式	古大内式	長坂寺式？
山陽道との位置関係		南面を東西に通過	西北側を斜めに通過	北東側を斜めに通過

- ・まだ確認された例はないが、文献に見える樓閣建築もあった可能性がある。
 - ・そもそも駅家は兵部省の管轄であり、谷あいの高台や丘陵の端部など、ある程度防備を考えた場所を選定して置かれたと推定できる。
- 以上の共通要素が文献に見える駅家の「定様」である可能性が高いと考えていいのではないだろうか。今後、上記の条件を満たす遺跡を抽出することで、所在の不明な駅家の場所や内容を明らかにすることができるだろう。

3 研究の課題

道路研究の課題

基本的なこととして、以下の点を明らかにしていく必要がある。第1に官道がどこを通っていたのか、第2に整備されたのはいつか、第3にどれぐらいの規模であったのか、そして、時代によって規模や場所に変化がないのかという3つの課題である。以上の政治的・経済的側面からのアプローチとともに、どのように造られていたのかという、技術上の課題をあわせて明らかにしていく必要がある。

駅家研究の課題

まず第1に、駅家はいつ設置されたのかということである。近年の研究成果によると、古代官道が整備されたのは白村江の敗戦（663年）以後の天智朝か天武朝とされており、駅制が整備されるのもこれ以降であろうが、大宝律令制定（701年）ころまでには成立しているであろう。道路整備、圃場整備とともに駅家建築など、同時進行で進めるには膨大な数の技術者・職人が必要であったであろう。その実態を知るための手がかりがほしいところである。また、設置にあたって、駅評などの前身施設があるのかどうかも検討課題である。

第2に、瓦葺き駅家はいつ成立したのかということである。高橋は729年の統日本紀の記録「為造山陽道諸国駅家充駅起稻五万束」や藤原武智麻呂『家伝』を瓦葺き駅家設置の根拠と考えたが〔高橋1982、2005〕、播磨國府系瓦の形式からみて奈良時代末～平安時代初めとしか考えられないとする今里〔今里1992〕との間で大きな年代のへだたりがある。岸本道昭は、政府の目標とはうらはらに事業施工は運々として進まなかつたと結論づけているが〔岸本2006〕、はたしてそうであろうか。高橋も指摘するように、駅制衰退期にあたる奈良時代末～平安時代初めに瓦葺き化を進めたとはとても考えにくく、やはり729年以降速やかに着手され、比較的短時間で瓦葺き化は進められたと考えたい。考古学的調査で明らかにするには条件的には難しい点が多いが、今後明らかにする必要がある重要な課題である。

第3点目は、駅家は駅館院だけに成り立っているわけではなく、周辺の雜舍群と一緒に機能するものであるため、これら周辺施設はどのようにになっていたのかということである。駅家経営に必要なものとしては、駅長の執務室や厩舎、駅子の休憩場所、来客に提供する食事の炊事場、井戸、駅起稻を保管する倉庫などが必要である。この点については、小火丸遺跡では駅館院の外に掘立柱建物や井戸が確認されているほか、加古川市坂元遺跡では駅戸の集落と考えられる建物群がみつかっているが、それぞれの遺構と具体的な用途を結びつけこれを証明することは難しい。駅館院や道路遺構と違って、どこに何が存在しているのかまったく手がかりがなく、調査には様々な課題があるが、今後は駅館院の周辺にも意識を持って計画的に発掘調査のメスを入れる必要があるだろう。

註

- (1) 以下、敬称については略させていただきます。

第2節 賀古駅家について

1 古大内遺跡と賀古駅家

古大内遺跡が所在する地名である「古大内」は、現在、行政的には「ふるおうち」とされているが、かつては「ふるおち」「ふろうち」とも呼ばれていた。また、文字表記についても、天理図書館蔵『慶長播磨国絵図』、『正保郷帳』、『寛文印知集』では「古大路」と書かれ、『元禄播磨国絵図』では「古大内」とある〔今井1999〕。

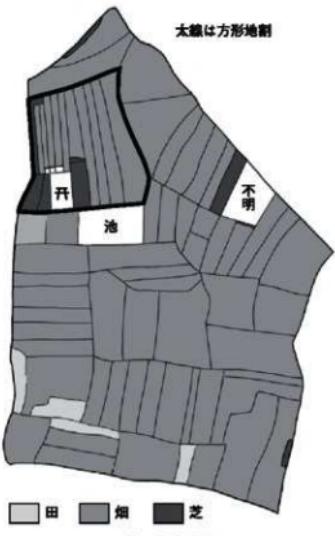
「古大内」という地名の由来については、「古い大内（すなわち天皇の住居たる内裏）と呼ばれる程の立派な建物があったことを伝承する地名」〔高橋1978〕、あるいは「古代山陽道（古大路）が貫通していたからだという」〔竹内1988〕とする説がある。

明治期については、「明治36年（1903年）と記した字限図によってうかがえる（第34図）¹¹⁾。地元で保管されており、この度見せて頂く機会に恵まれた。字・地番、土地利用が描かれている。図は実測に伴うものではなく、実際の形状とはかなり異なるが、鎌谷本三次が観察した昭和17年頃の方形地割を南北に貫通する「小径」ができる以前の貴重な資料である。それによると方形地割の南側に接する場所の東寄りに池があったことが記されているなど、これまでには知られていない新たな見知が得られた。

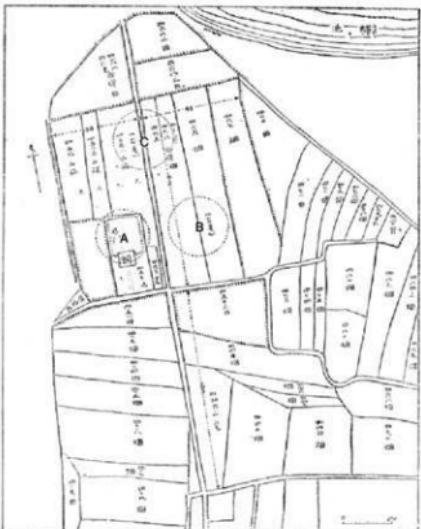
昭和12～13年（1937～8）頃の地籍図によると、そこには方形地割を南北に貫く道が記されている。今里幾次によれば、この道は昭和15年（1940）に拡幅されている〔今里1960〕ので、それ以前のものである。現況とあまり変わらないが、先に記した池はなくなっている。また、山陽道推定ラインの字界より駅ヶ池側には幅約10～16mの細長い田が描かれている。第6図に成果を反映している。

昭和17年頃までの様子は鎌谷本三次が詳しく記しており〔鎌谷1942〕、第35図に地籍図を転載した。

そのころの当遺跡は瓦が採集されることから「古大内庵寺」という名称が与えられていた。鎌谷によると、当時の様子は「南北約八四米、東西約三七米程ある短冊形をした松林」があり、「壇ノ森」と呼ばれていたようである。そして、「廢寺社」とされた一郭を南北に貫く「小径」があり、その路面は70cmほど掘り下げて造られていた。そのためか、第35図C地点では「發掘された古瓦が附近に夥しく散乱し、未發掘の箇所では被覆土下約二、三〇厘米の處に於いて古瓦と焼土とが厚さ約四、五〇厘米の包含層となり處女的な姿で横はつてゐる。（中略）現状では小径の西側のみでなく、これを挟む東側の畑地の一部に亘つてゐることは、小径を造る際に切り取った畑地の側壁面に於ける古瓦の露出に依つて一層有利に想像されるのである。随つて此處では小径を中央にした東西の一郭に亘つて堂宇跡を推定し得る可能性」を指摘されている。この南北に貫く「小径」は現在「新道（しんみち）」と呼ばれている。また、第35図Aの場所には「高



第34図 字限図



第35図 地籍図（〔鎌谷 1942〕より転載）

さ約八〇畝、東西約一四米、南北約一二米の略々方形になつた隆起地」があり、そこには礎石を抜き取つたような窪みが残つてゐたことが記されている。この「隆起地」の南辺に祠（現在の大歳神社）があり、その祠の台石や参道左側の碑（現在も残る「古大内城址」と書かれた碑のことであろう）の積石に「凡そ十三個、孰れもいたく火中した無鉛造の伽藍石の用ひられてゐる」ことが記されている。さらに、第35図Bの場所からも瓦が出土するという地主の証言を得られている。

そして、周辺の地形について、方形地割の西側は南流する小溝を挟んで約1m低く、東側は駅ヶ池の堤地へと漸次下がり、北側は東西の畦畔を挟んで1m以上も低い駅ヶ池の池畔に接する水田に終わっていたと記されている。そして、この溝や界字、畦畔によって囲まれた方形地

割の規模は、東西約90m、南北約83mであったとされている。

鎌谷の詳細な指摘は、現在の改変された土地からは復元できない様々な情報を与えてくれるのであるが、特に「罹災せらる古瓦と礎石及び焼土の發掘されてゐることに依つて、伽藍の儘滅してゐることが窺知されるのである」という観察も重要な指摘である。そして最終的に同氏は「法隆寺式伽藍配置を彷彿させる」寺であるとした。賀古駅家との関係については「駅ヶ池」の存在からこの附近に推定されている。なお、この考えは、かつて井上通泰によつても指摘されている〔井上1931〕。

昭和30年代の「新在家」の字限図^[2]には、古大内との字界と駅ヶ池に沿つて細い田が描かれている。これは先の昭和12~13年の地籍図にあつた田であろう。この田は鎌谷の図（第35図）には表されていない。これら地籍図、字限図は第6図に反映させている。

2. 賀古駅家に対する研究

播磨国における古代官道とそれに近接する駅家について、早くには今里幾次〔今里1960・71〕、木下良〔木下1976〕、高橋美久二〔高橋1968〕、吉本昌弘〔吉本1977〕らが、出土瓦、古代山陽道、文献史料、地名などを駆使し、考古学、歴史地理学、文献史学などの視点から検討を加えた。それらは互いに補完し合うもので、その後の研究成果もあって、発掘調査成果がなくとも賀古駅家は古大内遺跡であると結論づけることが可能となつた^[3]。そして、高橋自身が「今里幾次にとって筆者にとっても瓦葺駅家研究のきっかけとなった遺跡」〔高橋1992〕と述べているように、播磨国の駅家と交通史を考察する上で一つの出発点として扱われてきた。こうした結論はその後に行われた、たつの市小丸遺跡（布勢駅家）や上郡町落地遺跡（野原駅家）の発掘調査の結果を受けて、さらに可能性が高まっている。

そうした中で行われた今回の調査の結果、古大内遺跡が賀古駅家であると断定できる資料が得られた訳ではない。しかし、少なくとも奈良時代後半の造構が存在すること、播磨国府系瓦の古大内式瓦を伴うこと、現況でも確認できる方形地割がその時期には存在していたこと、などが明らかとなり、さらに可能性が高くなることはあっても、否定的な資料は見当たらなかった。よって、これ以下ではこの古大内遺跡を賀古駅家として解釈していくこととする。

3. 今回の発掘成果からの検討

(1) 出土遺物について

若干の軒瓦を含む瓦類の他に土器類、鉄製品、鍛冶関係の遺物が出土した。

瓦類

軒瓦は若干の破片が出土している。いずれも古大内式で、これまで採集されている多種の型式は含まれていない。軒丸瓦は確認できるものは13片に復元できたが、破片が小さく、中房部の蓮子配列は不明であり、今里幾次分類〔今里1984〕のI型かII型かは判別できない。また、軒平瓦についても小片かつ磨滅のため甲類、乙類かは判断できなかつた。

丸瓦はいずれも玉縁式が確認され、凸面には横方向のケズリが認められるもので占められていた。布勢駅家で分類されている「丸瓦X」にあたる〔山根1987〕。

平瓦は今回の調査で出土した瓦の中でもっとも多く、種類も多い。これらについても布勢駅家での分類を参考にしつつ分類した。凸面に見られるタタキの特徴によって、A：刻線によるタタキ、B：縄タタキ、C：無文のタタキ、の3つに分類できる。

A：刻線によるタタキ

I：叩き板の長辺・短辺にそれぞれ平行に線刻するもの。格子目は正格子になる。II：線刻が叩き板の長辺・短辺に対してそれぞれ斜行し、斜格子に交わる。III：叩き板の長辺に平行する線刻と斜行する線刻によって斜格子をつくるもの。以上の3つに分けた。

さらに交わる角度や間隔によって、Iは①は正方形となる格子、②長方形となる格子に、IIは①は正方形となる格子、②横に細長い斜格子、③縦に細長い斜格子に、IIIは①長細い斜格子、②は菱形となる斜格子に分けた。

B：縄タタキ

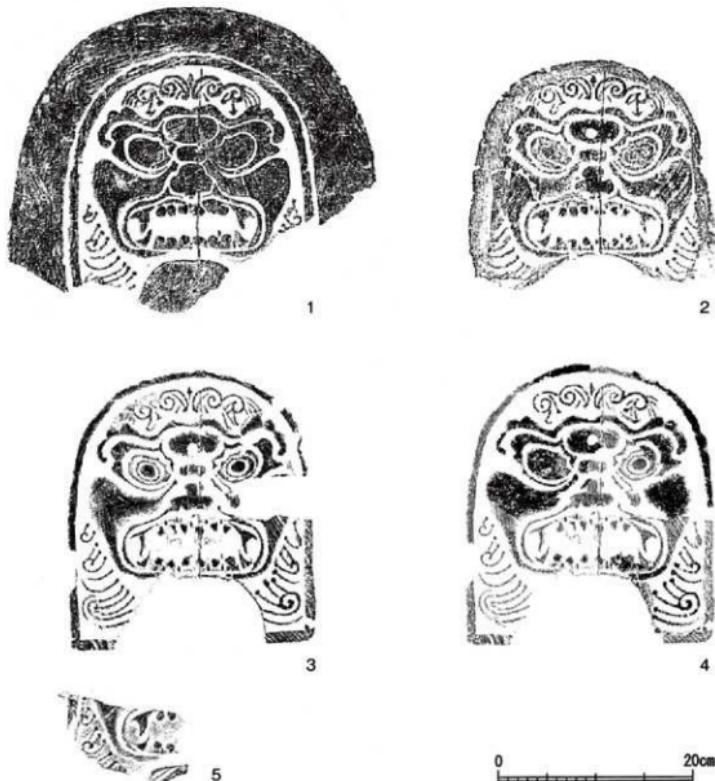
縄目の細さによって、(a) 3cmに16条以上の縄目があるもの、(b) 3cmに11~15条の縄目があるもの、(c) 3cmに縄目が10条以下のもの、の3つに分けた。

C：無文のタタキ

全体に凸面に凹凸があり、厚く粗雑な感を呈している。タタキには文様がないようで、しかも強く当てられていることから1cm近い明瞭な段を形成しているものもある。

以上の分類にしたがって、一括性の可能性が高く量も多いSX07出土資料について重量を計測した。総量は約132kgで、磨滅や小片で分類不可能な約45kgを除いた約87kgを対象としている。

- A I ① : 3.1kg (3.6%) ② : 19.5kg (22.4%)
- A II ① : 1.9kg (2.2%) ② : 4.2kg (4.8%) ③ : 27kg (3.1%)
- A III ① : 13.8kg (15.8%) ② : 33.7kg (38.6%)
- Ba : 0.8kg (0.9%) b : 0.3kg (0.3%) c : 1.1kg (13%)
- C : 6.1kg (7.0%)



1 伝播磨国分僧寺、2 賀古駅家、3 布勢駅家(復元)、4 野磨駅家(復元)、

5 賀古駅家(今回報告分)

(1~3 [今里1992]、4 [小田2006] より引用、一部改変。)

第36図 同系の鬼瓦

以上から、平瓦の叩き目のはほとんどは格子目で、その中でもAⅢ、特に②が多いことがわかる。繩目は数量が少ないにもかかわらず、繩目の密度にはばらつきがあり、型として安定した量が供給されていないことがわかる。AⅠ②は焼成も共通しており、ほとんどが灰白色で軟質である。ただし、第22図43・44のように一枚の瓦の場所によって叩き目の形状が変わるものもあり、破片からの推定には限界がある。よって、今回の分析からはあくまで傾向を示すのみである。

布勢駅家出土平瓦と比較すると、分類が完全に重なるものではないが、AⅢが主流で、繩目が少ないので共通している。なお、布勢駅家ではAⅥとされている叩き目の不明瞭な一群も多くあるが、本遺跡では抽出しきれず不明の中に埋もれているかもしれない。また、布勢駅家では抽出されていないAⅡ②③(第20図35、第22図41)やC(第23図47)が存在するといった相違点もある。

鬼瓦は当遺跡から、これまでに2種類が採集されている〔今里1960〕。今回は異なる遺構から破片が2点出土しているが、いずれも外縁部に珠文を施さない「播磨国府系鬼瓦」のI類で〔今里1992〕、布勢駅家、野扇駅家でも出土している。また、伝播磨国分寺出土とされている資料には、「外縁に粘土が付加されて幅広になっている様が見られるが、これはおそらく同じ範型を使用しながらも、全体を建物や屋根に相応させるために大型化したかったからであろう」〔今里1992〕とされているものがある。ただし、今回出土した鬼瓦のうち31の1点には、丸瓦と接する円弧状の割り込みの剥形部にも、直立縁が巡っている。このような形状は他の資料にはうかがえない（第36図）。同じ範型による製作であっても、丸瓦との関係でケズリ取られるようなことがあったか、あるいは範型自体を改変して製作した可能性を考えられる。また、同じ系統の鬼瓦であっても、かつて賀古駅家で採集された鬼瓦とは顎頭の形状が異なり、直立縁がないなどの違いがある。

土器類

須恵器を中心に、土師器、青磁が出土している。大きく奈良時代と、中世の2時期に分かれる。

奈良時代に属する須恵器は加古川市志方窯群産の特徴を備えており⁽¹⁾、主に杯類について東播磨の編年に当てはめれば、加古川市中谷4号窯と投松6号窯の間に位置づけられ、札馬2号窯ごろに相当する。ただし、この時期は資料不足のため不安定な状況であり、今後の検討が必要であるが、大きくは8世紀中頃～後半であることは明らかで、器高が高い18や土師器も同時期として齟齬はない。

古代末～中世に属する須恵器は糸切り底の小皿があり、12世紀中頃から後半と考えられる。また、同安窯系青磁碗は13世紀前半の年代を示している⁽²⁾。

鍛冶関係遺物

精練鍛冶滓を含む鉄滓、鞴羽口があり、炭もこれらと共に検出され、出土遺構はSX07に限られている。羽口は破片であるが5～6個体分ある。分析の結果、砂鉄製精練鉄塊が原料として使用されていたことが明らかとなった（第3章第2節参照）。なお、鉄滓は布勢駅家〔岸本1992a〕、野扇駅家〔小田2006〕でも出土している。

白 土

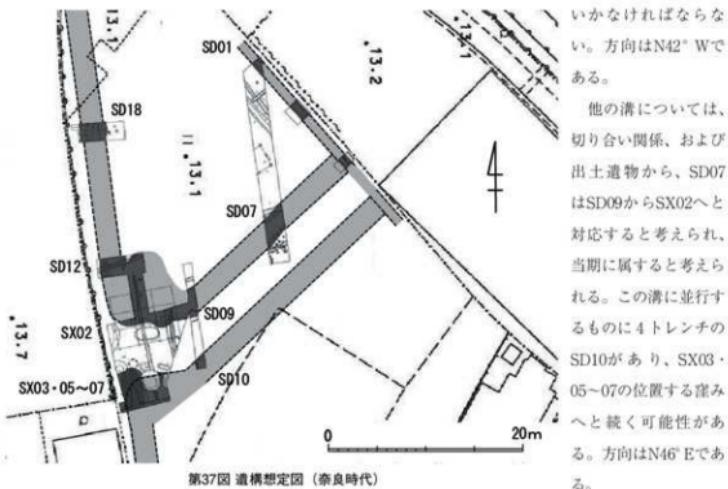
SX07上層から出土しているが、分析の結果、漆喰ではなく石英およびカオリナイトが検出され、ケイ酸アルミニウムを主体とした白色粘土、いわゆる「白土」の範疇に含まれることが判明した。白土に対する分析は布勢駅家、野扇駅家でも行われており、いずれもケイ酸アルミニウムを主体としたカオリナイトであった。イネ属の植物体が壁体材料に取り込まれていたことも共通する（第3章第2節参照）。

（2）遺構について

掘立柱建物2棟、溝18条、土坑7基、盛土2個所が確認できた。

個々の遺構について前後関係を論じられるほど遺物に恵まれておらず、また切り合い関係も一部の遺構について確認できるに過ぎない。しかし、その一部の切り合い関係と出土遺物から、大きく2期に分けることが可能である。

I期は奈良時代（8世紀中頃から後半）で（第37図）、溝・盛土・土坑がある。SD01はこれまでの歴史地理学などの研究成果を受けて、古代山陽道の側溝である可能性が高いと考える。ただし、調査区の制限から溝全体も、また反対側の側溝も確認できたわけではなく、発掘調査成果としては、層位的に中世以前の溝が存在することが明らかとなったと言えるにとどまる。今後の周辺の調査も含めて検証して

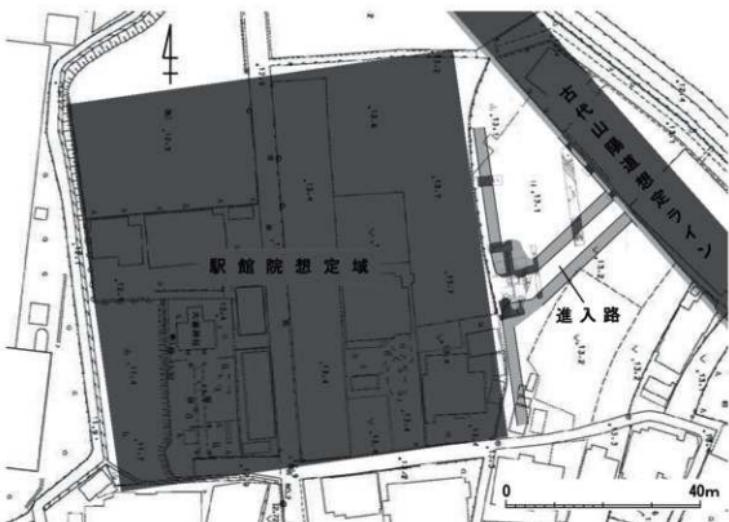


第37図 遺構想定図（奈良時代）

5・7トレンチで確認できた方形地割に沿うSD12・SD18はSX02とSD12の対応から当期であると考えられる。6・7トレンチでは方形地割と溝の間から盛土が確認でき、その位置から、築地堀、もしくはその基礎や犬走り状平坦面に伴う盛土であると考えられる。よって、上記の溝は築地堀にともなう溝であるとすることができよう。方向はN8°Wである。このような築地の外側に伴う溝は野磨駅家でも確認されている。

土坑は6トレンチの南端で集中して検出された。そのほとんどからは瓦片が廃棄された状態で出土している。瓦片に混じって出土した土器は奈良時代に限られているが、SX06は当期のSX02より新しいSD13をさらに切っていることから、瓦が廃棄された土坑全てが同時期ではないようである。その中で、SX07から出土した遺物はいずれも奈良時代中頃～後半であり、炭素年代測定ではむしろ古い値も出ている。よって、炭や鍛冶滓、輪羽口、瓦が層的に検出されたSX07の上層については当期の遺構であると考える。また、SX07の下層については、完形の瓦を除いて瓦類がほとんど出土しておらず、方形地割に接する盛土もこの層の上になされていることから、方形地割前の整地土であると考えられる。つまり、整地（完形瓦を含む）→築地堀→整地（鍛冶関係遺物、瓦片）の段階がこのSX07にあった可能性が高い。鍛冶関係の遺物についても、駅館院が機能しているときに精練鍛冶が行われ、それが廃棄されたとするよりも、駅館院建設（あるいは改築）に伴う大規模な工事の中で精練鍛冶が行われ、その廃棄物が整地土の中に瓦と共に廃棄されたとしたほうが妥当であると考えられる。後に記すように、このSX07付近には駅館院への進入路があったと考えられ、駅館院が機能している時期に入口脇に廃棄するとは考えがたいことからも首肯される。

以上のような遺構に対する理解が正しいとすると、「SD07～SD09～SX02」をつなぎだ溝と「SD10～SX03・05～07の窪み」をつなぎだ溝は、両溝に挟まれた部分において築地にともなう溝が途切れることから、山陽道から駅館院への進入路の側溝である可能性が考えられる。そうであれば、進入路は山陽道からほぼ直角に駅館院へ延び、駅館院付近で屈曲し、駅館院に対してもほぼ直角に造られていた



第38図 山陽道と賀古駅家（想定図）

とすることができる。ただし、南側の側溝については対応関係が明らかでなく、また溝間の距離が駅館院付近では約5mであるのに対し、山陽道側では3m余りしかないことからも検討の余地が残されている。

こうして尋かれた駅館院の入口は、駅館院東辺の中心ではなく、若干南に寄っている。このことは、駅館院内の建物の配置にも影響を与えていることであろう。

なお、入口が古代山陽道側に設置されるという構造はすでに野磨駅家で明らかにされている〔小田2006〕。野磨駅家は賀古駅家と左右対称の関係にあり、道は駅館院の北方から西方へ抜けている。そして、駅館院の西側に石製唐居敷をもつ八脚門があり、まさに駅館院の表門が道に向かって築かれているのである。賀古駅家と異なるのは、野磨駅家が北側の山を含めた長細い形をしているにも関わらず、門が駅館院西辺の水平距離にして中央に設けられている点である。

以上の検討を踏まえ、第38図に駅館院推定城、および古代山陽道推定ラインと共に当期の遺構を示した。駅館院は基地に沿う溝を基準にし、規模は他の遺跡から推定して仮に80m四方としている。山陽道については、SD01を基準とし、幅12mとして作図している。

以上の得られた結果を他の播磨の駅館院と比較すると、平面形は野磨駅家が長方形で他と異なるが、平面積は野磨駅家が約68×94m、布勢駅家が約80×80m、賀古駅家が約80×80mで、いずれも約6,400m²となりほぼ同じである。表門の位置はいずれも山陽道側にあり、賀古駅家が東側、野磨駅家が西側、布勢駅家は南側（推定）となる。院内の建物の配置は、表門の場所、地形などの要因で駅家ごとに異なっていたと/or することができよう。

Ⅱ期は平安時代終わり～鎌倉時代で、溝・掘立柱建物がある（第39図）。出土遺物が少なく、遺構間の切り合い関係も明らかでないものが多い。SB02は出土遺物から13世紀前半頃と考えられる。SB01については周辺から出土した遺物が12世紀中頃から後半頃であるが、建物の時期を直接示すものではない。

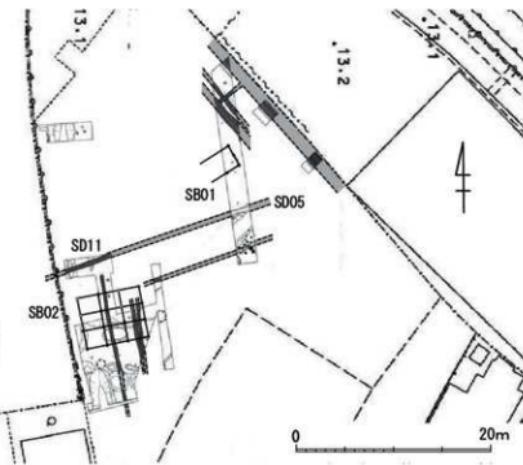
かもしれない。方位もSB02とは約18°異なっている。

溝についても年代を示す出土遺物に乏しいが、層位的にⅠ期よりは新しく、また一部は柱穴に切られていることから、建物以前の溝があることは間違いないものの、全ての溝がそうであるかどうかは不明である。方位は正方位に近いもの(N7°~11°W)と、それに

およそ直交するもの

(N64°~74°E)、西側に振るもの(N39°~42°W)と、それにおよそ直交する方向のもの(N51°E)に分かれるが、正方位に直交する溝は方向にかなり幅がある。

なお、7トレンチで出土した火打金は山田清朝の分類〔山田1989〕のAc類となり、当期のものとして矛盾しない。



第39回 遺構想定図（平安時代終わり～鎌倉時代）

(3) SX07と質古駅家瓦葺駅館院の時期

SX07からは須恵器と瓦がまとめて出土しており、須恵器を見る限りそれらは大きな時期幅をもつてない。SX07が瓦葺駅館院を造営した際の廐棄土坑であるとすると、そこからの出土遺物が造営時期を示していると考えられ、8世紀中頃から後半という幅の中にあるとすることができる。この年代については布勢駅家の土坑10にに対して検討され、導かれた結論〔岸本1992〕と同様であり⁽⁴⁾、播磨国の大内式軒瓦が出土〔奈良市教育委員会2009・宮崎2009〕していることとも矛盾はない。

駅館院が機能しなくなった時期については、6トレンチで検出された掘立柱建物SB02が、駅館院の進入路を塞ぐように立てられており、このころには駅館院の機能はなくなっていたと考えられる。そのことは、SD11が駅館院の築地を貫くように延びていることからもうかがえる。掘立柱建物がどのような性格のものであったのか考慮する必要があるが、少なくとも、築地を巡らした駅館院については、機能を停止していたと考えるのが妥当であろう。その時期については遅くともSB02の時期である13世紀前半以前であると考えられる。

(4) 石製唐居敷について

駅館院であった場所に所在する大歳神社の礎石類が遠方から運ばれたとは考えにくく、また駅館院に石製唐居敷が使用されている例はすでに野磨駅家で確認されているので、今回確認できた石製唐居敷は

賀古駅家の門に使用されていたものとみて間違いないであろう。

これまで、駅館院の門に石製唐居敷が使用されていたことが確認された例は野磨駅家ののみであり、特殊な例と考えることもできた。しかし、今回2例目が見つかったことによって、他の駅家、少なくとも他の播磨国内の山陽道駅家にも石製唐居敷が使用されていた可能性が考えられるようになった。

大きさを比較すると、野磨駅家の唐居敷の方立穴が長さ23cm、幅5cm、軸摺穴の長さが10cm、幅10cmであるに対し、賀古駅家の唐居敷は小さい方の唐居敷2で、方立穴の底面の長さ26cm、幅6cm、軸摺穴の長さが9cm、幅8cmを測る。

門の構造については、野磨駅家が八脚門であったことがわかっているが、賀古駅家については石製の唐居敷が見つかっただけで、その構造は全く不明である。この石製唐居敷が使用された門の場所については、野磨駅家が山陽道に面した西側であったことから、賀古駅家についても山陽道に面した東側にあった可能性が高い。そうであれば、今回発掘調査で検出された進入路に伴う門に使用されていた可能性は十分あると考える。

(5) 今後の課題

これまで、発掘調査成果を既存の研究に重ねて記した。トレーニング調査という制約上、推論を重ねてきた感があり、これらの検証も他の駅家と比較する中で解決していかなければならない。

また、今回の調査では、出土遺物が奈良時代と平安時代終り～鎌倉時代の2時期に限られていた。しかし、延喜式にうかがえるように、賀古駅家は10世紀ごろに日本最大の馬数を擁していたと記されているのであり、今回の発掘調査では、そのころの様子は遺物も含めて全く不明である。貞觀8年(866)に滅したという教信沙弥の伝承〔後拾遺往生伝〕を考慮するならば、少なくともそのころまでは賀古駅は当地にあったはずである。今後は、9世紀から10世紀前半の間に廃止・解体された仮称邑美駅家、佐突駅家と、それを吸収した賀古駅家について、当時の実態がわかるような調査成果が期待される。当然そこには駅館院だけなく、それに関連する雜舎群からの検討も含まれる。賀古駅家と同じ駅家里に含まれると考えられている坂元遺跡からは、当期の建物群が検出され、出土品には古大内式軒平瓦、墨書き土器などがあり、関連性が注目されている〔渡辺2009〕。

また、邑美駅家から佐突駅家の間に存在した可能性が指摘されているバイパスにも留意しなければならない〔吉本1990〕。このバイパス上には賀古駅はのっていない。

以上のような課題も多々あるが、今回の調査による最大の成果は、賀古駅家駅館院に関連する遺構が現存することが確認され、研究を進展させる資料が未だ地中に存在していることを示せたことであるといえよう。

註

(1) 文化元年(1804)に妻石田が著し、出版した『播州名所巡覧図絵』には「大納言季房卿古城趾 大内村にあり 今に四方深き堀あり 是城池のごとし」〔秦1804〕とあり、この「大内村」が当地を指すのであれば、字限図にある「池」はこの「堀」の一部なのかも知れない。しかし、発掘の成果では、少なくとも方形地割のすぐ東側において堀は確認できなかった。この池の性格も城に伴うものかどうか検討が必要である。なお、このような貴重な資料を保管されてきたことに敬意を表すとともに、実見の機会を与えて頂いたことに謝意を表します。

(2) 字限図は加古川市教育委員会が所蔵する「新在家」の字限図で、今の加古川市平岡町新在家にあたる。なお、古大内の字限図は確認できていない。

- (3)『峯相記』(1348年頃)によると、教信沙弥が賀古郡西の野口に留まり住んでいたとある。先学にもあるように、これが現在の教信寺であるとすると、「日本往生極楽記」第二二「勝如伝」(10世紀末成立)、「今昔物語」卷一五~第二六「播磨國賀古ノ駅ノ教信往生ノ語」(1120年~12世紀前半の成立)、「後拾遺往生伝」卷上「証如伝」(12世紀前半の成立)、「元享積書」第九「摂州勝尾寺勝如伝」(1322年成立)、「帝王編年記」貞觀六年条教信伝(1364~80年成立)には、教信沙弥は賀古駅家の北に住んでいたとあるので、教信寺の南側に賀古駅家があつたことになる。教信沙弥は貞觀八年(866)に往生したとあるので、これらの文献からも古大内遺跡が賀古駅家であり、少なくともこの頃まで当地に存続していたこととなろう。
- (4)須恵器の評価については兵庫県立考古博物館内造の教示による。
- (5)兵庫県立考古博物館岡田章一の教示による。
- (6)土坑10出土土器について、岸本道昭は後に若干時期を下がることを示している〔岸本1994〕。そこでは「8世紀を2つに分けて後半という考え方でとらえ直したい。」とされている。

第3節 岳美駅家について

1 研究史

長坂寺遺跡では大正時代から瓦の散布が報告されており、その沿革は今里幾次の紹介に詳しい〔今里1994〕。それによると大正11年の矢倉和三郎の報告を嚆矢として、終戦前までに7件の報文があり、すでにその時点で、後の長坂寺式・古大内式・北宿式瓦の出土地として周知されていた¹¹⁾。特に鎌谷木三次は『播磨上代寺院址の研究』〔鎌谷1942a〕の中で「長坂寺村廃寺」として詳細に紹介している。瓦の出土地を寺跡として位置付けるのは当時の共通認識であったといえるが、一方、附録として「播磨上代の山陽街道と上代寺院址」の章を設け、山陽道に沿って分布する寺院と駅家の関係についても言及している。また鎌谷は、この地が『和名抄』の「岳美郷」、『続日本紀』・『日本紀略』の「岳美領宮」にあたりことを指摘した。その遺跡地としてあげた「大字大見」は、昭和35年の字限図¹²⁾の全体図には残っているが、字名としては該当がなく、魚住町西岡にある「小字見里」周辺に、現在も呼称としての「大見」は残る。

今里は播磨の出土古瓦を丹念に集成した上で「播磨国分寺系列瓦」を抽出し、その出土地が古代山陽道沿いに帯状分布することから、駅家の関係を視野において展望を明らかにした〔今里1960〕。その中で、従来の長坂寺廃寺に関して、佐突駅家と同様、延喜式に記載のない駅家が存在する可能性を指摘した。

高橋美久二是播磨国内の山陽道の駅家の数が、大同2(807)年の太政官符では9駅であったのが、10世紀前半の延喜式では7駅となり、賀古駅家の馬数が通常の20匹から40匹、明石と草上の駅家が30匹と不自然に増えている点に着目。これは明石と賀古、賀古と草上の間に本来あった駅家が廃された結果、その分の馬数が3つの駅家に配分されたものと解釈し、後者は『続日本紀』承和6(839)年2月戊寅条に記載のある佐突駅家と考えた。名前が残っていない前者については、長坂寺遺跡こそが駅家であると断定し、郷名をとつて「岳美駅家」と仮称した〔高橋1982〕。

2 長坂寺遺跡について

長坂寺遺跡の範囲は、現在の住所表記では「明石市魚住町長坂寺字堀割ノ内、金ヶ崎字大三味西」で、

周辺には「大道（通・堂）池」「大道」「往還端」「古前池」などの、駅家に関連した小字や地名がみられる。遺跡の立地は印南野台地の南東端にあたり、明石方向に向かって視界が開けている。標高は45m前後で、段丘の崖下とは10m以上の比高差がある。

遺跡の南西側を古代山陽道の想定ラインが南東—北西方向に通り、その痕跡が長池や亥ノ谷池などの堤に窺える。約1.3km北西の魚住町清水字辻ヶ内地点では、発掘調査によって古代山陽道の側溝を検出しており、最終段階の道幅が約8mであったことが判明している〔明石市教育委員会2008〕。

長坂寺遺跡の中では発掘調査が行われたことがなく、これまでに報告されている瓦資料はすべて採集品で、「播磨国府系瓦」の8組の軒瓦のうち、長坂寺式・古大内式・北宿式の軒丸・軒平瓦のセットと、本町式・足沙門式の軒丸瓦が存在する〔今里1995〕。瓦の分布状況などから鎌谷は、字堀削ノ内1144・1146ないし字大三味西1646あたりを中心とする方100m内外が遺跡の主要部と提えている〔鎌谷1942a〕。地番の1144・1146は、今回探査したC区にあたる。ただし今では、現地へ行ってもほとんど瓦片を採集することができない状況である。

この地区では淡河川山田川疊水岩岡支線の工事に伴って、大正年間に耕地整理が施工されており、土地の形状は改変を被っている。しかし調査に先立って作成した地形測量図（第4図）を観察すると、字堀削ノ内の字界の南東隅が東西75mの畦畔（以下、東西畦畔）と、南北90mの畦畔（以下、南北畦畔）でL字形を呈していることが判る。字界線であったために改変から免れた部分と考えられ、正方位にのっとっている点と、延長規模などから、駅館院の範囲を示す方形地割りの可能性を考えられた。

3 地中レーダー探査

第2章第2節で報告したように、A-2区・B-1区・C区で、正方位の東西および南北にのっとった輪郭線が、地中レーダー画像で認められた（図版1-①③④⑥）。その画像の輪郭に補助線を加えて、地形図にはめこんだのが図版2である。これを観察すると、現地に残るL字形の畦畔とよく合致しており、東西畦畔の内側6~7mのところを、A-2区aの輪郭線が平行する。その西端はC区で検出した6m間隔の2本線と直角に接続する。このC区fの外側と南北畦畔は、90mの間隔で平行しているため、東・南・西辺のコの字形が形成される。ただし北辺は耕地整理の際に改変を受けていて不明である。

小犬丸遺跡・古大内遺跡で想定されている、約80m四方という駅館院の規模を、図版2に仮にあてはめてみたところ、上記の東・南・西3辺の内側5~6m辺りでほどよく収まっており、築地などの余地も考え合わせると、方形区画の駅館院が存在する蓋然性は高まったといえる。もしそうであるならば、播磨国の駅家の規模の標準を示す類例が追加されることになる。

この方形区画に対して山陽道は、南西方向から段丘の崖を直線的に上ってくるものとみられる。現在の大字金ヶ崎字三味西では、崖面を削った平坦地に住宅が建ち並んでいるところがあり、山陽道を切り通した痕跡を示す可能性がある。山陽道から方形区画に取り付く進入路の位置について、古大内遺跡の例を参考にすると、同遺跡では北西側の段丘崖下から上ってきた道が、駅館院の北東隅あたりで同一レベルになり、東辺に向かって分岐、進入している。長坂寺遺跡の地形はこれと逆の関係で、南東隅の段丘崖下から上ってきた道が、方形区画の南西隅あたりで同一レベルになっており、同様に考えれば西辺に進入路が取り付くことになる。B-1区で検出した東西・南北方向の輪郭線eは、そうした遺構との関連が考えられる。

この他、A-2区の下層（地表下60cm前後）においても方形・円形の輪郭線（図版1-②b・c）が観

著に認められている。方形区画の南西隅にあたるが、現在のところ、層位的な問題も含めて、その性格は不明である。

4 旧地形図との照合

長坂寺地区一帯では、明治末期から大正時代にかけて「淡河川山田川疊水岩岡支線」の工事が行われた。工事は明治44年2月に起工し、大正4年4月に竣工している（写真13）。この工事に伴って長坂寺遺跡の箇所も耕地整理され、水田等の形状が変わってしまっていることはすでに述べたとおりである。

兵庫県淡河川山田川土地改良区を通じて入手した、下記の図面がある。

- 1)『岩岡支線溜池水路実測平面図 其九（縮尺貳千分の壱）、横断面図』
- 2)『岩岡支線別所支線水路連続図』
- 3)『岩岡支線関係字限図』
- 4)『道路改良工事県道岩岡魚住線明石市魚住町長池平面図（1:500）』

また明石市教育委員会を通じて、5)『兵庫県明石市大久保 魚住 二見地区土地宝典 地番地積地目入図』を入手した。

このうち1)・2)が耕地整理以前の状況を示す図面である。両者はかなりの異同があるが、現在では失われた方形区画の北辺付近を表現している。1)の青焼き図の部分をスキヤニングしてモノクロで反転させたのが写真14である。これを、4)・5)を参照しつつ現地形図に当てはめ、水路計画線や畦畔・池などをトレースして第40図とした。それを見ると、当時B-1区の西側には、崖線で表現された盛土状の高まりがあったようで、その上にベンチマークが設けられている。その北と西には、今は存在しない池がある。盛土と北側の池の間付近に畦畔の分岐点Xがあり、そこから東北東・南・南西方向に畦畔が伸びることが判る。測量の精度の問題もあるが、これで見る限り、方形区画の北辺を示す地割りは認められない。

一方、2)・3)・5)の図では、1)の図とは少し方向がずれるものの、分岐点から南に延びる水路・畦畔（網線で表現）が、B-1区の上層で見つかったライン（図版1-③d）と符号して、水田を斜めに横断している。この方向性は下層の輪郭線（図版1-④e）と



写真13 薮水記念碑

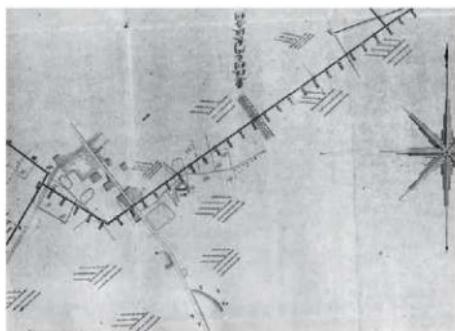


写真14 岩岡支線溜池水路実測平面図 其九 (部分)

も通じており、地下の遺構を反映したものの可能性がある。

1) ~ 4) の面図は水路工事用に作成されたもので、道路から離れた箇所までは表現されておらず、これより古い当該地区的詳細図は知られていないため、東西畦畔や南北畦畔との関係は明らかにできなかつた。



第40図 長坂寺遺跡の旧状重ね図

5 結語

長坂寺遺跡は、地形的な立地や山陽道との位置関係、正方位にのった方形区画とその規模、探査の成果、出土瓦などを考え合わせると、「邑美駅家」と仮称される古代の駅家跡と考えるべき妥当性がますます高まつたといえる。基壇・礎石等は失われているとみられるが、西辺・東辺の南半部と南辺の区画は遺存している可能性が高い。ただし今回の調査成果は、あくまで地中レーダー探査による間接映像に基づくものであり、これを検証するには、効果的な確認調査の実施が不可欠である。

註

- (1)【今里1994】の註の中では、①矢倉甫田『明石市資料』1925年 ②太田陸郎「拱橋古瓦譜」「兵庫史談」第1巻 第3号 1932年 ③島田清「播磨国寺址並古瓦発見地名表」「播磨」第2巻第3号 1933年 ④栗山一夫「播磨における初期仏教文化」「歴史」第4号 1937年 ⑤栗山一夫「播磨国分寺」「国分寺の研究(下)」「1938年 ⑥島田清「播磨国東部地方に於ける出土古瓦に就いて」「総合古瓦研究」第二分冊 1939年 ⑦鷹谷木三次「長坂寺村廢寺」「播磨上代寺院址の研究」1942年の7件が挙げられている。
- (2) 帝国市町村地図刊行協会1960『兵庫県明石市大久保 魚住 二見地区土地宝典 地番地積地目入図』

参考文献一覧

- 足利健亮1992 「山陽道の歴史地理的考察」「山陽道(西国街道)」歴史の道調査報告書第2集 兵庫県教育委員会
福原昭嘉2003 「古代山陽道路福里地點」「平成13年度明石市埋蔵文化財年報」明石市教育委員会
井上通泰1931 「播磨風土記新考」大岡山書店 P61
今井林太郎1999 「兵庫県の地名」日本歴史地名大系第29巻II 平凡社
今里幾次1960 「播磨国寺式瓦の研究—加古川市野口町古大内出土の古瓦—」「播磨郷土文化協会研究報告第四冊」
1974 「山陽道播磨国瓦葺駅家」「兵庫県の歴史」12 兵庫県
以上2編 「播磨考古学研究」(1980) 今里幾次論文集刊行会に所収
1984 「姫路市本町遺跡の古瓦」「本町遺跡(本文)」姫路市教育委員会
1989 「賀古駅家と古代の駅制」「加古川市史」第1巻
1992 「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」「布勢驛家 - 小犬丸遺跡1990・1991年度発掘調査概報-」龍野市文化財調査報告8
1994 「古瓦から邑美駅家を復原する」「歴史と神戸」185 神戸史学会
以上4編 「播磨古瓦の研究」(1995) 真陽社に所収
1971 「姫路市辻井遺跡 - その調査記録 -」古代播磨研究会
1978 「古代の駅制と布勢駅家」「龍野市史」第1巻 龍野市
1995 「播磨古瓦研究序説」「播磨古瓦の研究」真陽社
1996 「賀古駅家跡(古大内遺跡)」「加古川市史」第4巻 加古川市
小田賢2006 「古代山陽道 野府駅家跡 - 落地遺跡坂板地区はか発掘調査報告書 -」上郡町文化財調査報告4 上郡町教育委員会
鷹谷木三次1942 「播磨上代寺院址の研究」成武堂
1942 a 「長坂寺村廢寺」「播磨上代寺院址の研究」成武堂
1942 b 「古大内廢寺」「播磨上代寺院址の研究」成武堂
岸本道昭1992a 「布勢驛家 - 小犬丸遺跡1990・1991年度発掘調査概報-」龍野市文化財調査報告8 龍野市教育委員会
1992b 「土坑10の意義と瓦葺建物の成立」「布勢驛家 - 小犬丸遺跡1990・1991年度発掘調査概報-」
龍野市文化財調査報告8 龍野市教育委員会
1994a 「布勢駅家 II - 小犬丸遺跡1992・1993年度発掘調査概報-」龍野市文化財調査報告11 龍野市教育委員会
1994b 「既刊「布勢駅家」の訂正」「布勢駅家 II - 小犬丸遺跡1992・1993年度発掘調査概報-」龍野市文化財調査報告11 龍野市教育委員会
2006 「山陽道駅家跡」日本の道路11 同成社

- 木下良1976** 「空中写真に認められる想定駅路」『びざん』64
- 木本雅康2000** 「古代の道路事情」吉川弘文館歴史文化ライブラリー
- 2008** 「遺跡からみた古代の駅家」日本史リブレット69 山川出版社
- 島田拓2005** 「落地遺跡（八反田地区）－県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書－」上郡町教育委員会
- 高橋美久二1968** 「播磨国の古代駅家」『FHG』11号 野外歴史地理学研究会
- 1978** 「播磨国古賀駅家について」藤岡謙二郎先生追憶記念論文集 歴史地理研究と都市研究（上） 藤岡謙二郎先生追憶記念事業会
- 1982** 「古代の山陽道」小林行雄先生古希記念論文集刊行会編『考古学論考』平凡社
- 1986** 「山崎駅と駅家の構造」中山修一先生古希記念事業会編『長岡京古文化論叢』同朋社
- 1990** 「古代播磨国の駅家」今里幾次先生古希記念論文集刊行会編『播磨考古学論叢』
- 1992** 「古代山陽道の駅家」「山陽道（西国街道）」歴史の道調査報告書第2集 兵庫県教育委員会
- 1993** 「古代の山陰道」「山陰道」歴史の道調査報告書第3集 兵庫県教育委員会
- 1994** 「古代の美作道」「山陰道」歴史の道調査報告書第4集 兵庫県教育委員会
- 1995** 「古代交通の考古地理」大明堂
- 1996** 「淡路の南海道」「淡路往還（南海道）」歴史の道調査報告書第6集 兵庫県教育委員会
- 2004** 「駅家の構造」「駅家と在地社会」奈良文化財研究所
- 2005** 「落地遺跡（野崎駅家）と古代の山陽道」「落地遺跡（八反田地区）－県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書－」上郡町教育委員会
- 竹内理三 編1988** 「角川日本地名大辞典」28兵庫県 角川書店
- 直木孝次郎1974** 「駅の制度」『兵庫県史』第1巻 兵庫県
- 中村太一2000** 「日本の古代道路を探す－律令国家のアウトバーン－」平凡社新書
- 奈良市教育委員会2009** 「播磨国からやって来た瓦」『奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料』No.39
- 秦石田1804** 「播州名所巡覧図絵」大坂書林のち『播州名所巡覧図絵』阪本地誌大系8 隆川書店として刊行
- 兵庫県教育委員会1991a** 「七日市遺跡（I）第3分冊」兵庫県文化財調査報告第72冊-3
- 兵庫県教育委員会1991b** 「尾尾・沖田遺跡（I）」兵庫県文化財調査報告第100冊
- 兵庫県教育委員会1992** 「山陽道（西国街道）」歴史の道調査報告書第2集
- 兵庫県教育委員会1993a** 「山陰道」歴史の道調査報告書第3集
- 兵庫県教育委員会1993b** 「尾尾・沖田遺跡（II）岡ノ平遺跡」兵庫県文化財調査報告第120冊
- 兵庫県教育委員会1994** 「山陰道」歴史の道調査報告書第4集
- 兵庫県教育委員会1996** 「淡路往還（南海道）」歴史の道調査報告書第6集
- 兵庫県教育委員会2004** 「七日市遺跡（III）弥生～平安時代の調査」兵庫県文化財調査報告第271冊
- 兵庫県教育委員会2005** 「加都遺跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第285冊
- 兵庫県教育委員会2007** 「加都遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第324冊
- 別府洋二1987** 「小丸遺跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第47冊 兵庫県教育委員会
- 宮崎正裕2009** 「平城京左京五条四坊九坪・十坪」「大和を掘る」27 2008年度発掘調査速報展 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 宮崎康雄1994** 「高槻市発掘の山陽道」「季刊考古学』第46号 嶽山閣
- 山下史朗1989** 「小丸遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第66冊 兵庫県教育委員会
- 1994** 「古代山陽道とその駅家」「風土記の考古学』2 同成社
- 山根寅生1987** 「瓦」「小丸遺跡出土の瓦について」「小丸遺跡Ⅱ」兵庫県教育委員会
- 吉本昌弘1977** 「古代播磨国における山陽道と郡家の復原的研究」「新地理」25-1
- 1985a** 「播磨国の山陽道古代駅路」「歴史と神戸」第24巻第1号 神戸史学会
- 1985b** 「播磨国明石駅家・揖津国須磨駅家間の古代駅路」「歴史地理学」128号 歴史地理学会
- 1990** 「播磨国邑美・佐突駅家間の山陽道古代バイパス」「今里幾次先生古希記念 播磨考古学論叢」
- 2005** 「古代播磨国山陽道駅路」「落地遺跡（八反田地区）－県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書－」上郡町教育委員会
- 渡辺昇2009** 「坂元遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第366冊 兵庫県教育委員会

〔類聚三才格 卷一八 驕傳事〕

太政官符

東海道五國 藤原 公家 沢井 重正

東山道二國 善通 朝臣

北陸道二國 長村 順昌

山陰道三國 竹原 長足 順昌

山陽道四國 藤原 朝臣 順昌

南海道三國 竹原 長足 順昌

右十九國。乘前佐_レ令不_レ聽_レ。乘驕。其國寺皆實食糧_レ。乘當國馬_レ入京_レ。非直坐延時日_レ。實亦旁擾百姓_レ。申致遷道莫不_レ由_レ茲_レ於_レ理面量事非不_レ穩便_レ。伏請_レ。自今以後_レ。牒有_レ公事向_レ京國司音聽_レ。乘歸_レ。唯仰貢_レ。近江_レ丹波等三國不_レ在_レ給_レ驕之例_レ。

以前件狀如_レ聞_レ。謹以申聞_レ。伏聽_レ。勅裁_レ。謹奏_レ。

養老六(七二二)年八月廿九日

奉_レ勅_レ。依_レ奏_レ。

太政官符

應_レ新任國司從_レ海路_レ赴_レ任事

右仲_レ山陰道觀察使解_レ。解_レ。牒戶百姓進_レ送便命_レ。山谷縱深_レ人馬疲弊_レ。望請_レ當道諸國新任同_レ。准_レ西海道_レ。一從_レ海路_レ。令_レ赴_レ任所_レ。右大臣宣_レ奉_レ勅_レ。依_レ請_レ。

大同元(八〇六)年六月十一日

(中略)

太政官符

應減_レ省賦馬參伍肆拾正事山城國九縣十定_レ。攝津國五縣七十五疋_レ。備中國九縣卅五疋_レ。備中國五縣廿五疋_レ。安藝國十三縣六十五疋_レ。長門國五縣廿五疋_レ。已上五十一縣。別減_レ五疋_レ。右據案內_レ。太政官今月廿日下_レ。依省_レ符_レ。大字府解_レ。解_レ。筑前國九縣。豐前國二縣。惣十一箇縣。是後_レ府下_レ。向_レ京之大路_レ。元來賦別減_レ馬廿疋_レ。而今實上課物減

省過半_レ。遙遠之勞_レ。少_レ於萬目_レ。人馬徒多_レ。乘用有_レ餘望請_レ。驕則減_レ五疋_レ。以_レ十五疋_レ爲_レ定者_レ。右大臣宣_レ奉_レ勅_レ。依_レ請_レ。今候_レ右大臣宣_レ傳_レ。奉_レ勅_レ。一府之為_レ。後候_レ減省_レ。路次諸國亦依_レ件減_レ。

大同二(八〇七)年十月廿五日

〔續日本紀 卷九〕

聖武天皇神龜三(七二六)年十月

冬十月辛亥_レ。行_レ十二幸攝津國印南野_レ。甲寅_レ至_レ印南野邑美頓宮_レ。從_レ駕人及攝津國郡百姓等_レ。供_レ奉行在所_レ者_レ。授_レ位號_レ。祿名有_レ矣_レ。又行宮懶近_レ。明石賣古二郡百姓_レ。高年七十以上屬_レ。駕各一解_レ。曲_レ故攝津國內大辟已下罪_レ。

〔續日本紀 卷十〕

聖武天皇天平元(七二九)年四月

爲_レ造_レ山陰道諸國驕家_レ。尤_レ造_レ驕起稻五方策_レ。

〔續日本紀 卷十三〕

聖武天皇天平十一(七三九)年六月

六月戊寅_レ。令_レ諸國驕起稻飯糸溫_レ合正稅_レ。

〔續日本紀 卷二十九〕

稱德天皇神麗嘉空三(七六八)年三月

山陰道使左中力正五位下藤原朝臣雄田承呂言_レ。本道驕_レ傳路遠_レ。多致民苦_レ。乞復讓_レ。將_レ迎送_レ。

〔日本後紀 卷十三〕

顯武天皇大同元(八〇六)年五月

丁正_レ。勅_レ備後_レ。安芸_レ。周防_レ。長門等國驕船_レ。本備_レ春客_レ。瓦葺_レ粉壁_レ。頃年百姓繁_レ。修造雖_レ甚_レ。或著_レ客_レ朝者_レ。便_レ從_レ海路_レ。其後_レ損者_レ。費附修理_レ。但長門國驕_レ近臨_レ海邊_レ。爲_レ人所見_レ。宜_レ特加勞_レ減_レ。前朝_レ其_レ斬造者_レ。待_レ定様_レ。遣_レ之_レ。

〔續日本後紀 卷八〕

仁明天皇承和六(八三九)年二月

戊寅_レ。攝津國印南野佐佐賀驕家_レ。依_レ請建立_レ。

〔日本三代実録 卷十五〕

清和天皇貞觀十（八六八）年七月

十五日丙午。播磨國宮。今月八日地大震動。諸都官舍。諸定額寺堂塔皆悉傾倒。

〔家傳〕 傳延慶

藤原左大臣。諱武智麻呂。左京人也。太政大臣史之長子。中納。由是國家殷賡。倉庫盈溢。天下太平。街衢之上。朱紫輝煌。矣。殊未踰。始。圓闕巍漢。高石若生。仍營盛邑及諸勝家。許人瓦屋楠葉圍護。

〔日本往生極樂記〕

攝津國鳥下郡勝尾寺住僧勝知。別起草庵。鑿一窟其中。十餘年間。齋斷音誦。弟子童子。相見希矣。夜中有二人。來叩柴戶。勝知以忌言誦。不得。問之。唯以咳嗽。令知有人。戶外人。牒云。我是住。攝磨國寶古驛北邊。沙彌教信也。今日欲往。一生極樂。上人明年。可。母其迎。為告。此由故以來也。言訖而去。勝如驚愕。明日遣弟子僧靜鑒。尋依處。欲。驗真鶴鵠。勝鑒還來曰。勝家北有竹籬。纏前有死人。勝鑒詰。真。廳內有一老嫗。二童子。相共哭泣。勝鑒便問。非情。嫗曰。死人我夫。沙彌教信也。一生之間。稱願說。竟。衰服不休。以為己業。隱里雇用之人。呼為阿彌陀丸。今嫗老後。相別。是以哭也。是童子即教信宿也。勝如聞其言。自謂。我無言誦。不如教信念佛。故往。詣聚落。自他念佛。及于明日。急以人滅矣。

〔後拾遺往生伝〕 卷上 一員觀八（八六八年）

攝津國豐島郡勝尾寺住主。證如者。中納。貞觀八年丙戌八月十五日。夜中有人叩柴戶。上人依斷言誦。不得不。則之。只以咳嗽。令知有人。外人謂曰。我是攝磨國寶古驛北邊沙彌教信也。今日往。一生極樂。上人者。明年今夜。可得其迎。為告。此事。與聖蹟所來告也。微光照應。言訖而去。其明朝出。于無言。召。子弟僧勝鑒。遣。俟處。令尋。演鶯。勝鑒還來曰。勝家北有竹籬。前有死人。群犬餓食。廳中有老嫗。其傍有幼童。相見相顧。共以

哀哭。勝鑒問其情。嫗曰。死人吾夫教信也。兒子者。其子也。教信常唱念佛。嫗呼曰。阿彌陀丸。相親三十年。相別三箇日云。（後傳）

〔天木和歌抄〕 卷第二十一 聰

建保七年家千首勝釋（かの馬や）

正。建保（一二五五）年。行。延

松原はそともみえすはりまちのかこのうまやは釋ふ
かくして

前大納言頭朝

引用文獻

横浜市校注一九九七「攝磨國風土記」「風土記」（新編日本古美術全集五）小学館

伊藤博校注一九八五「万葉集」上卷 吉川文庫

黒板野美鶴編一九八三「令義解」（新訂増補國史大系著及版）吉川弘文館

黒板野美鶴編一九八四・八五「延喜式」中・後編（新訂増補國史大系著及版）吉川弘文館

正宗教大輔一九三〇・三一「和名類聚錄」（日本古美術全集）日本古美術全集刊行会

天理大學出版部一九七一「和名類聚抄・三寶類子集」天理圖書館著本資料和音之部第一卷

黒板野美鶴編一九八三「類聚三代格・弘仁格抄」（新訂増補國史大系著及版）吉川弘文館

黒板野美鶴編一九八三・八四「續日本紀」後・前編（新訂増補國史大系著及版）吉川弘文館

黒板野美鶴編一九八四「日本後紀」（新訂増補國史大系著及版）吉川弘文館

黒板野美鶴編一九八三「續日本後紀」（新訂増補國史大系著及版）吉川弘文館

竹内理三一九六二「聖傳」「聖傳道之」下卷 東京美術出版社

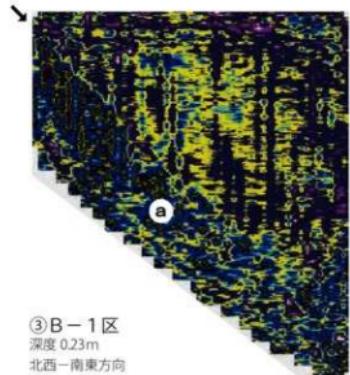
仏教刊行会一九七九「日本往生極樂記・傳抄・往生伝」「大日本佛教全集」第百七冊 名著普及会

市島謙宣編一九〇六「天木和歌抄」圖書刊行会

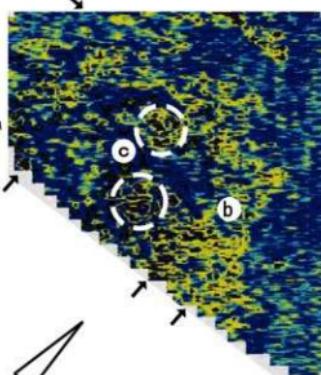
図版1 長坂寺遺跡の探査結果

タイムスライス (1/400)

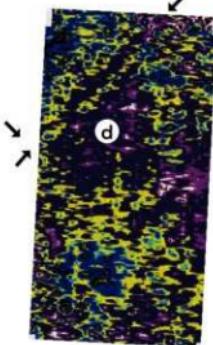
① A-2区 深度 0.22m 北西-南東方向



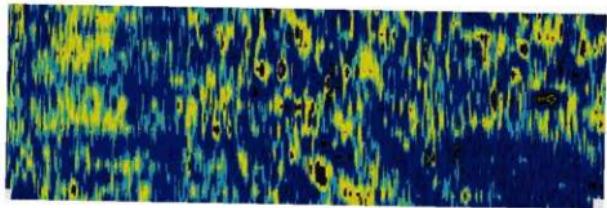
② A-2区 深度 0.62m 北西-南東方向



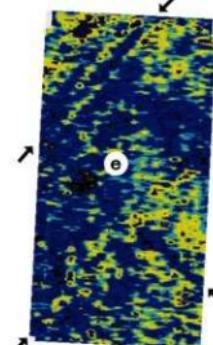
③ B-1区
深度 0.23m
北西-南東方向



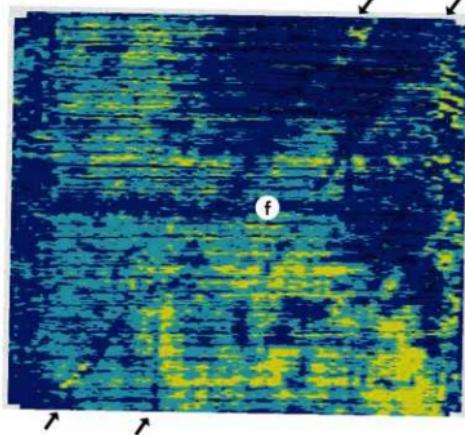
⑤ B-2区 深度 0.30m 南西-北東方向



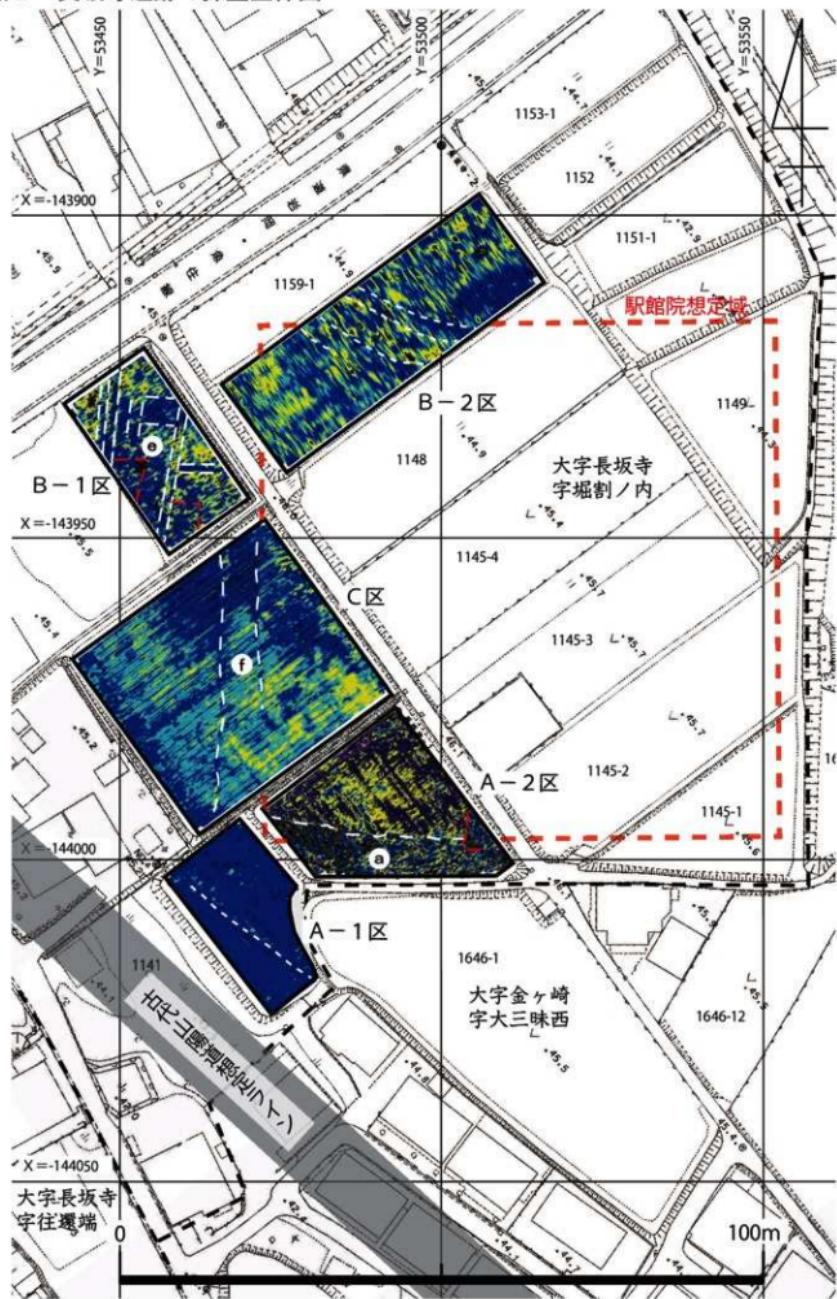
④ B-1区
深度 0.31m
北西-南東方向



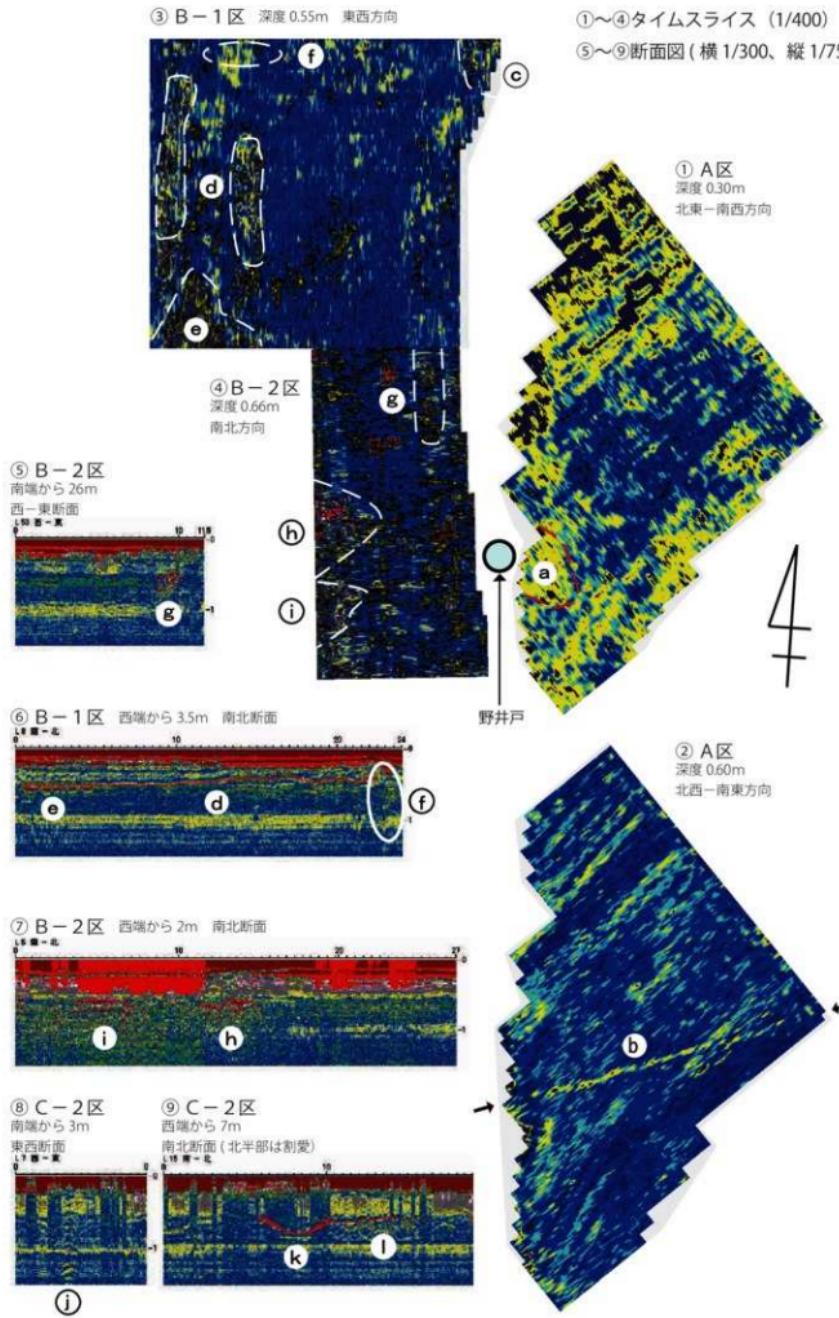
⑥ C区 深度 0.25m 北西-南東方向



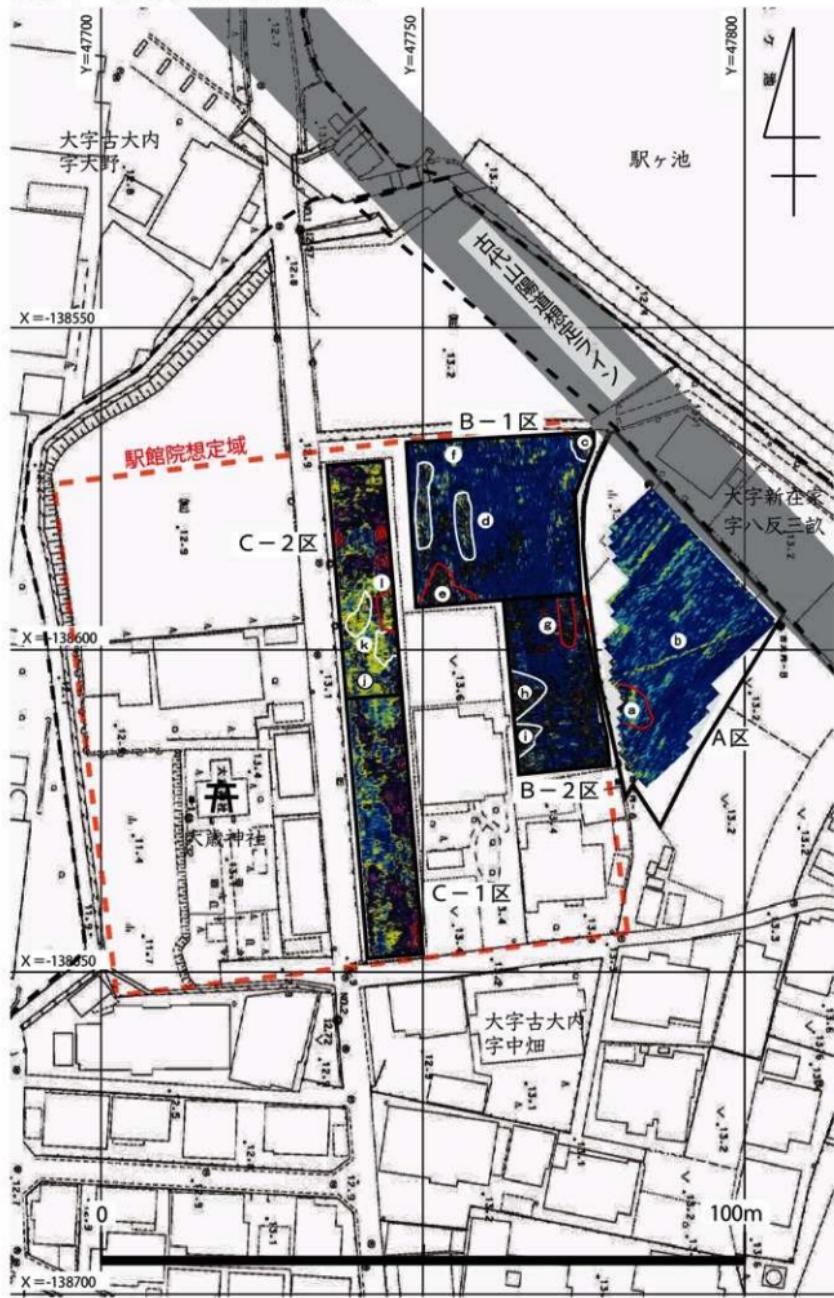
図版2 長坂寺遺跡の探査全体図



図版3 古大内遺跡の探査結果



図版4 古大内遺跡の探査全体図



カラー図版1 長坂寺遺跡航空写真

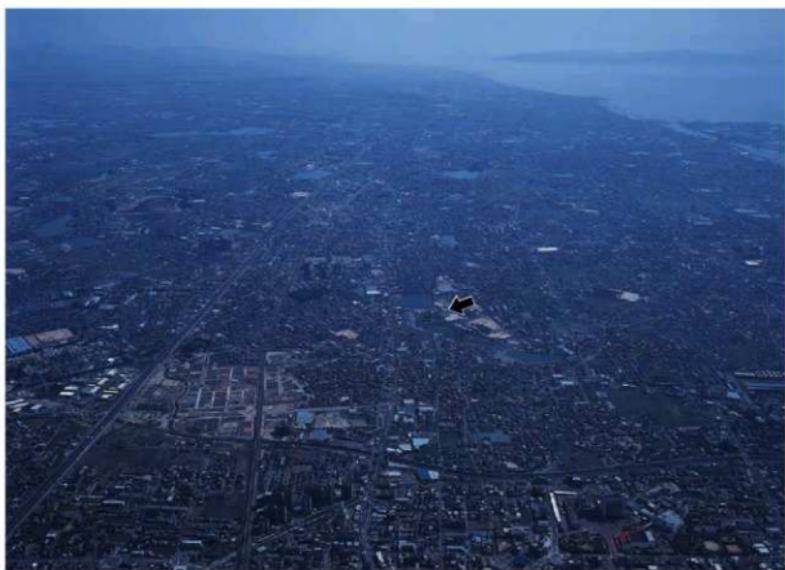


明石市魚住町付近から古代山陽道沿いに加古川方面を望む（矢印が長坂寺遺跡）

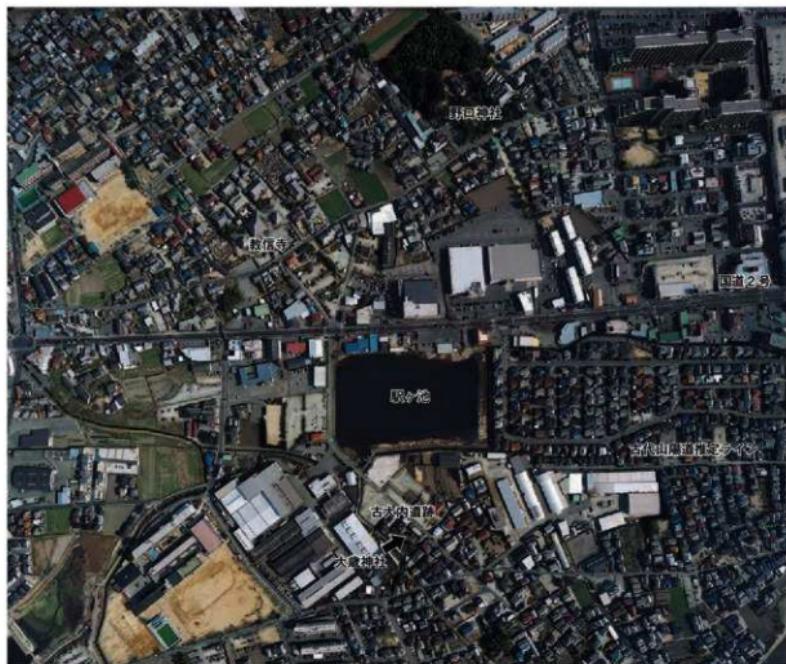


古代山陽道と長坂寺遺跡

カラー図版2 古大内遺跡航空写真



加古川市野口町付近から古代山陽道沿いに明石方面を望む（矢印が古大内遺跡）



古代山陽道と古大内遺跡

写真図版1 古大内遺跡 1～3トレーンチ

(左) 1トレーンチ

SD01

(南東から)

(右) 2トレーンチ

SD01

(南東から)



(左) 2・3トレーンチ

SD01

(南東から)

(右) 3トレーンチ

全景

(南から)



(左) 3トレーンチ

SB01

(北東から)

(右) 3トレーンチ

南端柱穴群

(北東から)



(左) 3トレーンチ

SD02～04

(南東から)

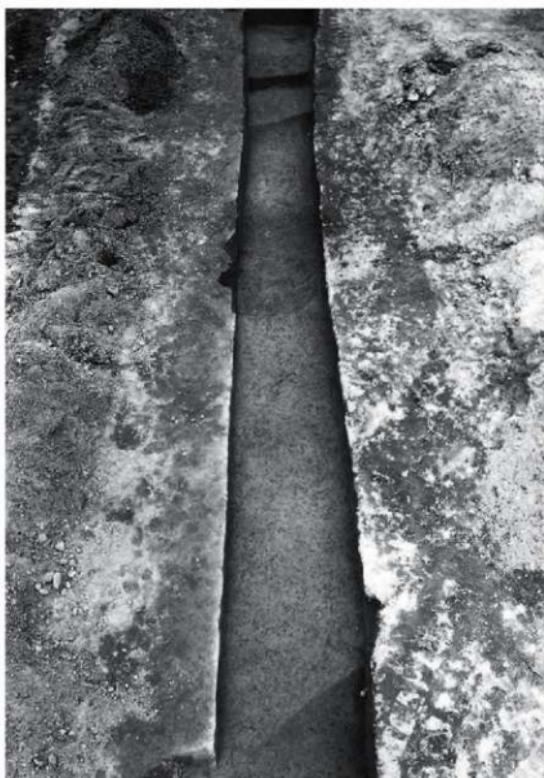
(右) 3トレーンチ

下層 SD07

(南西から)



写真図版2 古大内遺跡 4～5トレンチ



4トレンチ
全 景
(北から)



5トレンチ
上層 SD11
(東から)

写真図版3 古大内遺跡 5トレンチ



写真図版4 古大内遺跡 6トレンチ (1)



6トレンチ
SB02
(東から)



6トレンチ
SD13
(北から)

写真図版5 古大内遺跡 6トレンチ (2)



写真図版6 古大内遺跡 6トレンチ (3)



写真図版7 古大内遺跡 6トレンチ (4)



6トレンチ
SX07 下層
平瓦出土状況
(北から)

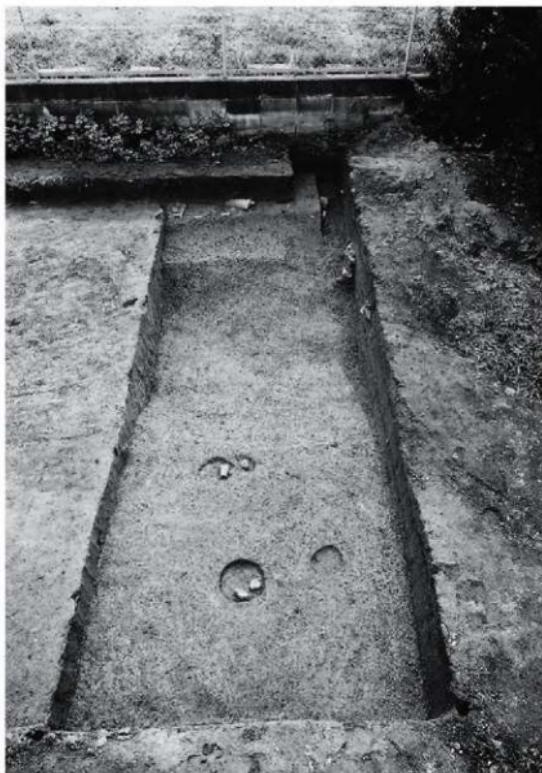


6トレンチ
SX07
土層断面
(南東から)



6トレンチ
完掘状況
(東から)

写真図版8 古大内遺跡 7トレンチ



7トレンチ
SD18
(東から)

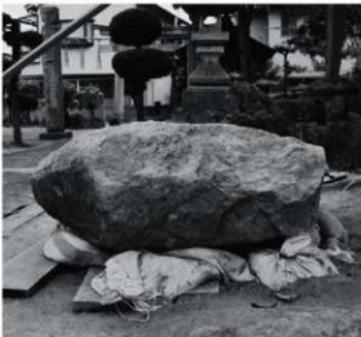


7トレンチ
SD18 西肩
瓦出土状況
(南から)

写真図版 9 大歳神社 唐居敷 (1)



大歳神社所在
石製唐居敷 1
(平面
/上が門の内側)



大歳神社所在
石製唐居敷
(左) 側面
/門の外側より
(右) 側面
/門の内側より



大歳神社所在
石製唐居敷
(方立穴・軸摺穴)

写真図版10 大歳神社 唐居敷（2）

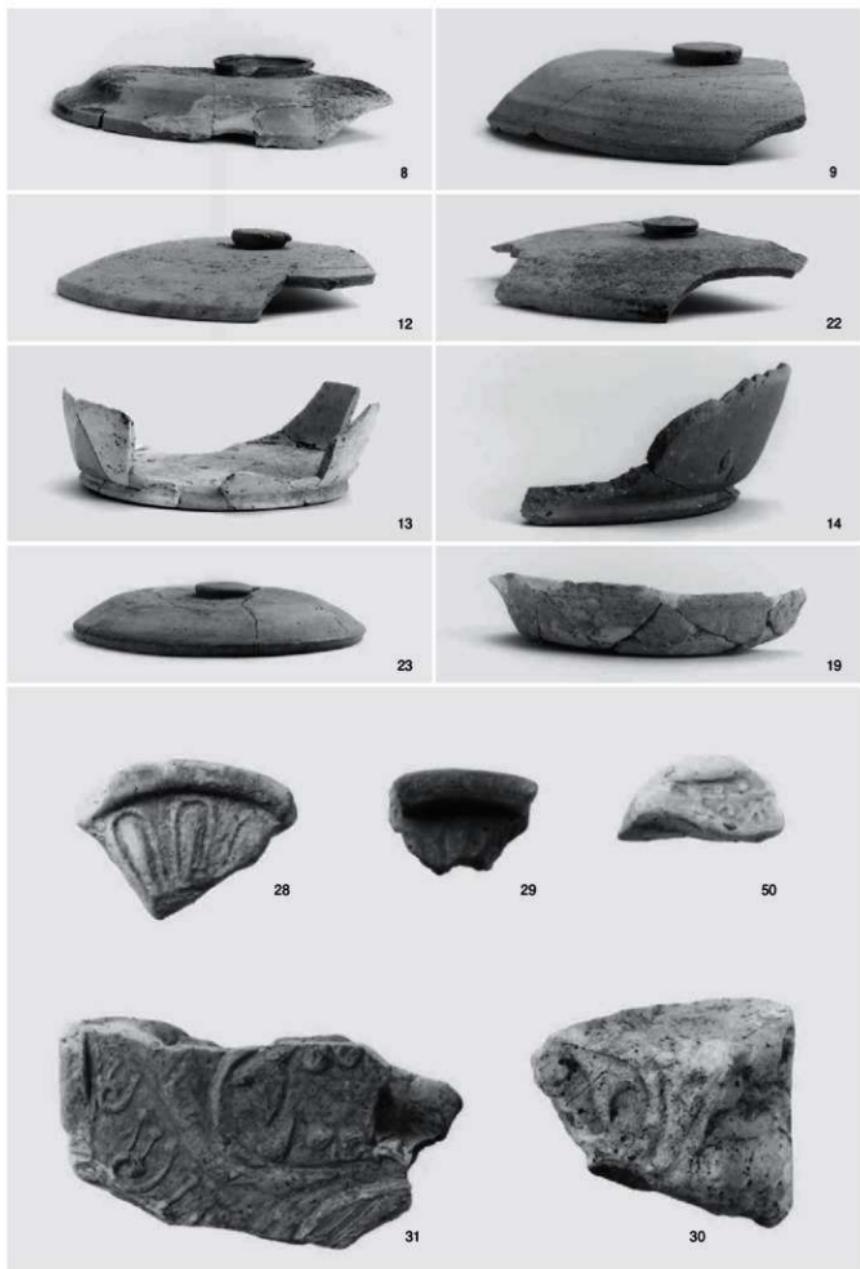


大歳神社所在
石製唐居敷2
(左)側面
(右)底面



大歳神社所在
石製唐居敷2
(平面)

写真図版11 出土遺物（1）



写真図版12 出土遺物（2）



27



32



33

凸面



32



33

凹面



凹面

34



35



凸面

34



35

写真図版14 出土遺物（4）



36



37



38



39



40



41



42



43



45



46



44

写真図版16 出土遺物（6）



47



49



48



20



25



26



51



52



53

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひょうごけんこだいかんどうかんれんいせきちょうさほうこくしょ1							
書名	兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書 I							
副書名								
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第384冊							
編著者名	中川 涉（編集）、山下史朗、中村 弘、青木哲哉、パリノ・サーヴェイ株式会社、パレオラボ東海（伊藤 茂、尾崎大真、丹生越子、廣田正史、小林恵一、Zaur Lomtadze、Ineza Jorjoliani、竹原弘展）							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 TEL079-437-5589							
発行年月日	西暦2010（平成22）年3月15日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古大内遺跡	加古川市野口町古大内	282103	110220	34° 44' 58"	134° 51' 17"	20090115～ 20090117	600m ²	兵庫県内における古代官道に関する調査
						20090310～ 20090329	77m ²	
						20090626～ 20090731	78m ²	
						20090718～ 20090725	1,639m ²	
長坂寺遺跡	明石市魚住町長坂寺	282031	040038	34° 42' 03"	134° 55' 03"	20090112～ 20090115	2,114.5m ²	
						20091025～ 20091028	1,608m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
古大内遺跡	官衙跡	奈良時代	溝 土坑	5本 1基	瓦・須恵器・土師器 ・鉄器・羽口・鐵滓 ・石製唐居敷	賀古駅家推定地 古大内式軒瓦		
		鎌倉時代 平安～	掘立柱建物 溝	2棟 12本	同安窯系青磁・須恵器 ・火打金			
長坂寺遺跡	官衙跡					仮称邑美駅家推定地		

兵庫県文化財調査報告 第384冊

兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書 I

平成22(2010)年3月15日

編集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1
TEL079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印刷 丸山印刷株式会社
〒676-8566 高砂市神爪1丁目11番33号

21教⑩1-032A4